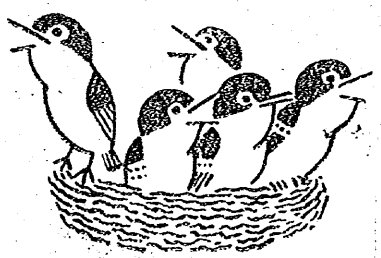
K131.8
5
4a

よみかた四

教師

文部省



K131.8
5
4a

よみかた
四

教師用

文部省

「よみかた四」教師用書目錄

各說

一　富士山……七
二　早鳥……一三
三　海軍のにいさん……二一
四　乘合自動車……二六
五　菊の花……三四
六　かけつこ……三八
七　かぐやひめ……四五
八　たぬきの腹つづみ……五二
九　金の牛……五六
十　蒲洲の冬……六二
十一　錢……六八
十二　神だな……七五
十三　新年……八〇
十四　いうびん……八五
十五　にいさんの入營……八九
十六　雪の日……九四
十七　白兎……九七
十八　たこあげ……一〇三
十九　豆まき……一一二
二十　金しくんしやう……一一七
二十一　病院の兵たいさん……一二二
二十二　支那の子ども……一二九
二十三　おひな樣……一三六
二十四　北風と南風……一三九
二十五　羽衣……一四五

附錄

新出讀替文字一覽……一五三
運筆順序……一六一
鉛筆による書き方指導上の注意……一六五
よみかた四の發音……一六七

綴り方指導要項……二三五

指導の發展段階……二三五
初等科第二學年……二三六
一　指導要項……二三六
二　指導要項例……二三九
三　參考文題……二四七

話し方指導要項……二五四

指導の發展段階……二五四
初等科第一・二學年……二五五

各說

一　富士山

教材の趣旨

秀麗にして崇高雄大な富士山を教材とした韻文である。

ヨミカタでは、春枝がかいた富士山（巻一）に始り、次いで「日本のしるし」（巻二）に富士山が歌はれてゐるが、本巻に至つて巻頭を飾る韻文として正面的にこの山が取上げられ、巻末「羽衣」の側面的な富士と呼應してゐる。

富士山を見ない兒童も、幼時から寫眞や繪畫によつて常にこの山に親しんでをり、ヨミカタでもしばしば掲げられて來てゐるから、兒童には殆どあこがれの對象となつてゐるであらう。いふまでもなく、富士山は詩歌に詠ぜられ、繪畫に畫かれ、その實景に接すると否とにかかはらず、國民は等しく崇敬しておかぬところであり、まさに日本精神の

權化として神格化されてゐる。この靈山の特色を、最も具象的にしかも平明に表現して兒童の憧憬に酬い、國民的性格に培ふところに教材の趣旨がある。

文章

七五調二行五聯の詩である。

第一聯は富士山の美しいことを歌つてゐるが、「どこから見ても、いつ見ても」の修飾句によつて、八面玲瓏四季を通じて山容の秀麗なことをあらはし、名山富士の姿をたたへてゐる。「どこから見ても、いつ見ても」の重韻から來る美しい感じも見のがしてはならない。

第二聯と第三聯は、第一聯の「美しい山」を受けてこれを具象的に叙述したもので、繪畫的な印象を動的に表現したところに特色がある。

白いあふぎをさかさまに、
かけた下から雲がわき、
いはゆる白扇倒さまに懸る山容がくつきりと描かれてゐるが、しかも、

その秀麗な姿の下から雲が湧くといふのであつて、限りなき雄大感をそそる。「雲がわき」と中止形で結んだところに餘情があり、次の聯と不可分の關係に立つ。

第三聯の「すそ引くはての松原に」は、「雲がわき」立つお山の裾を長く引く意で、その蜒々とのび廣がる裾野の果に海岸の松原が夢のやうに續くのである。しかもその海岸には、茫洋たる「太平洋の波が立つ」といふのであつて、雄大な感じはいよいよ高調する。「太平洋」のことばに伴なふ廣大な感じ、「波が立つ」の力ある措辭に注意すべきである。

第四聯は、この富士に對する讃美の聲である。富士山から受ける感じは優美であり雄大であつて、しかもこの優美と雄大が一元的であるところに富士の崇高性が認められる。「たふといお山」といひ、「神の山」といふのは、かうした山容から自然に導き出される感情であるが、それが結晶して國民的信仰にまで高められてゐるのである。

第五聯は、富士は國民の讃仰の的であるばかりでなく、世界の人が讃

美することを歌つてゐる。富士山もとより世界の名山であるが、皇國日本の象徴たる意味に於いて日本一であり、同時に世界をして仰がしめるのである。

取扱の要點

讀むこと　整然とした韻律によつた詩であるから特に發音を正しくし、韻律を生かして讀ませる。讀みが進むに隨ひ富士の姿を頭に描いて讀ませるやうに指導する。それには詩の句の意味と挿畫(掛圖)から受ける感じとをよく結びつけることが大事である。繰返して讀ませ、自ら暗誦させる。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

ことばのおけいこ　三頁(二)の韻文を讀ませ、教材の理會に資するとともに、富士山に對する擬人的な表現を味はせる。

話すこと　文章挿畫(掛圖)を中心とし、次のやうな問によつて話合をさせる。

「どこから見てもとはどういふことでせう。」

「いつ見てもとはどういふことでせう。」

「どこから見ても、いつ見ても、富士のお山は美しいといふのはどういふことでせう。」

「富士山を何の形にたとへてありますか。」

「白い扇をさかさまにかけてごらんなさい。何の形に見えますか。」

「白い扇をさかさまにかけた下から何がわくと書いてありますか。」

「山のすそはどんなになつてゐるか話してごらんなさい。」

「その果はどんなになつてゐますか。」

「富士山を見ると、どんな感じがすると書いてありますか。」

「日本の人は富士山をどんなに思つてゐるでせう。」

「世界の人はどうですか。」

書くこと　**ことばのおけいこ**　三頁(一)によつて文字を正確に書かせる。なほ時間に餘裕があれば全文を書寫させる。

文字の指導　新字・讀替を中心に文字を指導する。「平」「世」「界」は特に筆順に注意する。

注意すべき ことば 文字 語句語法等

アクセント

ふじ(富士)――フジ　ふぢ(藤)――フジ

くも(雲・蜘蛛)――クモ

矯正すべき訛音方言

たふとい――口語では普通「タットイ」といふ。韻文であるから文語系の「たふとい」が用ひ

てある。

世界――「シェカイ」と發音させないやうに注意する。

人――「シト」といはないやうに指導する。

文字

新字――富士山　太平洋（ヘーヨー）　世界

讀替――富士山　太平洋

語句語法

「どこから見ても、いつ見ても」が「富士のお山は美しい」の副詞句となつて、富士を見る時と場所とをあらはしてゐる。

「かけた下から雲がわき」「すそ引くはての松原に」「太平洋の波が立つ」等のおもむきは專ら挿畫の景色と結んで理會させる。

備考

連絡

ヨミカタ一「エヲカキマシタ」、同二「日本のしるし」、**うたのほん下**「富士の山」、**エノホン四**「富士山」と連絡して取扱ふ。

二　早鳥

教材の趣旨

播磨風土記の傳說を童話化した教材で、卷一卷二の童話が卷三から傳說に移行し、本卷では、この說話が「かぐやひめ」「羽衣」とともに國民傳說として主要な役割をもつてゐる。

この早鳥の傳說に採るべき精神は、上代人の雄大無邊際の空想と、積極的な發展精神にある。亭々たる巨木が朝には淡路島をおほひ、夕には大倭島根をおほふといふのは、實にすばらしい空想ではないか。しかもかかる巨木が農民たちに禍をもたらしたのであるが、わが上代人はこの禍にも屈することなく、却つて利用厚生の道を講じてゐる。まさに禍を轉じて福となす國民性のあらはれである。切倒した木からは快速鳥の如く進行する、早鳥といふ舟が作られた。海國にふさはし

い傳説であり、「一檝に七浪を越ゆ」といふが如き、まことに愉快な空想で、上代人の面影が浮かび上つてゐる。この舟によつて都の方へ米や麥などを送つて、日蔭になつて困つてゐた村々も豐かになつたといふ。時艱をよく克服して厚生の道を圖つた上代人の積極的な氣性を見るべきである。

文章

説話は巨木傳説と巨船傳説の二つから成立つてゐるが、その二つの要素は偉大な楠の木の力によつて一貫され、全く不可分なものに構成されてゐる。しかもその偉大な力こそ、いはゆる生々發展の力を具象化するものとも考へられ、國民傳説として意義の深いものを感じさせる。

まづ楠の木の旺盛な成長力が具體的に敍せられてゐる。「たいへんな勢で、ひるも夜も、ぐんぐん」とのび、「今まで見たことも聞いたことも、ないほど」の木になつた。その高さは「空の雲に」とどき、「大きな枝は四

方にひろがつて、どこからどこまでつづいてゐるのか、わからないほど」の巨大なものになつた。しかもこの巨木は、このままにして置いたら、まさにどこまで伸びて行くのか知れないのである。

かういふ巨木であるから、毎朝日が出ると「この木の西がはは、何十といふ村々」が日蔭になり、午後になると「東がはの何十といふ村々」が日蔭になる。これによつて楠の木の大きさが自ら具體化されてゐるのであるが、それよりも我が上代人の抱いたすばらしい空想の具現と見ることができる。

「どうも困つたものだ。」

「お米が半分もできない。」

「なんとかならないものかなあ。」

楠の木が大きいだけにその禍もまた大きい。そこでこの木を切ることになつたのであるが、それにはこの説話を具象化し、兒童に興味あらしめるために、智慧の「おぢいさん」の登場が表現上大切となる。

「こんな大きな木を、切つていいものでせうか。」

は、大木をみだりに切るべからざることを反面に言つてゐるのであるが、それも事情によることで、いはばこの非常の場合、村々を救ふために、智慧の「おぢいさん」は寧ろこの木を切ることが「みち」であると説いてゐる。徒に宿命觀に捉れない我が國民の積極性を見るべきである。

大勢の木こりが長い間かかつてやつと切倒したことにも、切倒した大木を如何に處理するかといふことにも、自ら楠の木の巨大なことが感じられるが、その處置に就いては「くりぬいて舟を作る」といふ例の「おぢいさん」の智慧が必要である。さうして、ここにも我が國民の利用厚生といふ積極面が見られる。

でき上つた舟は、楠の木と同樣「今まで見たことも聞いたこともない」巨船である。大勢の船頭が乘組み、「えいや、えいや」と漕ぐところ以下この説話の興味の項點である。「一かき水をかくと、舟は七つの大波を乘りきつて、鳥のとぶやうに」走るといふのも、上代人らしい空想である。

「なんといふ早い舟だらう。」

「ふしぎだ、ふしぎだ。」

災禍に歎息した大衆は、また船の早さにも不思議の歎聲をもらしてゐる。この謎を説いてくれるものも、例の智慧の「おぢいさん」である。「いや、ふしぎでも何でもない」といひ、「あの勢のよいくすの木で、作つた舟だ、勢のよいのがあたりまへさ」と、楠の木の成長力と、巨船の速さとを結んで、そこに一貫する偉大な「力」を感得し、しかも「切るよりほかにみちがあるまい」といつたことと照應して、「このすばらしい舟になるために、あの木は、ぐんぐんのびたのかもしれない」と、どこまでも積極的な解釋を下してゐる。

最後の早鳥が米や麥や豆を積んで都へ通ひ、村々が豐かになつたことは、禍を轉じて福としたこの説話の結末であり、餘情である。

取扱の要點

讀むこと　かなり長い文章であるから、兒童の力に應じ適當に分節して讀ませてよい。　發音

を正し確實に讀ませる。讀みに隨ひ、それが大昔の話であることを明らかにし、過滿する雄大な空想を兒童の主體的態度に即して、讀み取らせるやうに指導する。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　まづ楠の木について、その成長の速かなことや、今までにない大きな木になつたことについて話合をさせる。

ことばのおけいこ　四頁(一)の對話を讀ませ、挿畫(掛圖)と連繫してそれを劇的に話させる。

書くこと　**ことばのおけいこ**　六頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字讀替を中心に文字を指導し、特に「勢」「平」「巢」「麥」等は字形筆順に注意する。

ことばのおけいこ　七頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

アクセント

ひ(日)が――ヒガ　ひ(火)が――ヒガ

うみ(海)――ウミ　うみ(膿)――ウミ

矯正すべき訛音方言

一本――「エッポン」と訛る地方では矯正する。

大きな――「オーケナ」と訛る地方では矯正する。

枝――「イェダ」といはないやうに注意する。

ものだ――「モノヤ」の如き方言を矯正する。

いつて――「ユーテ」といはないやうに注意する。

びつくり――「ビックラ」と訛らないやうに注意する。

しよう――「ショー」といはないやうに注意する。

ですから――「デスガラ」と濁る地方では矯正する。

できました――「デケマシタ」といはないやうに注意する。

こんど――「コント」といふ地方では矯正する。

といひました――「イヒマシタ」の上の「ト」を脱落する地方では特に注意して指導する。

大工――訛音が多いから注意する。

集めて――「アツベテ」と訛る地方では矯正する。

なんといふ――訛音が多いから注意する。

だらう――「ヤロ」「ジャロ」「ヅラ」「ダラ」等方言が多い。何れも矯正する。

つけよう――「ツキョー」と訛る地方では矯正する。

です――「ドス」「ダス」などと訛らないやうに注意する。

文字

新字――勢（イキオイ）　村々　午後　困つた　半分　集めて　名　麥　豆

讀替――午後　大木　大勢（ゼー）　大工　通ひ

語句語法

「何年かたつうちに」「つづいてゐるのか」「何年かたつて」等の「か」は何れも疑問の助詞である。

次の例の「見たことも聞いたこともない」は修飾語で「大きな」の意味を強めるものである。

今まで見たことも聞いたこともないほど大きな木になりました。

今まで見たことも聞いたこともない大きな舟でした。

「日かげ」「午後」「ちゑ」「木こり」「くりぬいて」「かい」「すばらしい舟」「ゆたか」等の語句は文に即して理會を確めろ程度に説明を必要とする。

「かいをそろへて一かき水をかくと、舟は七つの大波を乘りきつて」は舟の早いことを具體的に表したもので、鳥のとぶやうに走ります」はその早さの比喩である。

備考

參考資料

本課の出典は、遠島の傳説として播磨風土記明石郡逸文に出てゐる。

明石の驛家。駒手の御井は、難波の高津の宮の天皇の御世に、楠井の上に生ひたりき。朝日には淡路嶋を蔭ひ、夕日には大倭嶋根を蔭ひき。仍りて其の楠を伐りて舟に造れるに、其の迅きこと飛ぶが如く、一檝に七浪を去き越えき。仍りて速鳥と號けき。是に、朝夕此の舟に乘りて、御食供へまつらむと爲て、此の井の水を汲みたりしに、一旦、御食の時に堪へざりき。故、歌を作みて止みき。唱に曰く、

住の吉の、大倉向きて、飛ばばこそ、速鳥と云はめ、何か速鳥。

三　海軍のにいさん

教材の趣旨

軍艦の繪（卷一）に出發し、「軍かん」「お話」（卷三）によつて、次第に海軍についての兒童の關心を呼起して來たのであるが、本課は更に海軍軍人となつてゐる兄の歸省によつて、一家が賑はふ喜びの生活を主題とした。

「にいさんの入營」と相俟つて國防思想に培ふ教材である。

海軍のにいさん、それは一家にとつての大なる誇である。そのにいさんが休暇を取つて歸つたので、急に一家が喜びに滿ち、團欒和樂する

光景が叙せられてゐる。わけでも子どもである弟の喜びは大したもので、常にその行動が中心となつて出てゐる。最後に兄の乘つてゐる航空母艦が話題となるが、これは「軍かん」「お話」の航空母艦と連絡して、帝國海軍の精鋭をしのばせるものである。

前課「早鳥」の後を受け、現代のわが海軍に主題を求め、巨船の傳説をもつてゐる國民が、現代に於いて世界に雄飛する海軍國としての誇をもつことを思はせるやうな排列になつてゐる。

文章

「ぼくが本を讀んでゐると、くつの音がして、だれかうちへはいつて來ました。出て見ると、海軍のにいさんでした」で筆が起してあるが、これは兒童の程度に卽した自然な叙述である。

兄の歸省がもたらした喜びこそこの文章の主題である。まづおかあさんが裏の畠からかけて來て、頭から手拭を取りながら「よくかへつて來ましたね」とうれしさうにいひ、やがてお茶を入れて「ほんたうにしばらくでしたね。まあ、一つおあがり」といふところなど、母親らしい情愛がしみじみと感じられる。

これに對して勇の喜びは子どもらしい喜びである。兄のまはりを飛歩くところや、「ぼくも大きくなつたら、海軍だよ」といひだすところや、「それはいい。大ぢやうぶなれるよ」といはれて、夢中になり、突然兄の帽子をかぶつて、「かはいらしい水兵さんだぞ」とおとうさんにいはれるあたり、全く子どもの無邪氣そのものの表現であり、帽子の文字を讀むあたりの兄との對話も自然である。

勇はにいさんとお風呂にはいつた。それから後は一家團欒の夕飯である。話題は兄によつて出され、その乘つてゐる軍艦加賀の話に花が咲く。「軍かんといつても、加賀などは、動くひかうぢやうのやうなものですよ」といふ兄の巧みな比喩に、「ほう、ほう」と父は父らしく感心して、聞いてゐる。最後の「ねる時には、ぼくはにいさんと並んでねました」は、前の「にいさんといつしよに、おふろにはいりました」と照應して、兄を

珍しがる勇の喜びをあらはしてゐる。

取扱の要點

讀むこと　まづ卷三の「軍かん」を思ひ出させて讀みの指導に入る。この種の文は兒童には容易に讀めるから特に讀む力を練るやうに努める。なほ會話の部分は話すやうに讀ませ、文全體に流れる和樂の氣分を味ははせて行く。

發音、文字、語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　ことばのおけいこ八頁(一)を讀ませ、挿畫(掛圖)と連繫して對話を劇的に話させる。なほ兒童の體驗たとへば陸軍のにいさん、戰地のおとうさん、をぢさんの歸還等について話合をさせ、綴り方への連絡を考慮する。

書くこと　ことばのおけいこ九頁(二)によつて文字を正確に書かせ、書取をさせる。なほ時間に餘裕があれば全文を書寫させる。

文字の指導　新字を中心に指導する。特に「黑」「書」「帝」は字形と筆順、「字」は字義につき注意を要する。

ことばのおけいこ十頁(三)によつてカナヅカヒ「さう」及び「ゐ」と「い」について注意させる。

注意すべきことば　文字、語句、語法等

矯正すべき訛音方言

本を――「ホンノ」と訛る地方では矯正する。

にいさん――方言が多い。矯正につとめる。

ざしき――「ダシキ」「ジャシキ」その他方言が多い。矯正を要する。

手ぬぐひ――「テノゴイ」「テヌゲー」等と訛る地方では矯正する。

よく――「ヨー」といはないやうに注意する。

うれしくて――東京では「ウレシクッテ」といふが、「ウレシクテ」を標準とする。

大きくなつた――「オーキューナッタ」といはないやうに注意する。

いい子――「エエ子」といはないやうに注意する。

おもしろい――「オモロイ」「オモショイ」などといふ地方では矯正する。

廣い――「シロイ」と訛らないやうに注意する。

いつても――「ユーテモ」といはないやうに注意する。

文字

新字――讀んで　頭　黑く　字　書いて　帝テー國　加賀

語句語法

「ぼくも大きくなつたら海軍だよ、にいさん」は倒置的ないひかたで、喜びの感情を如實にあらはしてゐる。

「大ぢやうぶなれるよ」「水兵さんだぞ」「來ましたね」等の「よ」「ぞ」「ね」は感動の助詞でここでは親しみの情を強く出してゐる。

備考

連絡

よみかた三「軍かん」及び「お話」と關聯する。

うたのほん下「軍かん」とも關聯して取扱ふ。

四　乘合自動車

教材の趣旨

ヨイコドモ下「エンソク」、ヨミカタ卷三「川」及び「海」と關聯して、鄕土的色彩に富んだ教材である。

本課は、二年生の男兒がホ町のをばさんのところへ乘合自動車に乘つて行く道々の觀察を敍したもので、自動車は松並木を通り、田圃道に出で、サ村から山道に入り、峠を越え、川を渡り、ホ町の郵便局前に到着する。その間、車窓に見える風景や車内の乘客の樣子などを興味を以て眺め、仔細に敍してゐる。

鄕土に關係ある事項としては、ホ町・サ村・松並木・山道・峠・海・川・橋・郵便局・汽車・乘合自動車等がある。ヨイコドモ下「エンソク」の天神山・荷馬車・自動車・坂道・橋・汽車・氏神樣・森・火ノ見ヤグラ等と連繫して鄕土の觀察に資すべきである。

しかも自然の觀照としては、秋の山道の情景、峠から眺めた海の風景、道ばたで餌を拾ひ、自動車の音に逃げだす鷄などがある。また女の子を見送る友だちや、運轉手同志の挨拶や、席をあけてやつたおばあさんとの對話などが、その間に交錯して教材を潤ひのあるものにしてゐる。

文章

乘合自動車に乘つた時の見聞を敍した文章で、いはば兒童の紀行文である。

この種の文章としては地名が必要であるが、低學年教材の特色とし

て全國共通の鄕土的觀點に立ち、あへて固有名詞を附せず、暫くホ町・サ村を以て代表させた。ホ町・サ村といふのはたとへば本田町・坂井村等適當に具體化して取扱つてよい。

自然の觀照としては、松並木を通り拔けたところで稻を刈る田園風景を點じ、車を引く牛や、ルックサックを背負つた中學生に、秋日和を想像させる。道がだんだん登りになつて、山路が急勾配になることを、自動車が大きな音を立ててぐんぐん登り、兩側から差出た木の枝が窓に屆きさうであることによつて具體的にあらはしてゐる。秋の山路の美しさは、「黃色や赤い木の葉で、車の中が明かるいほどでした」と述べ、峠では中學生の「海が見える」のことばを耳にして、山と山との間に光る海の瞬間的風景を捉へてゐる。

女の子が自動車に乘ると、友達が四人見送りに來てゐて「さやうなら、さやうなら」といつて手を振つてゐる。また自動車が行違ふと運轉手は元氣に挨拶してゐる。中でもおばあさんとの對話のところは最も

精彩に富んでゐる。「ふろしきづつみをさげてゐましたが、結びめから、小さな日の丸の旗がのぞいてゐました」は、出征するおばあさんの孫の話の伏線になつてをり、非常時局の色彩がかうした車中に巧みに漂はせてある。

道の眞中に餌を拾つてゐた鷄が、運轉手のラッパに驚いて、右と左へ逃げるところも實際によくある風景である。自動車が郵便局の前で止ると、三郎が迎へに來てゐる。ただ「笑ひながら走つて來ました」と叙し、自分の嬉しさを文の內面に包んでゐるのは餘情がある。

なほ挿畫は、自動車道路を中心に繪卷物のやうにあらはしたもので、文と密接に連絡させてある。

取扱の要點

讀むこと　發音を正しく指導し、特に事物の名「乘合自動車」「ホ町」「松並木」「ルックサック」等の語は明瞭に讀ませるやうにする。讀みが進むに隨ひ挿畫と結びつけて地形を具體的に想像させるやうに讀ませる。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　文章挿畫掛圖を中心とし、**ことばのおけいこ**十一頁(一)を話題として、次の如き問によつて話合をさせる。

「この子どもは何に乘つて出かけましたか。」

「まづどんなところを通りましたか。」

「たんぼでは何をしてゐるのを見ましたか。」

「何を追ひこしましたか。」

「自動車がサ村の入口で止つた時どんな人が乘りましたか。」

「それから道はどんなになりましたか。」

「坂道はどんな景色でしたか。」

「峠とはどんなところをいふのですか。」

「峠で何が見えましたか。」

「峠をおりたところで誰が乘りましたか。」

「友だちがどんなにしてゐましたか。」

「それからどこへ來ましたか。」

「橋を渡らうとするとき、どんなことがありましたか。」

「ホ町に近いところで誰が乘りましたか。」

「おばあさんは何を持つてゐましたか。」

「この子どもはおばあさんにどんなにしてあげましたか。」

「おばあさんはどこへ行くのですか。」

「道のまん中に何がゐましたか。」

「ホ町へはいつてどこで自動車が止りましたか。」

「をばさんのうちから誰が迎へに來てゐましたか。」

書くこと　**ことばのおけいこ**十三頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字讀替を中心に文字を指導し、特に「稻」「徒」「征」「孫」は字形筆順に注意する。

ことばのおけいこ十五頁(三)によつて「え」と「へ」及び「たう」のカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

アクセント

はし(橋)——ハシ　はし(箸)——ハシ　はし(端)——ハシ

矯正すべき訛音方言

きのふ——「キニョー」「ギンニョ」などといはないやうに注意する。

車——「クゝグマ」「クーマ」などといはないやうに注意する。

せおつた――東京では「ショツタ」といふが、「セオツタ」を標準とする。
見える――「メール」といはないやうに注意する。
光つて――「シカツテ」と訛る地方では矯正する。
さやうなら――「サイナラ」といはないやうに注意する。
ふろしき――「フルシキ」と訛る地方では矯正する。
にはとり――「ニワツトリ」といはないやうに注意する。
ゑさ――「エバ」「エド」など方言が多い。矯正を要する。
ひろつて――「ヒラツテ」といはないやうに注意する。
おりる――「オチル」といふ地方では、「おりる」と「おちる」とを區別して指導する。

文字

新字――乘合(アイ)自動車　稲(イネ)　生徒(セイト)　友(トモ)だち　元(ゲン)氣　結(ムス)びめ　席(セキ)　腰(コシ)　出征(シュッセイ)

讀替――松並木　女(オンナ)　出征(シュッセイ)

語句語法

「結びめから、小さな日の丸の旗がのぞいてゐました」は擬人的ないひあらはしである。
「さかんに」「すれすれに」「まもなく」等の副詞に注意し、文例によつて會得させる。

備考

連絡

ヨイコドモ下「エンソク」と連絡して取扱ふ。
よみかた三「川」及び「海」と關聯があるから取扱に考慮する。

（以上　十月）

五　菊の花

教材の趣旨

ヨイコドモ下「メイヂセツ」と緊密に連絡して、菊花の香高き秋の日に明治節を迎へ、新日本を建設し給うた明治天皇を追慕し奉る心をあらはした教材である。

秋は人の心を清澄にする。この秋を代表して、色も香も氣高く美しく咲く菊の花は尊い御紋章に象られ、又明治節の頃が花の盛りである關係上、菊といへば明治天皇をしのびまつるのがわが國民の至情である。

學校園で栽培された菊は、教師と兒童の丹誠によつてみごとに咲いたであらう。幾十を數へる鉢植の菊は、馥郁たる清香を放つて講堂を飾り、明治節の儀式は嚴かに擧げられる。本教材はこの儀式に參列した兒童の心を心として、明治天皇の御盛德を仰ぎ奉らしめるものに外ならない。

文章

七五、二句四聯の詩で、整然たる形式は自ら莊重であるが、その中にも子どもらしい感情のこもつた韻文である。

第一聯は、清澄な秋の日にかをり高く咲く菊の花を點出して、明治節を迎へる喜びを歌つたものである。

第二聯は、明治節に際して、特に天皇陛下の御祖父君にあたらせ給ふ明治天皇の御盛德を仰ぎ奉る心を歌つたもので、天皇陛下のおぢいさまの一句に、子どもらしい敬慕の情が強くあらはれてゐる。かういふ表現を手がかりとして、萬世一系にあらせられる皇統を兒童に生活的に理會せしめ得るのである。

第三聯は、色も香も清く美しく咲きほこる菊の花を見て、それが皇室の御紋章であることを思ひ浮かべるとともに、われわれの日頃愛好す

る花であることを叙し尊嚴の中に國民としての親しみをたたへた情が表現されてゐる。

第四聯は天皇陛下の御祖父君にあたらせ給ふ明治天皇に、この菊の花を捧げて敬慕の情を子どもながらにあらはさうといふ心の表白である。「天皇陛下のおぢいさま」は第二聯の反復であり、「明治のみかどにささげませう」も、同じく第二聯の「明治のみかどをあがめませう」に對して、對句的に反復したものであつて、ここにこの詩の莊重な統一感が見出される。

取扱の要點

讀むこと、莊重な韻文であるから、特に發音を正しくし、韻律を生かして讀みを指導する。落着いて靜かに讀ませるやうにし、朗讀を多くして暗誦に導くやうにする。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　學校園または鉢植の菊、家庭の菊について話合をさせる。

書くこと　ことばのおけいこ十七頁(二)によつて明治節について話合をさせる。

ことばのおけいこ十五頁(一)によつて全文を正確に書かせる。

文字の指導　新字讀替を中心に文字を指導し、特に「菊」「節」「皇」の字形筆順に注意する。

注意すべきことば、文字語句語法等

アクセント

さく(咲)――ザク　さく(裂)――サク

矯正すべき訛音方言

たふとい――口語では普通「タットイ」といふ。韻文であるから、文語系の「たふとい」が用ひてある。

文字

新字――菊　明治節(メージセツ)　天皇陛下(テンノーヘーカ)

讀替――明治節

語句語法

「はれわたり」「花咲く」「みかど」「あがめ」「たふとい」「ささげ」等の語は何れも文語系のことばで、普通の話しことばとして用ひることは少いが、特に尊嚴を示す韻文として用ひてある。

「おぢいさま」――「さん」を標準とするが、特に「神さま」「天神さま」「宮さま」のやうに最大の敬意をあらはす場合に限つて「さま」を使用する。ここもその例である。

備考

連絡

ヨイコドモ下「メイヂセツ」と密接に連絡して取扱ふ。

自然の觀察四「きく」、うたのほん下「菊の花」と連絡して取扱に考慮する。

六　かけつこ

教材の趣旨

卷二「アシタハウンドウクワイ」の發展として、運動會當日の徒競走の情景をあらはしたものである。

運動會に於いて、兒童は玉入れやだるま送りの如き團體遊戯にも興味を覺えるであらうが、全力をつくして走る徒競走には特別な關心を持ち、心を躍らすのである。徒競走は兒童の赤裸々な實力の競爭であつて、自分の力以外のものに賴ることはできない。それで自己の力に對する自信と不安が常に交錯する。このやうな心を抱きつつ、自分の

出場する徒競走の順番の來るのをひそかに待ちまうけるのである。

競走中は、無我夢中で走る。しかし途中で追ひこされると、これはだめだと氣を落す。その氣持を救ふものは「負けるものか」といふ強い精神力である。たまたま何かにつまづいて轉んだやうな場合には、走る氣力を失つて競走を中止しがちであるが、その弱氣にうち勝つて最後まで走り通すには、旺盛な精神力が必要である。

本教材はかうした精神力に培ふことを目標とするが、しかも家庭に於ける父兄の愛育と、學校に於ける教師の激勵とをからませ、慈愛の中に兒童を包んで、錬成の實を擧げようとするところに、表現及びことばの思考感動を主とする國語教材としての覗ひどころがある。

なほ本教材は、兒童の體驗記錄として生活に卽した文章であるから、綴り方へも直接に結びついてゐる。

文章

卷二「アシタハウンドウクワイ」の發展としてその生活の一部面を表

現したもので、綴り方と密接に連絡すべき文章である。

兒童の作つたこの種の文章を見ると、多くは全體に關する羅列的な叙述に終り、體驗を具體的に表現したものが少い。これらの點から、本文は讀み方の教材であるとともに、また綴り方の模範文として指導に工夫すべきである。讀み方教材であるから、兒童の作品に比べれば程度はやや高いが、どこまでも兒童自身の立場から主體的に端的に表現されてゐる。

一年生の旗取がすんで「ぼくたち」の徒競走になつたといふ起筆を受けて、文は忽ち緊張した場面に移る。出發線の挿畫はここを示したものであるが、兒童の姿勢のまちまちであるのは、二年生でまだ十分訓練づけられてゐないものと見るべきである。出發線に並んだ簡潔な叙述、「用意」「どん」の寫聲的手法、「先生の聲」の名詞止、「聞くが早いか」のいひまはし等、叙述は變化に富んでゐる。

二人の學友に追越されて、「負けるものか」とがんばる太郎の意氣、ここに運動精神の片鱗が示されてゐる。「早く、早く」「しつかり」と叫ぶ應援の聲も、「ごちやごちやになつて聞えます」「もう何も見えません」と現在法を用ひて緊迫した樣子を生かし、何かにつまづいて轉んだところでは、「しまつた」「よさうか」と刹那的の氣持をもらしながら、遂に父の言つた「負けてもよいから、しまひまで走れ」といふことばを思ひ出して反省しつつ走つた。この精神こそ本課の眼目とするところで、そこには太郎の不屈の精神も見え、家庭と學校との連絡も巧みに取入れてある。

「太郎君、えらいぞ。ころんでも、よくしまひまで走つた。かんしん、かんしん」といふ先生のことばは、全くこの運動精神に對する賞讃の辭であつて、最後まで走り續けた意志の强さに酬いたものである。これらの點をよく讀取らせて運動精神に培ふとともに、兒童の實際に生かすやうに指導すべきである。

取扱の要點

讀むこと　運動會に於ける體驗を話合させてから讀みの指導に入る。運動會の緊張した叙

途であるから發音を正しくするとともに、きびきびした語調で讀ませるやうに指導する。

それには範讀に於いて特に注意することが大切である。

ことばのおけいこ 十八頁(二)を讀ませ、本文との關聯を明らかにし、理會に資する。

話すこと　ことばのおけいこ 二十一頁(四)によつて運動會にしたことを話させる。

「運動會にはどんなことをしましたか。」

「まり入れのやうすを話してごらんなさい。」

「綱引のやうすを話してごらんなさい。」

「かけつこにはどんなにして走りましたか。」

等の如き問によつて體驗を話させる。

また文章挿畫(掛圖)を中心とし、次の如き問によつて話合をさせる。

「太郎さんたちはどんなにして並びましたか。」

「みんなは『用意』『どん』でどうしましたか。」

「二人に抜かれた時、太郎さんはどう思ひましたか。」

「さうしてどうしましたか。」

「どんなにおうゑんの聲が聞えましたか。」

「夢中で走つてゐる時、太郎さんはどうしましたか。」

「すぐはね起きて見るとどうなつてゐましたか。」

「太郎さんは、その時どう思ひましたか。」

「よさうかと思つた時、太郎さんは何を思ひ出しましたか。」

「おとうさんは何とおつしやつたのですか。」

「そこで太郎さんはどうしましたか。」

「見てゐる生徒は何といひましたか。」

「太郎さんはどうしましたか。」

「先生は、何といつてほめて下さいましたか。」

「太郎さんのどこがえらいと思ひますか。」

書くこと　ことばのおけいこ 十八頁(一)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜に書取をさせる。

文字の指導　新字を中心に指導し、「線」「意」「聲」は特に字形筆順に注意させる。

ことばのおけいこ 二十頁(三)によつてカナヅカヒの誤に氣づかせ、訂正させる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

矯正すべき訛音方言

かけつこ——方言が多いから注意して指導する。

ものか――「モンカ」といふ傾向があるから注意を要する。

見えません――「メーマセン」と訛る地方では矯正する。

つまづいて――「ゲツマヅイテ」といはないやうに注意する。

笑つてゐる――「ワロートル」「ワラッチョル」などといふ地方では矯正する。

文字

新字――線　用意　聲（コエ）　追ひ　負ける

語句語法

「用意」「どん」「負けるものか」「早く早く」「しつかり」「しまつた」「よさうか」「わあ」等の如き極めて短いことばによつて瞬間的事象があらはされてゐることに注意する。

「一生けんめいに走りました」「む中で走りました」の「一生けんめいに」「む中で」の副詞につき、文例によつて具體的に指導する。「一生けんめい」は語原的には「一所懸命」であるが、日常のことばとしては「イッショー」と長くいふところから、「一生」の字があてられるやうになつたものである。

備考

連絡

ヨミカタニ「アシタハウンドウクワイ」、**ヨイコドモ上**「ウンドウクワイ」、**うたのほん下**「かけつこ」と連絡して取扱ふ。

七　かぐやひめ

教材の趣旨

わが國物語文學の祖といはれる竹取物語は、美しい童話的な傳說を骨子とし、平安時代人の現實生活によつて具現した小說であるが、本教材は專らその童話的傳說的要素を取上げて、兒童の心情に適應する說話としたものである。隨つてこの教材には、兒童の教育上頗る不適當であるかの求婚に狂奔した五人の貴公子や、朝廷への入內の話などのことは當然省略され得るのであつて、いはば小說竹取物語が原據としたと思はれるかぐや姫傳說に却つて近づくものといふべきである。

文章

教材は大體三段から成つてゐる。第一段は竹の中から拾はれたか

ぐや姫が、方々から求婚されてこれを斷つたところまで、第二段は竹取のおぢいさんがかぐや姫から素姓を明かされ、月の世界から迎へに來ることを聞かされて、これを引止めようと工夫したところまで、第三段はかぐや姫が天人に迎へられ昇天するところまでである。

この說話の興味は、傳奇的、幻想的なところにある。根もとの光る竹の中から小さな女の子を見つけたことや、手のひらの上にものせられるやうな小さな女の子が三月程で十七八ぐらゐの美しい娘になり、しかも光るやうに美しく家の中も明かるいほどなのでかぐや姫と名づけたことなど、童話としての興味が深い。「私はどこへもまゐりたうございません」と方々からの求婚を斷つてゐるが、これは說話が更に發展する契機であり、やがて月の出る晩になると月を眺めて深く考へ込むやうになつたことや、八月の十五夜も近くなつたある夜聲をたてて泣いたことなどが、これと照應して話はだんだん發展して行く。

おぢいさんや、おばあさんが大騷ぎをし、「なぜ泣くのか」と聞かれてかぐや姫はとうとう素姓を打明け、月の世界へ歸らねばならないといふ。このことばを聞いて、おぢいさんは驚きながらも姫を決して渡さないと決意し、引止策を講じようとして殿樣に申し出るのであるが、果してそれが効を奏するであらうか。

十五夜になると、殿樣が家來たちを遣はして家の周圍を警護させる。おばあさんが締切つた部屋の中でしつかりとかぐや姫を抱き、おぢいさんが入口に立つて番をしてゐる。ものものしい警戒ぶりも興味深いことである。

「夜中ごろになると、急にお月さまが十も出たかと思ふほど、あたりが明かるくなりました」以下幻想的興味はいよいよ高調する。「さあ、來たぞ」と勢込んで弓に矢をつがへた家來たちも急に手足の力が失せてどうすることもできない。天人が下りて來ると、締切つた戸がひとりでに開き、おばあさんの手に固く抱きしめられてゐたかぐや姫はひとりでに外へ出て行く。もう誰の力でもどうすることもできず、堅い警護

も何の効も奏しなかつた。

かぐや姫の別離のことばは哀感が深い。「とうとうお別れしなければならない時がまゐりました」は、前に素姓を打明けた時述べた「私は、お二人にお別れするのが、何よりも悲しうございます」を受けて、老人夫婦の恩を謝し、「どうぞ、月の夜には、私のことを思ひ出してください。私も、あの月の世界から、お二人を拜んでをりませう」と優にやさしいことばを殘して昇天する。始から終まで幻想的であるとともに、抒情詩のやうな美しい物語である。挿畫も表現に卽應して夢幻的であり、しかも情味豐かにあらはされてゐる。

取扱の要點

讀むこと　長文であるから幾段かに分節して取扱ひ、然る後綜合的に全體を通じて讀ませる。發音を正し、靜かに落着いて讀ませるやうにする。範讀を多くして正確に讀ませ、進んでは物語の面白さを感ぜしめることが大切である。それには常に說話の筋をとらへさせるやうに仕向ける。

話すこと　文章挿畫掛圖を中心として、次のやうな問によつて話合をさせる。

「ある日、竹取のおぢいさんは何を見つけましたか。」

「その竹の中に何がゐましたか。」

「おぢいさんは、その子をどんなにして育てましたか。」

「その子はどんなに大きくなりましたか。」

「おぢいさんは、その子に何と名をつけましたか。」

「世間では、かぐやひめの美しいことを聞いてどうしましたか。」

「かぐやひめは、いつもどういつてことわつてもらひましたか。」

「その後、かぐやひめは月の出る晩になるとどうしましたか。」

「八月の十五夜が近くなると、どうしましたか。」

「かぐやひめはなぜ泣いたのでせう。」

「かぐやひめのいふことを聞いて、おぢいさんは何といひましたか。」

「おぢいさんは、考へに考へた末どうしましたか。」

「とのさまは何とおつしやいましたか。」

「いよいよ十五夜になると、とのさまはどうしましたか。」

「おばあさんとおぢいさんは、どんなにしてゐましたか。」

「夜中頃になると、あたりがどんなに明かるくなりましたか。」

「弓に矢をつがへてゐたとのさまの家來たちは、どんなになりましたか。」
「天勢の天人がおりて來ると、かぐやひめはどうなりましたか。」
「かぐやひめは、おぢいさんとおばあさんにどういひましたか。」
「かぐやひめが天へ昇つて行く樣子を話してごらんなさい。」

書くこと　ことばのおけいこ二十一頁(一)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜に書取をさせる。

文字の指導　新字讀替を中心に文字を指導する。漢字は次第に複雜になるから「嫁」は女家、「悲」は非心のやうに、適當に分解して構造を明らかにし、筆順に注意させる。

ことばのおけいこ二十三頁(二)によつてカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

矯正すべき訛音方言

ざる——方言が多いから注意する。

見つけました——「みつけ」を「メッケ」と訛らないやうに注意する。

十七八——「ジー七八」「ズー七八」等の訛音を矯正する。

のて——「ナデ」「ガデ」「トデ」「ノンデ」「ンテ」等訛音が多いから矯正する。

おまへ——「オマイ」「オメー」などといはないやうに注意する。

ひとりでに——「ヒトイデニ」といはないやうに注意する。

からだ——「カダラ」といふ地方では矯正する。

文字

新字——育て　嫁　晩　眺めて　泣き　悲しざう　迎へ　お別れ　安心　申(モー)し

守らせる　弓矢　番　ご恩

讀替——世間　安心　一間　夜中

語句語法

「考へに考へたすゑ」——一種の成句的なことばであるが、これを兒童に理會させるには、「待ちに待つたすゑ」「さがしにさがしたすゑ」等の類句と比較して考へさせるがよい。

「まゐりたうございません」「悲しうございます」——形容詞的活用の語と「ございます」との連結に注意する。「まゐりたく」「悲しく」が音便によつて、「まゐりたう」「悲しう」となるのであつて、この場合カナヅカヒは「う」である。なほ「うれしうございます」「おめでたうございます」「ありがたうございます」等の類句によつて具體的に指導する。

「けつして」——は次の如き例によつて必ず打消のことばと結んで用ひられることに注意する。

けつしてわたさない。

けつして忘れません。

八　たぬきの腹つづみ

教材の趣旨

月に關する美しいかぐや姫の物語から一轉して、同じ月を背景としながら滑稽味の豐かなこの教材に移行する。狸が月に浮かれて腹鼓を打つといふのは、いかにも愉快な、呑氣な、愛嬌のある空想である。空想ではあるが、誰しも一向疑はうともしないほど、われわれの傳統的な感情の中に生きてゐる。この感情こそこの詩のもつ主題である。隨つて狸が腹鼓を打つかどうかといふやうなことを最初から詮議だてするのは當らないことである。どこまでも兒童の主體的態度に卽して教材を味はせ、詩情にひたらせるやうにすべきである。

挿畫はこの詩の趣をさながらに表したもので、これまた科學的な詮

索に陷ることなく、愛嬌のある畫趣を味はせるやうにする。

文章

八五、四句三聯の韻文で、その八は時に七になつてゐるが、全體として韻律に變りはない。

第一聯は、お山の上で親狸が合圖の腹鼓を打つてゐる樣子を想像したもので、「さあさあ、集れ、月が出た。みんなでつづみの打ちくらだ」は、音頭取りの親だぬきらしいことばとして滑稽感がある。

第二聯は、子狸が合圖によつてお山の上に集合する場面を空想したものである。「ぬつくりぬつくり出て來て、輪になつて集つたところに深い感興を覺える。この一聯には重韻が多く用ひられて全體の調子を愉快なものにしてゐる。

第三聯は、お山の上で大勢の狸が輪になつて、月にうかれて愉快に腹つづみを打ちだしたところで、まるい月に、ぽつかり浮かんだ白い雲が情趣を添へて滑稽のうちに詩情が湧く。「ぽんぽこぽんぽこ」はこの詩

の韻律の基調をなすもので、八五調の八はこの擬聲語の音數に外ならない。

取扱の要點

讀むこと　發音を正し韻律を生かして讀ませる。初めはゆつくりと正確に讀ませ、次第に調子を生かすやうにする。朗讀を多くし、自ら暗誦へ導く。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと、相俟つて讀みを確實にする。

ことばのおけいこ　二十五頁(二)の童謠を讀ませ、本教材と聯關して理會に資する。「しようじやうじ」(證城寺)は千葉縣木更津にある寺で、昔狸が多く棲んでゐたといふ傳說があり、今も狸塚が存する。「をしやうさんに負けるな」は「和尙さんの木魚の音に負けず腹鼓を打たう」といふ意味である。詩は野口雨情の作詞である。

話すこと　文章挿畫を中心とし、次のやうな問によつて話合をさせる。

「親だぬきは、お山の上でどうしましたか。」

「すると子だぬきはどうしましたか。」

「さうしてお山へ集つてどうしましたか。」

「空の景色はどうですか。」

書くこと　**ことばのおけいこ**　二十四頁(一)によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば全文を書寫させる。

文字の指導　新字・讀替を中心に文字を指導する。

注意すべきことば　**文字**　**語句**　**語法**　**等**

矯正すべき訛音方言

たぬき——「タノキ」といはないやうに注意する。

腹つづみ——東京地方では「バラズツミ」といふ傾向があるから矯正する。

やぶ——方言の多いことばであるから注意して指導する。

文字

新字——腹つづみ　打ちくら　親だぬき

讀替——木かげ

語句語法

「腹つづみ」「打ちくら」「木かげ」「月にうかれて」——これらの成語的語句については、意味がわかるやう適當に指導する必要がある。「木かげ」を「きかげ」といはないのも成語であるからである。

「ぼんぼこ」「ぬつくりぬつくり」「ずらり」「ぽつかり」等の擬聲擬態の語は、表現を具象化してゐることに注意する。

九　金の牛

教材の趣旨

兒童には「西ハ夕ヤケ」(卷二)以來、あこがれの地となつてゐる滿洲の童話である。外國の童話としてすでに一種の興味を引くであらうが、金の牛といひ、草一本もない海中の島といひ、今一つの島にはみどりの草が一面に生えてゐることといひ、童話的興味は濃厚である。殊に「なんとおいしさうな草だらう。一日たべたいなあ」といつて眺めてゐるうちにおなかが一ぱいになつたといふ空想や、牛はそれにも滿足しないで、島の草をたべたら、どんなにおいしいだらうと自分の身體が金であることを忘れて、海の中へ飛びこみ沈んでしまつたといふ教訓もあつて、短篇であるがよくまとまつた説話をなしてゐる。

滿洲にかうした童話のあることを知つて、兒童はいつそうその國に

對する關心を深め、次課「滿洲の冬」とともに親しみを增して行くであらう。

文章

「これは滿洲の話です」は、以下の話が滿洲の説話であることを指示するとともに、文章としてこの説話の冒頭をなしてゐる。

金の牛は、銀の馬、白い雀、青い鳥等と同樣、説話中の空想的な存在で、特に童話ではかうした色彩によつて感覺的に興味をそそる類が多い。(滿洲では「金の馬」「金の瓜」「金の子供」等、金に因むものが多いのが特色である。)

一本の草もない島から、緑の草が一面に生えてゐる島を眺めて、

「なんとおいしさうな草だらう。一日たべたいなあ。」

と獨りごとを言つてゐると金の牛はおなかがいつぱいになつたが、それに滿足せず、

「ここから見るだけでも、おなかがいつぱいになるのだから、あの島の

草をほんたうにたべたら、どんなにおいしいだらう。」

と考へ、海へとびこんでそのまま死んでしまつた。かうした話の筋に内面的な教訓があるのであるが、兒童に最初からそれを與へようとするのは、すべて童話の趣旨に反するもので、どこまでも敍述の興味に卽して、知らず識らずの間に感得させるやうにすべきである。

全體として對話が少く、敍述形式の上に成立つ童話であるが、その中でも特に金の牛が始めて綠の島を眺める場面と、最後のその島に渡らうとして海へ飛込む場面とが具體的に精寫され、その中間は童話に一般的な反復によつてつながれてゐる。最後の場面は特にこの說話の結尾として力强い表現になつてゐる。

取扱の要點

讀むこと　發音を正しく指導し、話の筋を考へながら讀ませるやうに仕向ける。文字語句を指導し讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　文章掛圖を中心とし、次のやうな問によつて話合をさせる。

「海の中の島に何がゐましたか。」

「それはどういふ島でしたか。」

「そこで金の牛はどうしましたか。」

「向かふに何が見えましたか。」

「その島はどんな島でしたか。」

「金の牛はその島をみてどういひましたか。」

「すると、金の牛のおなかはどうなりましたか。」

「次の日から金の牛はどうしましたか。」

「ところで、金の牛は或日どういふことを考へましたか。」

「さう考へて、金の牛はどうしましたか。」

「海へとびこんだ金の牛はどうなりましたか。」

書くこと　**ことばのおけいこ**二十六頁(一)によつて文字を正しく書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字を中心に指導する。「潟」「洲」「島」はやや複雜であり、又誤りやすい文字であるから、よく字形を觀察させ筆順にも注意する。

ことばのおけいこ二十八頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

ことばの仕事　ことばのおけいこ二十七頁(二)によつて、□の中にことばを入れさせ、そのことばの意味を理會させるやうに指導する。(ことばは「ので」「あちらこちら」「が」「金の牛」「すると」「いつぱいに」「でも」「から」「ほんたうに」「おいしい」である)

注意すべきことば　文字　語句　語法等

矯正すべき訛音方言

たべよう——「タビョー」と訛る地方では矯正する。

たべようと思つて——「思つて」の上の「ト」を脱落する地方では注意する。

いつぱい——「エッパイ」と訛る地方では矯正する。

文字

新字——滿洲(マンシュー)　島　一匹　岩(イワ)

語句語法

「一めんに」「ふと」「どんなに」「いきなり」「すつかり」「そのまま」等の副詞によつて表現が具體化されてゐることに注意する。

備考

連絡

ヨミカタニ「西ハタヤケ」に連絡する。

(以上　十一月)

十　滿洲の冬

教材の趣旨

前課に關聯し滿洲の冬を窓ガラスの氷や樹氷やスケートや氷上の獨樂廻しなどによつて具象的に表現した教材である。

零下何十度といふ滿洲の冬は、ややもすれば酷寒の地として、兒童におもしろからぬ概念的な印象を與へるが、本教材のやうに窓ガラスに張る氷や、珍しい樹氷や、寒さにもめげず、寒ければ寒いほど勇みたつてスケートに熱中する日本の子どもや、頰を赤くしながら氷上で悠揚として獨樂を廻して遊ぶ滿洲人の子どもの話を聞けば、必ずや深い感興を起すにちがひない。しかもそこには酷寒を超越した美の世界があり、元氣な生活がある。かうした教材を讀むことによつて、兒童の滿洲に對するあこがれはいつそう深くなり、親しみはいよいよ加るであらう。

文章

一見無雜作に書かれた隨筆的な文章であるが、しかも全體として統一的な構成がある。

四つの主題が單なる羅列に陷らず、相互につながりを以て發展し、全文が巧みに組立てられてゐる。先づ窓ガラスの氷から樹氷に移るには、「ガラスの氷もきれいですが、じゆ氷といふのはもつときれいです」と、窓ガラスの氷を受けて樹氷がいつそうきれいであることを想はせつつ筆が運んである。又氷や樹氷によつて寒さを具象化しておいて、一轉滿洲に住んでゐる日本の子どもたちの遊びに移つてゐるが、それには次の一文が轉句となつてゐる。

滿洲に住んでゐる日本の子どもたちは、いくら寒くても、元氣よくスケートをします。

の文によつて、自然に日本の子どもの生活に移り敍し、更に滿洲人の子

どもの生活を敍して文章が終つてゐるのである。

窓ガラスの氷の美しさを敍しては、氷の模樣のどれ一つ同じものがないことから白い菊の花が一面に咲き揃つたやうなもの、白い孔雀が羽をひろげたやうなもの、星が並んで光つてゐるやうなもの、その樣々の形狀を比喩によつて具象化し、子どもがその上にいたづら書をすること、書になるとその氷も消えること、次の朝にはまた新しい違つた模樣が美しくあらはれること等、その變化がおもしろく書かれてゐる。

きれいな樹氷については、「木の枝といふ枝がすつかり氷に包まれてしまふのです」と輕く說明しておいて、「ちやうど水しやうで作つた木のやうです」と比喩によつてその美しさを具象化し、「朝日がさすと、きらきらと光つて、みごとなものです」といひ、「風が吹いて來ると、木の枝がふれあつてからからとかはいらしい音をたてます」といつて、さまざまな變化が美しく描かれてゐる。

かうした前半の靜的な自然から、後半の動的な子どもの遊びに移つて行つてゐるのも、この文の興味として注意すべきところでいはば寒さが靜動二態によつて現されてゐるのである。

スケートについては、氷の上に立つことも困難な練習の初期から、次第に上達することを述べ、後には「すべりながらまがつたり、後向きにすべつたり、友だちと手をつなぎあつたりして、思ふままにすべります。かうなると、おもしろくておもしろくてたまりません」と自在に滑る愉快さを敍して、寒さを喜ぶ子どもの心を具體的に表し、最後に滿洲人の子どもが、氷の上で特殊な獨樂を紐でたたいて廻すといふ興味ある遊びを紹介し、「ぽつぺたをつめたい風に赤くしながら、む中になつてまはします」と、ここにも寒さに負けぬ子どもの生活が描かれてゐる。

取扱の要點

讀むこと　發音を正し、はつきりと落着いて讀ませる。最初は適宜段落を切つて讀ませ、窓ガラスの氷樹氷、日本の子どものスケート、滿洲人の子どもの獨樂廻しの樣子がはつきり分るやうになつてから、全體をまとめて讀ませるやうにする。

文字語句を指導し讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　文章挿畫(掛圖)及び**ことばのおけいこ**二十九頁(一)により次のやうな問によつて話合をさせる。

「溜池では、寒さのために、窓ガラスがどんなになりますか。」

「その美しい氷にはどんな模様が出ますか。」

「ガラスの氷よりもつときれいなのは何ですか。」

「樹氷とはどんなものですか。」

「樹氷の美しい様子を話してごらんなさい。」

「日本の子どもたちは寒い冬に何をしますか。」

「スケートは上手になるとどんなにして滑りますか。」

「子どもたちが寒いのを喜ぶのはどうしてでせう。」

「溜池人の子どもはどんなことをして遊びますか。」

書くこと　**ことばのおけいこ**三十頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字讀替を中心に文字を指導し、字形筆順に注意する。

ことばの仕事　**ことばのおけいこ**三十一頁(三)のことばによつて簡單な發表をさせる。「木の枝といふ枝」は「人の顔といふ顔」、「おもしろくてたまりません」は「うれしくてたまりません」、「寒ければ寒いほど」は「高ければ高いほど」の如く置きかへて練習させることも一法である。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

矯正すべき訛音方言

まつ白——「マッチロ」と訛らないやうに注意する。

同じ——「オナシ」「オンナシ」といはないやうに注意する。

指——「イビ」と訛らないやうに矯正する。

人——「シト」と訛らないやうに注意する。

遊びます——「アスビマス」といはないやうに注意する。

消えます——「ケーマス」といはないやうに注意する。

いくら——「ナンボ」「ドシコ」の如き方言を矯正する。

むづかしい——「ムツカシー」といはないやうに注意する。

手——「テー」といふ地方では矯正する。

ひも——「ヒボ」といふ地方では矯正する。

文字

新字——寒さ　羽　指　畫　包まれて　住んで　スケート場(ジョー)　細い棒(ボー)

讀替——じゆ氷(ヒョー)

語句語法

次の如き比喩によつて敍述が極めて具體的になつてゐることに注意する。

白い菊の花が、咲きそろつたやうなのもあります。

白くじやくが羽をいつぱいにひろげたやうなのもあります。

星が並んで、光つてゐるやうなのもあります。

水しやうで作つた木のやうです。

次の如き語句は、適當な例によつてその意味と用法を具體的に指導する。

木の枝といふ枝が、

寒ければ寒いほど、

「うまくすべれる」――「うまくすべることができる」といふ可能の意味であることに注意する。

備考

連絡

ヨミカタ二「西ハタヤケ」同四「金の牛」と連絡して取扱ふやうにする。

十一　鏡

教材の趣旨

自然の觀察四「虫めがねと鏡」と聯關し、鏡三題ともいふべき教材で、「ねえさん」は鏡の反射、「をんどり」は鏡の影像、「おかあさん」はその影像による物語が主題となつてゐる。

前二者は兒童の生活の表現であり、後者は孝行な娘の話として傳へられる松山鏡の說話を教材化したものである。子どもの現在の生活を鏡によつて過去の物語に結び、歷史的感情に培ふところに排列上の意義がある。

元來松山鏡は繼子物語であつて、そのままの形では今日の教育には適しないものがあることに注意し、教材化した趣旨を生かして取扱ふべきである。

文章

「ねえさん」――太陽の光線が鏡によつて反射するのに興味を感じた花子は、その光を二階の窓の障子にあててみた。二階にゐた姉が障子

にうつる光を見て、何事が起つたのかと障子を明けてのぞいた途端花子はいたづら心にその光を姉の顔にあてる。姉は「おお、まぶしい」といつて手で顔をかくす。この花子のいたづらに對して、姉は笑ひながら輕くたしなめてゐるが花子は鏡による反射の實驗をしたので、そこに子どもらしい理科があり、この文はさうした子どもの生活の表現としての文學性がある。

「をんどり」――をんどりは勇によく馴れた鷄である。だから勇が遊んでゐると何かもらへるのかと思つて近寄つて來た。勇が鏡を見せたのは、花子と同じやうに子どものいたづら心からであるが、このいたづらから子どもの理科が發展する。ちよつと驚いて逃げださうとしたをんどりは、鏡に映る影を見ると急に引返して來た。をんどりは首の毛をさか立てて、自分の影をめがけてとびついて來る。「おや、自分のかげを、ほかのをんどりと思つてゐるのだな」といふところに勇の發見がある。「たいへんなけんくわになりました」は思ひがけない喧嘩で、言

外に滑稽味が託されてゐる。勇がをんどりをかはいさうに思つて鏡を引つこめると、をんどりは、意外にもほんたうに勝つたものと思つて「こけこつこう」と勝どきをあげてゐる。得意さうなをんどりの行動に滑稽が感じられ、思はず吹きだされるところである。

「おかあさん」――前後二段から成り、前段は孝行娘の母が病氣でなくなつたので淋しく暮してゐたこと、後段は生前母から渡された鏡に映る姿を見ておかあさんと呼んで懷かしんだことになつてゐる。

前段では母の臨終が中心であり、おかあさんに會ひたかつたらこれを見よといつて包んだ物を渡してなくなつた。「何か包んだ物」とあつて、鏡といふことを明らかにしてゐないが、ここに物語としての興味がかかつてゐる。

後段は娘が母からもらつた包を開いてみる場面が中心で、包から出たものは一枚の鏡であつたが、それに映る自分の姿を見て「おかあさん」と呼んだといふ可憐な話である。まだ鏡といふものがめつたにない

書の話であることに注意させることが大切である。

取扱の要點

讀むこと　三篇から成つた文章であるから、強ひて同一時間に讀ませなくてよい。別々に指導し、最後に綜合的に讀ませ、三篇に通ずる鏡の意味を明らかにする。發音に注意して讀ませる。正確に讀ませることには變りはないが、生活的な「ねえさん」と「をんどり」とはやや輕快に、物語風の「おかあさん」は落着いた口調で讀ませるがよい。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　鏡が光を反射し、影像を作ることについて體驗の話合をさせる。

文章挿畫(掛圖)を中心とし、次のやうな問によつて話合をさせる。

「花子さんは日の光を鏡で受けて、それをどうしましたか。」

「すると、ねえさんが障子をあけてのぞいたので、花子さんはどうしましたか。」

「鏡を持つて遊んでゐた勇さんは、をんどりがやつて來たのでどうしましたか。」

「をんどりはどうしましたか。」

「勇さんはどんなことに氣がつきましたか。」

「それからをんどりはどんなにしましたか。」

「勇さんがかはいさうに思つて鏡をひつこめると、をんどりはどうしましたか。」

「孝行な女の子は、おかあさんの病氣の時どんなにしましたか。」

「おかあさんは、ある日娘に何を渡しましたか。」

「さうして何とおつしやいましたか。」

「おかあさんがなくなると、女の子はどんなにして暮してゐましたか。」

「女の子は、おかあさんから頂いた物のことを思ひ出して、包をあけると中から何が出ましたか。」

「女の子が鏡といふことを知らなかつたのは、なぜでせう。」

「鏡をのぞいて見ると、何がうつつてゐましたか。」

「それは誰に似てゐましたか。」

「娘は何といひましたか。」

ことばのおけいこ　三十二頁(一)を讀ませ、話すことと關聯してそれがこの教材の要約であることに氣づかせる。

ことばのおけいこ　三十四頁(三)によりこれらのことばを用ひて適當な發表をさせる。

書くこと　**ことばのおけいこ**　三十三頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ適當に書取をさせる。

文字の指導　新字讀替を中心に文字を指導し、特に「受」「密」「物」については、字形について注意す

る。ことばのおけいこ三十四頁(四)によつてカナヅカヒに注意させ□の中に適當なカナを入れさせる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

矯正すべき訛音方言

まぶしい――方言が多いから注意する。

えんがは――「イエンガワ」といはないやうに注意する。

くちばし――「クチバシ」といはないやうに注意する。

かはいさう――方言が多いから注意する。

くださつた――東京では「クダスッタ」といふ。「クダサッタ」を標準とする。

そつくり――「ソックラ」といはないやうに注意する。

文字

新字――鏡　受ける　窓　毛　孝(コー)行　娘　物

讀替――羽ばたき　孝行(コー)

語句語法

「忍さでももらへるのかと思つて」――「でも」と「もらへるのか」の意味とを明らかにして、この句を考へさせるやうにする。

「わるくなるばかりでした」――「ばかり」によつてこの句の意味を考へさせるやうにする。

「何か包んだ物」――「何か」の用法に注意する。

「めつたにない」――「めつたに」は打消の「ない」と呼應して用ひられることに注意する。

「おかあさんにそつくりでした」――「そつくり」に注意して、その意味及び用法について指導する。

「逃げださうとしましたが急にひきかへして……」――助詞「が」によつて、上部と下部と背反するものが結ばれることに注意し、左の用例によつて理會させる。

晝も夜も、一心にかいほうしましたが、病氣はわるくなるばかりでした。

娘は泣いて悲しみましたが、しかたがありません。

子どものやうですが、なくなつたおかあさんにそつくりでした。

備考

連絡

自然の觀察四「虫めがねと鏡」に連絡して取扱に考慮する。

十二　神だな

教材の趣旨

卷一「オミヤノ石ダン」、卷二「お祭」、ヨイコドモ下「ウヂガミサマ」と關聯し、神だなを飾ることによつて敬神の念を具體的に表した教材である。

正月はすべてのものを清淨な氣分にする。この清淨な氣分を形にあらはすやうにいろいろな事が行はれるが、なかでも最も鄭重にされるものは神だなの飾りであらう。ここにわが傳統的な美しい國民性があらはれる。神をまつることは、國民的行事中最も大切なことであつて、敬神思想の根本であり、またそのあらはれである。

神だなの飾り方は地方により家庭によつていろいろあらうが、教材にはその最も簡素なものを採つた。

年末の忙しい一日を正月の準備に送り、夕方燈明をあげて神恩を謝し、一家團欒して來る年の幸福を祈る家族的な精神にも觸れた教材である。

文章

神だなを飾るといふ生活にふさはしく整然たる筆致を示してゐるが、その中に家族的親愛の情もこもつた文章である。「もうすぐお正月なので、おぢいさんは、神だなをおかざりになりました」を冒頭とし、「新しいしめなは、白い紙、うら白の葉、何もかもさつぱりときれいに見えて、もうお正月になつたやうな氣がしました」を終結として、その間に神飾りが順序正しく敍してある。

まづ「新しいしめなはをはつたり、さかきをあげたりなさいました」と對照的に敍した後を受けて、「小さい三方に、白い紙とうら白をしいて、鏡餅をのせてお供へになりました」と、鏡餅の飾り方を細敍し、御神酒を供へ、床の間に鏡餅を飾ることまで整然と書きたててある。

飾つた後の感じは、おぢいさんの「さあ、これでいつお正月が來てもいいぞ」のことばにあらはされ、しかもそのことばにおぢいさんらしい氣持さへ出てゐる。夕方神だなにあかりをあげて皆で拜んだ時、小さい弟が「神さま、お喜びね」といつたのは、如何にもあどけないことばである

が、自ら一家の喜びをさながらにいひ得たものとも感ぜられる。

最後の新しいしめなは、白い紙、うら白の葉などのすがすがしさから、「もうお正月になつたやうな氣がしました」といふのは、神だなを見てまざまざと正月を感ずる心のあらはれで、自ら次課「新年」を呼起すものである。兒童の心情に卽して敍述した文章であるから、綴り方への橋渡しとすることもできよう。

取扱の要點

讀むこと　兒童の家庭にある神だなについて話合をさせてから讀みの指導に入る。發音を正し、ゆつくりと讀ませて、整然と飾られていく順序を讀取らせるやうに指導する。文字、語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　文章挿畫(掛圖)を中心として話合をさせる

書くこと　**ことばのおけいこ**三十六頁(二)によつて、文字を正確に書かせる。

文字の指導　新字讀替を中心に文字を指導する。「餅」は字形筆順に注意する。

ことばの仕事　**ことばのおけいこ**三十五頁(一)によつて［　］の中に「おとうさん」「おかあさん」「私」「弟」などを置いてことばの練習をさせ、敬語的語法の指導をする。

注意すべきことば　文字　語句語法等

矯正すべき訛音方言

おざしき――「オダシキ」と訛る地方では矯正する。

葉――「ハー」と長くいはないやうに注意する。

文字

新字――鏡餅　お供へ　床の間

讀替――夕方

語句語法

次の如き敬語の用法に注意して指導する。

神だなをおかざりになりました。

鏡餅をのせてお供へになりました。

おみきもお供へになりました。

鏡餅をおかざりになりました。

次の文例について「たり」の用法に注意する。

新しいしめなはをはつたりさかきをあげたりなさいました。

次の文の名詞をたたみかけた用法にも注意する。

新しいしめなは白い紙、うら白の葉、何もかもさつぱりときれいに見えて、

備考

連絡

ヨミカタ一「オミヤノ石ダン」、よみかた三「お祭」、ヨイコドモ下「ウヂガミサマ」等の發展として取扱に考慮する。

十三　新年

教材の趣旨

「神だな」を受け、卷二「お正月」と呼應して新年を迎へた喜びを歌つた韻文である。

「お正月」は正月の來るのを待つ樂しさを歌つたものであるが、本教材はいよいよ新年を迎へて喜びに滿ちた心情が中心になつてゐる。何を見ても嬉しく、何をしても嬉しい。これが子どもの新年に對するいつはりのない感情である。この感情が「新年おめでたうございます」の句に素朴にあらはされ、その連續に新年らしい氣分が見られる。

文章

三行四聯の詩である。各聯は七七を基調として「新年おめでたうございます」の句で變化を見せた形に成つてゐる。しかも毎聯この句が繰返されて、全體の統一感を與へてゐる。

第一聯は、元日の朝の家庭の喜びが主題となつてゐる。門松を立て、しめかざりをした家の中で、みんな揃つて幸福な新年を迎へた情景で、互にあいさつをしてお雜煮を祝ふ樣子までが言外に見られる。「門松立てて、しめかざりして、うち中そろつて」は「て」の脚韻になつてゐる。

第二聯は、お宮へお參りして皇國の隆昌を祈り、學校の拜賀式で「君が代」を歌ひ、聖壽の萬歲を祝ふめでたさを歌つたもので、「お宮へまゐつて、學校へ行つて、君が代歌つて」も「て」の脚韻を踏んでゐる。

第三聯は、凧をあげて喜び、羽を巧みについて樂しむ子どもらの遊びを主題とする。子どもの朗らかな喜びが、「みんなにこにこ、新年おめで

たうございます」によつて如實に表現されてゐる。

第四聯は二日の書初で、墨汁黑々と含ませて墨色鮮かに書きしるされた「昭和の光」は國運の隆昌を象徴し、それを上手に書いた子どもの喜びがあらはされてゐる。

取扱の要點

讀むこと　韻文であるから特に發音を正し、韻律を生かして讀みを指導する。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　ことばのおけいこ　三十九頁(三)により、次のやうな問によつて話合をさせる。

「皆さんは、去年の新年にどんなことをしましたか。」

「お宮へまゐつたことをお話しなさい。」

「學校の式の時、校長先生はどんなお話をなさいましたか。」

「お正月にはどんな遊びをしましたか。」

「凧あげをしましたか。」

「羽つきをしましたか。」

「書きぞめにはどんな字を書きましたか。」

「新年にはどういつて挨拶しましたか。」

書くこと　ことばのおけいこ　三十八頁(一)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文を書寫させる。書寫するにはなるべく詩形をくづさないやうにする。

文字の指導　新字讀替を中心に文字を指導する。「門」の筆順に注意する。

ことばのおけいこ　三十九頁(二)によつてカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことば　文字　語句　語句語法等

矯正すべき訛音方言

門松――「カロマツ」と訛らないやうに注意する。

字――「ジー」と長くいはないやうに注意する。

てきて――「デケテ」といはないやうに注意する。

文字

新字――昭(ショー)和

讀替――新(シン)年　門(カド)松　上手(ジョーズ)

語句語法

「昭和の光」――象徴的な句である。兒童の理會に即して昭和の御代のさかえいくすがたを具體的に說明するがよい。

「新年おめでたうございます」――各聯がこの句によつてまとめられてゐることに注意して指導する。

備考

連絡

ヨミカタニ「お正月」の發展であり、**ヨイコドモ上**「シンネン」、**よみかた四**「神だな」と密接に連絡して取扱ふ。

うたのほん下「羽つき」、**てほん下**「たこはねの音」「昭和の光」とも連絡がある。

（以上　十二月）

十四　いうびん

教材の趣旨

前課に因んで新年に於ける子どもの遊びに取材し、特に綴り方や工作等と關聯する兒童の模倣遊戯による郵便ごつこを主題とした教材である。

模倣は兒童の本能であり、これによつて大人の生活に移行する。郵便によつて書簡を往復させることは、兒童の實際生活には極めて稀であらうが、かうした遊びの生活の中にはいくらでも取入れることができる。教材はここに着眼し、郵便に關する必要な事項を生活的に具體化したものである。

もちろん、これによつて郵便の法規に關する一般的な知識を授けようとするのでなく、日常見聞する郵便に關する事項、たとへば切手・はが

き・ふうとう・ポスト・手紙・集配人等を作業的に行はせて經驗を確實にしようといふのである。

文章

「今まで、羽をついてゐた花子さんと春枝さんは、……」は前課「新年」を受けた起筆である。花子と春枝と一郎とは、早速手分けをして作業に取りかかる。一郎は切手、春枝ははがき、花子はポストで、準備ができあがると、三人は遊戯をはじめた。花子と春枝は何か書きはじめる。一郎はかばんを取りに行く。發信者と集配人が自然に決定した。一郎は、ポストにはいつてゐた二枚のはがきを早速春枝と花子にくばる。二人が讀んで見ると二枚とも文句は「新年おめでたうございます」で、前課と連絡してはがき文が取扱はれてゐる。

一郎が「もうありませんか。あつたら早く出してください」といふと、花子は「こんどは、私が先に書きますから、春枝さん、ごへんじをください」といふ。ここに發信者と受信者が決定したわけである。

今度は手紙の往復である。花子の手紙は「あしたから學校が始りますが、またいつしよに行きませう。朝さそつてください」といふ子どもの實務的な手紙で、遊びの中に生活が織込まれてゐるところに注意を要する。この手紙によりこの遊びは第三學期始業の前日であることがわかる。花子の手紙に對する春枝の返事は、返書としてのあいさつ「お手紙をくださつて、ありがたうございます」が前文として書添へてある。

取扱の要點

讀むこと　發音を正して讀ませる。文中に對話や手紙の文などが挿入されてゐるから、これらを特にはつきりと讀ませ、登場する人物の遊びを明らかにする。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　**ことばのおけいこ**四十頁(二)によつて挿畫(掛圖)と連繫して劇的に讀ませる。

ことばのおけいこ四十二頁(三)によつて時に關する語法に基づき話させる。

書くこと　**ことばのおけいこ**三十九頁(一)によつて文字を正しく書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字を中心に指導する。

注意すべきことば文字語句語法等

矯正すべき訛音方言

こんど――「コント」といはないやうに注意する。

兩方――「ジョーホー」と訛る地方では矯正する。

そば――「ネキ」の如き方言を矯正する。

かばん――「ガバン」といはないやうに注意する。

おんなじ――「オナシ」「オンナシ」といはないやうに注意する。

文字

新字――四錢　婿り

語句語法

次の敬語に注意して指導する。

紙の箱をいただいて來て、

ごへんじをください。

あつたら早く出してください。

四錢の切手を一枚ください。

朝さそつてください。

待つてゐてください。

備考

連絡

カズノホン四「二の段の九九」(二十五頁)「四の段の九九」(二十六頁)の問題と關聯がある。

十五　にいさんの入營

教材の趣旨

入營するにいさんを見送つた兒童の生活としてあらはした文章で、國民皆兵の思想に培ふ點から重要な教材である。

本教材には、にいさんを見送つて營門内にはいつたことから、普通の兒童の經驗することのできない兵營内の樣子を見聞したことになつてゐる。この點讀む兒童には興味も深く、これによつて軍事に對する強い關心を持たせることができるであらう。

兵役は國民最高の義務で、國防思想は幼時から養ふやうにしなければならないが、それにはできるだけ具體に卽し、體驗によつて感銘を與へることが大切である。

文章

普通の見送りと異なり、營門のところから書起して兵營内の樣子を書いたところに興味がある。

「赤いたすきをかけたにいさん」は一般の見送人と營門で別れ、兵營内へは親子三人だけがはいつた。門をはいつたところに衞兵所がある。廣い營庭の立札は、所屬部隊の中隊名を記したものである。多くの聯隊では、まづ入營者を受附け、郡市別に入營者を集合させてから、各中隊別に整列させることになつてゐる。金筋の襟章をつけた兵たいさんは係の下士官で人名點呼を始めたのである。

次に入營者一同に對し、部隊副官や軍醫から必要な事項につき注意があつて、各中隊の兵舍へ案内される。にいさんの行つた兵舍はその

中隊である。それから身體檢査があり、入浴後各班に分れて部屋に入り、班長の指揮で給與された軍服に着換へるのである。國男たちの待つてゐたのは衞兵所のそばにある面會所である。馬に乘つた將校がはいつて來ると、衞兵所にゐる一團の兵士が「敬禮」といふ元氣な聲で起立して敬禮をする。これによつて嚴肅な軍規の一端が窺はれる。

新しい軍服を着たにいさんは「見ちがへるほどりつぱな兵たいさん」になり、青年學校で訓練されたのもしさも見える。赤い襟章の星は、押しも押されもせぬりつぱな帝國軍人であることを示してゐる。その姿を見てにこにこしながら言つた父の「りつぱな兵たいさんだな。これなら、ごほうこうもできよう。しつかりたのむよ」といふことばには、子どもを入營させた父親としての氣持がよくあらはれてゐる。

取扱の要點

讀むこと　兒童の見送りの體驗にもとづき、入營者が自宅を出で氏神などへ參拜し、人々に見送られて兵營の所在地へ着き、兵營の門前まで來たことを想像させて、本文の讀みの指導に

入る。本文には「青年學校」「兵營」「ゑい兵所」「えりしやう」「兵舍」「軍服」等兒童のことばに緣遠いものがあるから、適當に發音や語義を指導しながら讀ませるやうにする。**ことばのおけいこ**四十五頁の兵營圖を參照して理會に資する。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　文章挿畫(掛圖)を中心とし、**ことばのおけいこ**四十四頁(三)の文章及び圖によつて話合をさせる。

書くこと　**ことばのおけいこ**四十三頁(一)によつて、文字を正確に書かせ、なほ書取をさせる。

文字の指導　新字讀替を中心に文字を指導し、特に「營」「服」「着」「武」等の文字は誤りやすいから、字形を明瞭に示し筆順に注意する。

ことばのおけいこ四十四頁(二)によつてカナヅカヒに注意させる。「はいる」「はひる」兩樣のカナヅカヒがあるが、國定教科書では「はいる」に統一してある。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

矯正すべき訛音方言

呼んで——「ヨーデ」といふ地方では矯正する。

人たち——「シトタチ」といはないやうに注意する。

ひつくり——「ビックラ」といはないやうに注意する。

かへつて——「カイッテ」「ケーッテ」などといはないやうに注意する。

できよう——「デケョー」「デキョー」などと訛る地方では矯正する。

文字

新字——入營(ニューエー)　服を着て　ゑい兵所　立札　山田武　兵舍　休む

讀替——入營(ニューエー)　責セー)年學校

語句語法

「兵營」「ゑい兵所」「兵たい」「兵舍」等の語と關聯し、「ほ兵」「工兵」「き兵」「ほう兵」等既習の語をあげさせて語彙を整理する。

「あいさつをして」「立札」「あんないされて」「えりしやう」「つきそひの人」「軍人さん」「兵たいさん」「げい禮」「軍服」「ごほうこう」等の語句に就いて適當に指導する。

備考

連絡

ヨミカタ二「兵タイゴッコ」「ジャシン」、**うたのほん下**「おもちやの戰車」等と連絡して取扱に考慮する。

よみかた三「軍かん」及び「お話」、**同四**「海軍のにいさん」とも連絡がある。

十六　雪の日

教材の趣旨

童話的な詩である。雀親子を點出して物語をさせ、烏の勘太に同情し、家庭生活の幸福を歌つてゐる。雪の夕暮のわびしさ、しかも親子の愛情のあたたかさ、さういふものが擬人の世界を通して、豐かな空想によつて描き出されてゐる。兒童の主體的態度に卽して、動物に對する愛情、家族生活の喜び、雪の夕暮の情景を感得させるべき教材である。

文章

七五、二句五聯の詩である。

第一聯は、ちらちら雪の降る夕暮の雀親子の空想的な物語であることを叙して一篇の詩想を明らかにしてゐる。

第二聯乃至第四聯はその物語の內容で、主として親雀が語り、子雀が

合槌を打つてゐる。「山は大雪であるし、日は暮れるし、烏の勘太はさつき大急ぎで歸つて行つたが、山の塒は定めて寒からう」と親雀のことばは同情的である。それに比べて我々里に住む者は仕合だといふ意味が言外に見える。「さ、やすまうよ」といふ「さ」は誘ひかけることばである。

第四聯の『やすみませう』と子すずめが、『今夜はだいぶつもるでせう』は對話の中に地の文が挿入されてゐるから兒童には少しく難解であらう。「やすみませう。今夜はだいぶつもるでせう」と子雀が答へたの意味である。

第五聯は、雀親子のねた後の物靜かな情景で、第一聯の「ちらちらちら」に呼應し、子雀のいつた通り雪は「さらさらさら」と盛に降りだしたことを叙して詩は終つてゐる。

取扱の要點

讀むこと　發音を正し、韻律を生かして靜かに讀ませ、雪の降る情景を想像させ、雀親子の物語を讀みにあらはすやうに指導する。

ことばのおけいこ 四十六頁(三)を讀ませ教材の理會に資する。

文字語句を指導し讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫を中心とし次のやうな問によつて話合をさせる。

「雪の降る日の様子を話してごらんなさい。」

「親雀はどんなことを言ひましたか。」

「烏のかん太はどうして急いで歸りましたか。」

「子雀は何と答へましたか。」

「親雀と子雀がやすんだあとの様子を話してごらんなさい。」

ことばのおけいこ 四十六頁(二)の「ちらちらちらちら」と「さらさらさら」の違ひに注意させ、これを用ひて簡單な發表をさせる。

書くこと **ことばのおけいこ** 四十六頁(一)によつて文字を正確に書かせ時間に餘裕があれば詩の形に全文を書寫させる。

文字の指導 新字を中心として指導する。「鳥」は「鳥」と混同するから特に注意を要する。

注意すべきことば 文字 語句語法等

矯正すべき訛音方言

日――「シ」「ヒー」などと訛らないやうに注意する。

ちらちら――「ツラツラ」と訛る地方では矯正する。

かへつた――「カイッタ」「ケーッタ」などといはないやうに注意する。

文字

新字――鳥（ニラス）

語句語法

「ものがたり」「親すずめ」「雪の音」――いづれも名詞止で餘韻のある語法である。

「烏のかん太」――烏に對する擬人的な名稱で、「烏の勘三郎」などと同樣傳統的なものである。

「ちらちらちら」の擬態、「さらさらさら」の擬音が雪降りの様子を描寫してゐることに注意する。

備考

連絡

ヨミカタ二「冬」の發展として取扱ふ。

自然の觀察二「冬の天氣」、ヱノホン四「冬のけしき」と連絡して取扱に考慮する。

十七 白兎

教材の趣旨

卷三の「國引き」とともに神話に取材した、教材である。元來古事記並びに日本書紀に大國主命の神話として傳へられてゐる說話であるが、本教材は白兎を中心とした形に作成し、神話を童話化したものである。しかも白兎はわにざめを欺いて失敗し、八十神のことばに從つて更に苦しみ、最後に大國主命によつて救はれるのであるから、結局すべては大國主命に包攝せられ、その御仁德を偲ばせることになる。

もちろん白兎は、わにざめを欺いて海を渡らうとしたのであるから、それが最後のわにざめに捕へられて報復を受けたのは、道德的に見て當然といひ得る。しかし八十神のいたづらは、いはば死屍に鞭打つたぐひで、これがため白兎はむしろ第三者の同情を集める立場に立つた。そこへ大國主命があらはれて白兎を救はれるのであるから、說話は頗る自然に發展するとともに、八十神と大國主命との人格的對照が著しくなつて來る。兎のことばによつてそれが明瞭にされ現在に於いて

不遇な大國主命がやがて偉大な神として出現されることを物語つてゐるのである。

文章

この說話は大體前後二段から成立つてゐる。卽ち白兎がわにざめを欺いて毛をむしり取られるまでが第一段であり、更に八十神にいぢめられて痛みに堪へなくなつた白兎が、大國主命によつて助けられるのが第二段である。

第一段は全く童話的な物語で、これだけでも獨立し得る性質をもつてゐる。文章も專らこの童話的興味を生かすやうに敍述されてゐる。最後に兎がわにざめのために體の毛をむしり取られてしまふのは、わにざめをだました當然の報として一應うなづけるが、しかしこの憐れな失敗者に對する同情の心はなほ何物かを期待せずにはゐられない。——その心理を手がかりとして第二段へ發展する。痛くてたまらず、濱べでしくしく泣いてゐる兎——それは一體誰によつて救はれるか。

まづ現れたのが八十神である。その「大勢の神様に」泣いてゐるわけを尋ねられて、「今までのこと」を申しあげたのであるが、ここは前段の話と結びつけて考へさせることが大切である。白兎は八十神たちの教へに從つて海の水をあびたが痛みがいつそう烈しくなつた。（このことについては、海水が鹽分を含んでゐるからであることを兒童に考へさせる必要がある）

白兎は終に救はれないであらうか。それにしても、白兎がわにざめをだましてかくまでに報復を受けるとすれば、白兎をだまして苦しめた八十神はそのままでよいであらうか。

そこへ大國主命がお出でになつたのである。まづ「さきほどお通りになつた神様がたの弟」であり、「兄様がたの重いふくろをせおつていらつしやつたので、おそくおなりになつた」とある敍述によつて、その從順な御性格が窺はれる。更に兎の泣くわけを聞いて「かはいさうに」といはれた。そこに八十神と違つた仁慈の御德が窺はれる。果して白兎

は救はれた。その御仁德は白兎をして「あなたは、おなさけ深いおかたですから」といはせてゐるので更に明瞭にされてゐる。後の大國主命の偉大な國土經營の御業は、專らこの御仁德に基づくものと考へさせられるのがこの話の結末である。

取扱の要點

讀むこと　長文であるから適宜段落にわけて讀ませ、それから全體を通じて讀ませるやうにする。通讀の指導に力を注ぎ、話の筋を明らかにし、次第に說話の面白さにひたらせて行く。發音、文字、語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　**ことばのおけいこ**四十九頁(二)によつて劇的に對話をさせる。なほ文章挿畫(拱圖)を中心として話合をさせる。

書くこと　**ことばのおけいこ**四十八頁(一)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字を中心に指導する。新字では、「陛」「樣」が困難であり、「主」は筆順を誤りやすいから注意を要する。

ことばのおけいこ五十二頁(三)によつてカナヅカヒの誤に氣づかせ訂正させる。

注意すべきことば文字語句語法等

矯正すべき訛音方言

おこりました——「怒る」は方言が多い。又「オゴル」と訛らないやうに注意する。

モ——「ゲー」と長くいはないやうに注意する。

洗つて——「アローテ」といふ地方では矯正する。

あなた——「アンタ」といはないやうに注意する。

おしあはせ——「オシヤリセ」といはないやうに注意する。

文字

新字——白兒(ウブ)　陸(ク)　仲間(ナカ)　多(オー)い　渡(ワタ)つて　神樣(サマ)　大國主(ヌシ)のみこと　兄(ア)樣がた

語句語法

次の如き代名詞は比較させてその用法に注意する。

（ぼく　君）　（ぼくら　君ら）

（おまへ　君　あなた）

次の敬語的語法に注意して指導する。

神樣　このかた　神樣がた　兄樣がた

今までのことを申しますと、

今までのことを申しました。

おたづねになりました。

おいでになりました。

おそくおなりになつたのです。

お通りになつた神樣、

お通りになつて、

備考

連絡

神話としてよみかた三「國引き」と連繫がある。

十八　たこあげ

教材の趣旨

巻三「らくかさん」と關聯して、子どもの凧あげを主題とし、をぢさんに作つてもらつた凧を自分の工夫によつて、高く飛ばすことができた喜びを敍した文章で、をぢさんに對する感謝の心が言外にあふれてゐる。

凧あげは男兒の遊びとして傳統の久しいものであるが、今日の飛行機が、凧と同じ原理によつて飛び、その發明に示唆するところが多かつたことを思へば、凧あげは單なる遊びではなく、科學的な創造性をはらんだものとして考へなければならない。

本教材の凧はをぢさんの作つたものであるが、これを飛ばすにはいろいろ工夫しなければならなかつた。凧は始めちよつと揚つたが、忽ち落ちた。そこで糸めを直して更に試みたが、今度は左の方へ傾いた。最後の工夫として凧の右の肩に紙のテープをつけてあげたところ、凧は始めて高く飛び、百五十メートルの糸を繰出しても足りないくらゐすばらしく高くあがつた。友だちの凧などは足もとにも寄せつけなかつた。

工夫はもとより小さいものであるが、それでもこの子どもに取つては、ライト兄弟がはじめて試驗飛行をやつた以上に好奇の心を躍らせ、工夫をこらし、さうしてすばらしい成功を收めたのであつて、そこには子どもの科學があり、工夫創造の喜びがある。

文章

凧を作つていただいたをぢさんに、凧あげの様子を報告する形をとつた文章で、巻二の「シヤシン」巻三の「海」の「海に來て」と同様、まだ書簡として分化しない、をぢさんに呼びかけて書いた文である。最初の二行は書出しとしての全體的報告である。次の四行は作つてもらつた日から今日まで凧があげられなかつた理由を明らかにしたもので、今日は天氣もよく、日曜であるから凧あげには都合のよかつたことを述べてゐる。

次には凧が變な形をしてゐるので、友だちに笑はれたことが敍して

あるが三ちやんの「なんだ、骨が二本しかないぢやないか。こんなものがあがるものか」といふ悪口は、それによつて凧の構造を説明してゐることに注意を要する。さうして上部の挿畫と九十頁の「たこの糸めをなほして、下糸を少しつめました」とにより、凧の作り方が暗示されてある。（この凧の作り方は、極めて簡單であるから自然の觀察または工作と連絡して作らせるがよい）

次の節には凧をあげる時の工夫と苦心が書いてあるが、凧は前後三べん飛ばしてゐる。

一度め　たこはあがつたが、空で二三べんまはつて落ちた。

二度め　糸めを直し、下糸を少しつめてあげると左の方へかたむいた。

三度め　たこの右の肩へテープをつけてあげた。

ここは凧あげに工夫してゐるところで、落下傘に重りをつけて飛ばしたのと好一對であり、工夫の力を養ふ大切な部分である。苦心は三度

めに酬いられて凧は空高くあがつた。「ちやうどよい風が吹いて來て、糸をのばすとぐんぐんあがります。四五十メートルのばした時は、だれのたこよりも高くあがつてゐました」威勢よくぐんぐんとあがるのは凧の優秀性を物語つてゐる。

弟は「ばんざい」と叫ぶ。兄は得意になつてどんどん糸を繰出す。「へんなたこだ」と笑つた三ちやんまで、一しよになつて「わあつ」と歡聲をあげる。

とうとう、百五十メートルの糸をみんな出しました。だれのたこだつて、ぼくのたこの足もとにもよりつけません。ほかのたこは、下の方であがつたり落ちたりしてゐますが、ぼくのたこは、高い空に小さく見えて、すわつたやうに動きません。

凧が最も高くあがつた時の情景である。誰の凧も足もとにも寄りつけず、下の方であがつたり落ちたりしてゐるのを、高い空にすわつたやうに悠々として見下してゐる凧の雄姿が見える。（九十三頁の挿畫は

このところを表したものである。右の肩につけたテープも風に吹かれてゐる）

「よくあがつてゐるな。」

「ちよつと糸を持たせてくれたまへ。」

「よく引つぱつてゐるな。」

みんなの羨望の聲である。前節の嘲笑的態度も忘れたやうにして寄りそつて來てゐる。

ぼくも次郎も、うれしくてうれしくてたまりません。このよくあがつたところを、をぢさんに見せてあげたいと思ひました。

兄弟の嬉しさと、をぢさんに對する感謝の情とがあらはれてゐる。「をぢさんに見せてあげたい」は起筆の「ほんたうによくあがりました」に照應してゐる。

取扱の要點

讀むこと　發音を正して讀ませる。起筆と收筆とに注意させて、凧を作つてもらつたをぢさんに話すやうに書いた文であることを明らかにして讀ませることが大事である。さうしていろいろと工夫して凧あげに成功した嬉しい氣持を、讀み味ははせるやうに指導する。文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　文章挿畫（掛圖）を中心とし、次のやうな問によつて話合をさせる。

「このたこは誰に作つていただいたのですか。」

「たこはどういふ風にして作つてありますか。」

「みんながそれを見て何といひましたか。」

「最初次郎にたこを持たせてあげるとたこはどうなりましたか。」

「二度めにあげた時どうなりましたか。」

「三度めに高くあがつた時、みんなは何と言ひましたか。」

「たこが空に高くあがつた樣子を話してごらんなさい。」

「みんなはどう言つてそばへ寄つて來ましたか。」

ことばのおけいこ　五十三頁(一)を讀ませ、それがこの文の要約であることに氣づかせる。

書くこと　**ことばのおけいこ**　五十四頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字を中心に指導する。「降」「骨」「糸」等は特に字形筆順に注意を要する。

ことばのおけいこ五十六頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことば 文字 語句語法等

矯正すべき訛音方言

たこ――方言が多いから注意する。

二本しか――「しか」には地方によりいろいろのいひ方があるから注意して指導する。

けれども――「ケンドモ」「ケードモ」などといはないやうに注意する。

まつすぐ――「マッング」といはないやうに注意する。

文字

新字――降(ふ)つたり　骨(ほね)　糸(いと)　教(オシ)へて　今度(ド)

語句語法

「かげんを見て」「足もとにもよりつけません」――用例によつて具體的に意味を明らかにする。

「糸め」「下糸」――實物についてことばの指導をする。

「日曜なので」「二本しかないぢやないか」「糸を持たせてくれたまへ」――これらの句法も用例によつてその意味を指導する。

備考

連絡

よみかた三「らくかさん」、同四「新年」と連絡して取扱に考慮する。

自然の觀察四「ばねとたこ」と連絡して取扱ふ。

(以上　一月)

十九　豆まき

教材の趣旨

わが國の年中行事の一つとして、古來傳統的に廣く行はれてゐる節分の夜の豆まきを教材としたもので、「神だな」と關聯する。

太郎がはじめて豆まきをした體驗を敍した形にできてゐる。おかあさんが豆を炒つて神だなにお供へになる。太郎はおとうさんに「今年からおまへがまくのだ」と言はれ夜になると、「うちでもそろそろ始めるかね」といはれたので、太郎はきまりの悪いのを思ひ切つて「福は內、鬼は外」と方々の部屋へまいて歩く。弟妹が後からついて來て大騒ぎをして喜ぶ。しまひに縁側へ出て、鬼を追拂つてしまふと、おかあさんが雨戸をお締めになる。その後でみんなが揃つて豆を食べたといふ一家和樂する節分の豆まきの夜の情景が描かれてゐる。傳統的な行事とともに家庭の暖い和樂が主題となつた教材である。

文章

「神だな」と關聯し、どちらも兒童の生活としてあらはした文であるが、「神だな」は神をまつる文だけあつて、どことなく整然たる敍述になつてをり、この文章は行事の性質上家庭の睦まじさ賑かさが中心になつて表現されてゐる。

今日は節分で、豆まきの日です。

「太郎、今年からおまへがまくのだ。」

と、おとうさんがおつしやいました。

この一節を最初に特筆したのは、今年の豆まきがはじめて太郎の手によつてなされ、それが表現の動機となつてゐるからで、綴り方と連絡すべき點である。

先づおとうさんのことばから書起し、次におかあさんが豆を炒つて神だなにお供へになつたことを述べ、ぼくは早く晩になればよいと思

ひました」とはじめてする豆まきを待ちかねる心をあらはしてゐる。

「だんだんうすぐらくなると、あちらでもこちらでも、豆まきの聲が聞えます」によつて、いよいよ當夜の氣分が釀し出される。おとうさんが「そろそろ始めるかね」といはれて、神だなから桝を下された時は、太郎もちよつと堅くなつて「ぼくは、少しきまりがわるかつたが」といつてゐるが、しかし一度「福は內、鬼は外」と呼立てると、きまりの惡さも忘れ、「きやつ、きやつ」と大騒ぎをして、豆を拾ふ弟や妹の騒ぐさまを見取つてゐる。

それにつられて、

ぼくもおもしろくなつて、だんだん大きな聲を出しながら、豆をまきました。

と得意になり、その得意が、思はず「鬼は內、福は外」といはせたのであるが、結果としては、みんなの大笑ひとなり、一家の和樂氣分を濃厚にしてゐる。

おしまひに、太郎が緣側へ出て、「鬼は外、鬼は外」といひながら豆を庭へ元氣よくまくと、おかあさんが雨戸をぴしやりとおしめになつて、厄拂ひの行事が終つた。最後の、みんなで豆を年の數だけたべたところは、一家團欒の情景が想像せられ、餘情ある文の結びとなつてゐる。たべる豆の數は地方化して取扱ふがよい。

取扱の要點

讀むこと　發音を正して讀ませる。太郎が文の主人公であることを讀取らせ、なほこの一家の人物を明らかにして、豆まきの夜の樂しい氣分を讀味ははせるやうに指導する。「福は內、鬼は外」は韻律を生かして讀ませてよい。

文字・語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　節分の話合については次のやうな問による。

「節分は何月何日ですか。」

「皆さんのおうちでは、どんなことをしますか。」

「豆をまくとき何と言ひますか。」

「皆さんの中で豆をまいた人がありますか。」

「皆さんは豆をいくつたべましたか。」

「その外にどんなことをしますか。」

文章挿畫(掛圖)を中心として話合をさせ、**ことばのおけいこ**五十七頁(二)を讀ませて對話であることを明らかにし、人物をきめて、對話をさせる。

書くこと　ことばのおけいこ五十六頁(一)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字を中心に指導する。「數」は字形筆順の困難な文字であるから特に注意する。

ことばの仕事　ことばのおけいこ五十九頁(三)によつて［　］の中に、「おとうさん」「おかあさん」「私」「弟」等を置きかへて話させ、敬語の使ひ方に注意させる。

注意すべきことば　文字　語句語法等

矯正すべき訛音方言

へや――「ヒヤ」「フェヤ」と訛らないやうに注意する。

拾ひ――「ヒライ」といはないやうに注意する。

えんがは――「イエンガワ」といはないやうに注意する。

文字

新字――福(フク)は内(ウチ)　鬼(オニ)　拾(ヒロ)ひ　數(カズ)

語句語法

次の語句は比較してその意義を確める。

福は内、鬼は外。

鬼は内、福は外。

鬼は外、鬼は外。

次の如き擬聲的語句に注意して指導する。

「きやつ、きやつ。」と大さわぎをして、

びしやりとおしめになりました。

備考

連絡

よみかた四「神だな」等と連絡して取扱に考慮する。

二十　金しくんしやう

教材の趣旨

軍人の胸に輝く數々の勳章、その中でも金鵄勳章は武功を表徴する

最も譽れの高いものである。ヨイコドモ下「キゲン節」と關聯して金鵄勳章の由來を明らかにし、その譽れをたたへ軍人精神を昂揚し、高度國防國家體制の樹立に資するものである。

勳章はそれぞれ勳功を表彰するものであるが、金鵄勳章は最高の武功を表し、軍人のみに下賜し給ふものである。しかも御制定の由來は畏くも神武天皇の御創業にあたり、武勳を立てた靈鵄にあることを思へば、金鵄勳章の名譽はいよいよ赫々たるものがある。

文章

不定型、二聯の詩である。

第一聯は軍人の胸に輝く燦然たる勳章をたたへ、第三聯には特に金鵄勳章の由來とその譽れを敍してゐる。

第一聯はまづ童心さながらに軍人を尊び、その武功を讃美して「軍人さんの胸は、くんしやうでいつぱいです」と全體的に敍し、武功を象徴する勳章をたたへ、更にそれぞれの勳章の色彩形狀によつて「花のやう」「日の丸のやう」「金のとびの金しくんしやう」といつてゐるが、かうした並列の間に最後の金鵄勳章が取上げられて主題となつてゐるのである。「花のやう」「日の丸のやう」「金しくんしやう」―この反復的な叙述が、重韻や脚韻を重ねて詩の調子を整へてゐる。

第二聯の金鵄のいはれはヨイコドモ下に出てゐる。「今、軍人さんの胸にかがやいて」は、昔金色の光を放つた鵄が今は軍人さんの胸間に輝いて、その武功をあらはしてゐるの意味で、「昔」と「今」と相對して叙述したところにこの詩の妙趣がある。「よみかた」の挿畫には功二級(功一級の副章)の金鵄勳章をかかげ、「ことばのおけいこ」には瑞寶章と旭日章とを示し、なほ東郷元帥の寫眞によつて胸いつぱいの勳章が見せてある。

取扱の要點

讀むこと　本課から分別書は止めてあるが、促音及び拗音の表記はこれまで通りになつてゐる。これは第二期第三期の教科書の表記に移る過渡的な處置であつて、指導上注意すべき點である。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　文章挿畫及び、**ことばのおけいこ**六十頁(一)により次のやうな問によつて話合をさせる。

「この軍人さんは誰でせうか。」

「その胸に勳章がどうなつてゐますか。」

「どんな形の勳章がありますか。」

「花のやうな勳章はどれでせう。」

「日の丸のやうな勳章はどれでせう。」

「金鵄勳章の鳥は何といふ鳥ですか。」

「金のとびのお話をしてごらんなさい。」

書くこと　**ことばのおけいこ**六十頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば全文を書寫させる。

文字の指導　新字、讀替を中心に文字を指導する。「胸」は誤りやすいから特に注意する。

注意すべきことば文字語句語法等

矯正すべき訛音方言

くんしやう——「クンショ」といはないやうに注意する。

とび——「トンビ」「トービ」「トーヒ」などといはないやうに注意する。

文字

新字——胸

讀替——神武天皇

語句語法

次の如き比喩に注意して指導する。

花のやうなくんしやう、

日の丸のやうなくんしやう、

これらの比喩と「金のとびの金しくんしやう」との相違を明らかにする。

「今、軍人さんの胸にかがやいて」は、「軍人さんの胸はくんしやうでいつぱいです」と「金のとびの金しくんしやう」とを結びつけて具體的に取扱ふ。

備考

連絡

ヨイコドモ下「キゲン節」と密接に連絡して取扱ふ。

二十一　病院の兵たいさん

教材の趣旨

病院や療養所にあつて治療を受けてゐる白衣の勇士を慰問するのは、銃後國民の美しい眞心のあらはれである。教材はかうした眞心が子どもながらにあらはれた美しい場面を、勇士の感謝の心と結んで一體的に表現したもので、これによつて互に感謝感激する軍民一體の氣風に培ふものである。

負傷と病氣との差こそあれ、等しく皇國のために奮鬪して白衣の勇士となり、病窓に横臥する身となつた人々である。この人々に對し、國民は心から感謝の意をあらはし、慰安の眞心をつくして、一日も早くその快癒を祈るのである。

慰問の方法はいろいろあらうが、ここでは兒童の力に卽應し、しかも精神的なものに重點をおいた。草花は慰問品としては取立てていふ程のものでないにしても、兒童の手によつて栽培されたものであれば勇士に與へる感銘はいつそう深いであらう。不自由な身を運ばせて、毎朝水を取換へてゐるのもかうした感銘の自然のあらはれで、この心と心との融合、そこに軍民一體の美しい花は咲くのである。しかも慰問を受けた白衣の勇士の感激が禮狀となつて兒童を喜ばせ、その兒童の喜びは更に勇士を思ふ心となつて、心と心との融合はいよいよ深まつて行くのである。

文章

前半は病院へ白衣の勇士を慰問に行つたことであり、後半は病院の兵たいさんから來た禮狀である。しかも前半は概括的な筋書で、むしろ後半の文章によつてその時の慰問の樣子や心情が具體的にされてゐる。隨つて前半は後半の序としての役をつとめてゐる。

前半の文章は、ある日曜日に病院へ行くと、戰爭で傷を受けたり、病氣

になつたりした兵たいさんが大勢居られたこと、その方々へ花をあげたこと、學校のことやうちのことなどを話したことを簡單に記し、なほ兵たいさんたちが大そう喜んでくださつたことと、今度またお見舞に來ることを約束して歸つたことが併記してある。

これに對し後半の兵たいさんから來た手紙は、まづ第一にお見舞の禮をのべ、慰問に來てもらふことの嬉しいことを述べた後、「あなたのいらつしやつた時は、少しきずが痛んでゐましたが、あなたのお話がおもしろかつたので、痛みも忘れるほどでした」以下當日の樣子をやや具體的に叙して、文章上簡單な序と照應して理會され、心情が汲まれるやうになつてゐる。子どものした話が、白衣の勇士に如何に面白かつたか、もらつた花に對して如何に感謝したか、――その花が今も咲いてをり、傷の痛む身でありながら毎日水を取りかへてゐることまで記して、感謝の心を具體的にあらはしてある。

「この次には、何か、ゐもんひんを持つて來てくださるとのことでしたが、そんなしんぱいをしないでください」は、勇士の眞意を語るとともにまた慰問品に對する注意にもなつてゐる。物質的なものよりも、あなたがたが來て、お話をしてくださるのが、何よりもうれしいのです。その代り、今度は、この前のやうに、はづかしがらないで、ぜひ、いうぎをして見せてください」と精神的なものを望んでゐるのであつて、この邊は兒童にもよく理解させることが大切である。

最後の傷がだんだん痛まなくなつたといふのは、前の「きずが痛んでゐた」を受けて兒童に安心させようとするものであり、更にこの次お會ひする時には、「戰爭のことや、支那の子どものお話をしてあげませう」と樂しみを殘してゐるが、それは次の「支那の子ども」と自ら連絡する。

取扱の要點

讀むこと　發音を正して讀ませる。分別書は前課から止めてあるが、兒童はまだ當分なれないから範讀を懇切に示し、次第に讀みなれるやうに努める。讀みが進むに隨ひ、この文章が兵たいさんを慰問した部分と、兵たいさんから來た手紙の部分とから成つてゐることを理

會させ、慰問の樣子や、兵たいさんの感謝の心持を讀取らせるやうに指導する。

文字・語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

ことばのおけいこ 六十二頁(三)を讀ませ、兵たいさんから來た手紙の返事であることを讀取らせ、二つの文章を比較して理會を深める。

話すこと 文章・挿畫(掛圖)を中心とし、次のやうな問によつて話合をさせる。

「この子ども達は前の日曜日にどこへ行きましたか。」

「病院にはどんな兵たいさんがゐましたか。」

「その兵たいさんに何をあげましたか。」

「それからどんなことをお話しましたか。」

「兵たいさんたちはどう思ひましたか。」

「この子はまたどうすると言つてかへりましたか。」

「四五日たつて兵たいさんから何が來ましたか。」

「手紙にはどんなことが書いてありましたか。」

「兵たいさんにあげたお花はどうしてゐると書いてありましたか。」

「慰問品よりも何よりも嬉しいのは何であると書いてありましたか。」

「そのほかにどんなことが書いてありましたか。」

「皆さんはこのやうな手紙をもらつたらどうしようと思ひますか。」

書くこと **ことばのおけいこ** 六十二頁(二)によつて文字を正確に書かせ、適宜書取をさせる。

文字の指導 新字讀替を中心に文字を指導する。「院」「爭」「枕」等は特に字形筆順に注意する。

ことばのおけいこ 六十三頁(四)によつて、カナヅカヒの誤に氣づかせ訂正させる。

ことばの仕事 **ことばのおけいこ** 六十一頁(一)によつて、ことばを動作化することを工夫させ、又學校のことやうちのことについて話をさせる。

注意すべき ことば 文字 語句 語法等

アクセント

はな(花)——ハナ　はな(鼻)——ハナ

矯正すべき訛音方言

ゐもんに——「イモンク」などいふ地方では矯正する。

きずを——「キズバ」といふ地方では矯正する。

かたがたへ——「カタガタサ」といふ地方では矯正する。

まゐりますといつて——「いつて」の上の「ト」を脱落する地方では矯正する。

うれしいのです——「ウレシーデス」といはないやうに注意する。

きれいな花——「キレーダハナ」といふ地方では矯正する。

文字

新字――病院（インン）　戰爭（ソー）　枕（マクラ）　支那（シナ）

讀替――代（カワ）り

語句語法

次の如きことばは相關聯させて語義を明確にする。

病院　病氣　病人（ヨミカタ二「オイシャサマ」の課に既出）

ゐもん　見まひ　ゐもんひん

そのかたがた　あなたがた

次の如き文例に卽して「わざわざ」「ぜひ」「とのこと」の用法に注意する。

わざわざ持つて來てくださつてありがたう。

ぜひいうぎをして見せてください。

ゐもんひんを持つて來てくださるとのことでしたが、

備考

連絡

ヨミカタ二「ジャシン」同三「日曜日の朝」ヨイコドモ下「兵タイサンへ」等と關聯して取扱に考慮する。

二十二　支那の子ども

教材の趣旨

前課に關聯して「支那の子ども」を揭げ、彼の國の子どもが日本の兵士に親しみ、その仕事に協力してゐる生活をあらはした教材である。日支の提携、東亞新秩序建設の相を、兒童の心情に卽して具象的にあらはしたところにこの教材の意義がある。

かくの如き教材によつて、支那の子どもが皇軍の將士に親しみ、その仕事を助け、「日の丸」の歌を唱和することなどを知れば、わが國の兒童の感激は大きいものがあるであらう。支那の子どもはわれらの友だちであり、將來ともに手を取つて大東亞建設に邁進する精神に培ふことが大切である。

文章

支那の町が背景になつてゐるから、文章にもその趣が出てゐる。冒頭に、ここは、支那のある町です」とまづ場所を明らかにし、街上の様子が描かれてゐる。

せまい通には、赤いらふそくや、にはとりの卵や、あひるの卵や、にんにくや、はすの實などを、戸口に並べてゐる店があります。のき先に、大きなぶたの肉をぶらさげ、大きなはうちやうで、一きれ一きれ切取つて、賣つてゐる店もあります。

通の狹いことや、店頭にある品物などわが國の店と違つた點がかなり具體的にあらはしてある。（百四頁の挿畫は、この店頭と買物をする人たちで賑はつてゐる樣子を畫がいたものである）

かうした街上を、車に荷物を積んだ日本の兵士が通りかかる。ここで特に注意すべきは、

町の男や女たちが、この兵たいさんに、ていねいにあいさつします。

といふ支那人の好感を示す態度と、日本兵が車を引いて通るとき、「ちよつとごめんよ」と挨拶をする態度とである。互に尊敬しあひ好意を示すところに、日支兩國の楔が堅く打たれていくことが思はせられるのである。

通をぬけて、町の入口の門のところまで來ますと、そこには、日本の兵たいさんが、銃を持つて番をしてゐます。

支那の町特有の城壁の門があることと、日本兵によつて町の治安が保たれ、城門に歩哨が立つてゐることが叙せられてゐる。

車を引いてゐる兵たいさんが、けい禮をします。番をしてゐる兵たいさんも、けい禮をします。口にはいひませんが、おたがひに、

「ごくらうさま。」

「ごくらうさま。」

と、心の中でいつてゐるにちがひありません。

敬禮と無言の挨拶、皇軍の嚴肅な軍規とともに、心の中で互に勞苦をいたはる心持が見えてゐる。

以上描きだされた支那の町を舞臺として、支那の子どもが登場する。即ち門を過ぎて廣場に出ると、そこに遊んでゐた支那の子どもたちが「兵たいさん、兵たいさん」といつて集つて來る。彼等はかくまでわが兵士になつき、日本語さへ話すのである。それぱかりか、忽ち車の梶棒にとりつき、車の後押しをし、思ひ思ひにわが兵士を助けようとする。わが兵士はことばにこそ出さないが、心の中で喜んでゐることは、にこにこしたその樣子でよくわかる。この心と心との融合は、最後の「日の丸」の歌の合唱に於いて高潮に達する。「日の丸」の旗の讃美は日本の讃美であり、東亞共榮圏確立の協力の聲である。（日本の讀み方はニツポンを標準とするが、日の丸の歌の「日本の旗」は七七の韻律上ニホンと讀ませる）

取扱の要點

讀むこと　前課と同樣分別書でないから、範讀等によつて讀みになれさせるやうにし、支那の可を荷車を引いて行く日本の兵たいを想像させ、支那の人や子どもと親しみ合ふ心持で讀

取らせるやうに指導する。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　ことばのおけいこ　六十五頁(三)により挿畫掛圖と連繫して劇的に對話をさせる。

ことばのおけいこには後半を劇化したものが出してあるが、時間に餘裕があれば次のやうに前半も對話をさせるがよい。

支那の店の人「さあ、お買ひなさい、お買ひなさい。赤いらふそくもあります。にはとりの卵もあひるの卵も、にんにくも、はすの實もあります。」

支那の肉や「ぶたの肉はおいしい、おいしい。お買ひなさい、お買ひなさい。このはうちやうで一きれでも、二きれでも切取つてあげませう。」

支那の男一「ぶたの肉を買ふかな。」

支那の男二「はすの實を買はう。」

支那の女一「にはとりの卵と、あひるの卵を買つてかへりませう。」

支那の女二「わたしは赤いらふそくを買ひませう。」

支那の男三「日本の兵たいさんが、車にいつぱい荷物をつんで來ました。」

支那の女三「荷物がいつぱいで重さうね。」

兵たいさん「ちよつとごめんよ。」

支那の男「兵たいさんだ、兵たいさんだ。
四　兵たいさ「ちよつとごめんよ。」

書くこと　ことばのおけいこ六十四頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字・讀替の文字を中心として指導する。「卵」「荷」「過」等は字形・筆順ともに困難であるから特に注意して取扱ふ。

ことばの仕事　ことばのおけいこ六十四頁(一)によつてことばを動作にあらはすやうに工夫させる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

矯正すべき訛音方言

せまい——「セマコイ」「シェマイ」「セバイ」などといふ地方では矯正する。

あひる——「アイル」といふ地方では矯正する。

いつて——「ユーテ」といはないやうに注意する。

文字

新字——卵(ラン)　肉(ニク)　荷物(ニモツ)　銃(ジュー)　過(スギ)る　日本語(ゴ)　後押(オシ)し

讀替——荷物(ニモツ)　廣場(ヒロバ)

語句語法

「おたがひに」「とつぜん」——文例に即してその用法に注意させる。

「日本語」——「日本ノコトバ」(ヨミカタ二「ラジオノコトバ」)と連絡し、「何かわからぬことをがやがや話したり」「その後はがやがや何かわからぬことをいひながら」の句によつて、支那人の使ふことば即ち「支那語」を考へさせ、これと相對して、日本語の意味を確實にする。

「手つだはれながら」——受身の意味を用例によつて具體的に指導する。

備考

連絡

よみかた四「病院の兵たいさん」の發展として取扱ふ。

ヨイコドモ下「兵タイサンヘ」とも關聯がある。

(以上　二月)

二十三　おひな様

教材の趣旨

「鯉のぼり」が端午の節供として男兒に關係の深い傳統的な行事であるのに對し、女子の節供といはれる雛祭に取材したのが本教材である。雛祭の當日でなく、雛祭前におひな様をかざつて喜ぶ子どもの心情を捉へ、どこまでも生活的に動的に表現したところに變つた趣がある。

雛祭はまことにわが國風をあらはし、古典的に優美であるとともに、わが國の家庭教育を兒童の生活に卽して具象化するものであつて、特に女子の情操をはぐくむに大切な行事といふことができる。

文章

七五、二句六聯の詩である。雛祭の日が近づいたので、しまつて置いたおひな様を出して壇を設け、だいり様を始め、いろいろの雛人形を飾り、供物などをして喜び樂しむ子どもらしい心持が如實にあらはれてゐる。全體としておひな様に親しく呼びかけ、子どもとおひな様と一體になつたやさしい感情が表現されてゐる。

第一聯は、雛人形を箱から出さうとするところで、「春が來ました」は、「もう春になりましたよ、お退屈でしたでせうね」といふ心持であり、「さあさ、かざつてあげませう」と、おひな様をいたはつた氣持が出てゐる。

第二聯はだいり様、第三聯は官女、第四聯は五人ばやしを飾るところで、だいり様には「まあ、お久しい」と挨拶して鄭重に上の段にまつり、官女は赤いはかまによつてその美しさを、五人ばやしは「笛やたいこでにぎやかな」によつてその特徴をあらはしてゐる。かうして雛人形は一段二段三段と順序よく壇の上に飾られて行く。

第五聯は、飾り終へておひな様全體を見渡したところである。「かざればみんなにこにこと、おうれしさうなおひな様」――どこまでも主體的な表し方で、擬人化によつて美しい雛人形を生かしてゐる。

第六聯は、桃の節供特有のいろいろの供物をしようといふので、第一聯の「春が來ました」を受けて春を具象化し、雛祭當日の樂しさを豫想させてゐる。

取扱の要點

讀むこと　七五調の韻文であるから、發音を正しくし、韻律を生かして讀みを指導する。特におひな樣に對するやさしい感情を讀取らせるやうにする。

話すこと　文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

書くこと　文章挿畫(掛圖)により、おひな樣を飾ることを中心に話合をさせる。

ことばのおけいこ　六十七・八頁によつて文字を正確に書かせる。なほ時間に餘裕があれば全文を書寫させる。

文字の指導　新字を中心に指導する。「段」は誤りやすく、「桃」は頻度數の少い文字であるから特に注意する。

ことばの仕事　兒童を指名して、おひな樣になる子ども、かざる子どもなどをきめ、この詩を讀みながら、動作にあらはすやうに工夫させる。

注意すべきことば　文字　語句語法等

矯正すべき訛音方言

久しい――「シサシー」といはないやうに注意する。

にぎやかな――「ニーヤカナ」「ニンヤカナ」等と訛る地方では矯正する。

文字

新字――お久(ヒサ)しい・段(ダン)　宜(カン)女　笛(フエ)　桃(モモ)

語句語法

「お久しい」「おうれしさうな」――特に女子のことばとして丁寧な語法であることに注意する。

備考

連絡

よみかた三「鯉のぼり」と連絡して取扱を考慮する。

うたのほん下「ひな祭」、エノホン四「おひな樣」「おせつく」と連絡して取扱を考慮する。

二十四　北風と南風

教材の趣旨

冬と春との轉換期は、北風と南風の一進一退が特に目立つて感じられる。俗に「彼岸過ぎての七雪」といふ。夕方まで長閑な春日和が續きながら、一夜明けると霏々として春雪の降りそそぐのを見ることがしばしばである。

しかし、仔細に見ると、この現象は既に嚴冬の期から存在してゐる。諺に三寒四溫といつて、嚴寒・餘寒の頃も、數日の寒冷の後に、ぽうつと暖かさを感ずる日があるものである。もちろん、その頃は北風が猛威を振るつてゐる時期ではあるが、そのをやみに、南風がしのびしのびに寄つて來てゐるのである。それが三月頃になると、北風も荒れる代りに、時々南風が堂々の陣を張つて吹捲くるのである。

この文章は、以上の如き氣象的現象の擬人化であり、童話化である。隨つてそれは一種の科學的教材ではあるが、また一面からいふと、特に我が國人の關心事である「折ふしのうつりかはり」の一端の表現であつて、この點から見ると、この教材は自然文學の童話化であり、兒童化である。

冒頭に「北風と南風は、たいそう仲がわるいやうです」とその性質の相反してゐることが書かれてゐるが、これは全文の基調となつた擬人的感情からいふのであつて、北風と南風の鬪爭も、この心持を以て解さなければならない。第一段は北風が猛威を振るふ場面、第二段は北風の抗爭にかかはらず南風が次第に勢を增す場面、第三段は南風が凱歌をあげる場面である。

第一段は冬の季節である。北風がびゆうびゆうと吹きまはつて盛に「雪やあられを降らせたり、水をこほらせたり」する。この頃南風の力はまだ頗る微弱で、僅かに北風の隙をねらつて「そつとやつて來て」北風の作つた「雪の山や、氷の池を、少しでもとかさう」とする程度に過ぎない。いはば全く北風の天下である。

第二段は冬が終に近づいて、そろそろ太陽の暖い光を送り、南風が勢

力を増すところである。この時期になると南風はもう「前のやうに負けてばかりは」ゐない。「北風、おまへは、もう北の國へかへつてしまへ」といふだけの意氣込で北風に迫る。しかし北風はまだなかなか頑强である。

「なあに、まだおまへの出て來る時ではない。わたしは、もう一度おまへを追ひはらつて、野や山をまつ白にしてやる。」

かう言つて南風を追立て、また雪を降らせて野山をまつ白にする。しばしばぶりかへす餘寒春寒を現すものと見てよからう。

第三段に至つて、さすがの北風も頓にその威衰へ、南風が勢を得て勝利を得る。三四月の交、しばしば南風が吹いて春色をもたらし、やがて春風駘蕩の候となつて爛漫の花を咲かせ、新綠の野山を展開する季節に該當する。

「北風が雪や氷で、野山をまつ白にした代りに、わたしは、赤い花や、みどりの若草で、野山をかざつて見せよう。」

は、勝利を得た南風の凱歌であるが、冬の蕭殺たる光景と對比して、春の美しい野山が想像され、兒童に春の喜びを感得せしめるに十分であらう。

取扱の要點

讀むこと　發音を正し、文章を正確に讀ませる。文は大體三段にわかれてゐることに注意し、北風と南風の爭の推移を讀取らせ、來る春の喜びを感得させるやうに指導する。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　ことばのおけいこ六十九頁(二)によつて挿畫と連繫し對話を劇的に讀ませる。

書くこと　ことばのおけいこ六十八頁(一)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字を中心に指導し、「暖」「眠」「芽」等は特に字形筆順に注意する。

ことばのおけいこ七十四頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

アクセント

あめ(雨)――アメ　あめ(飴)――アメ

矯正すべき訛音方言

してゐる――「シトル」「シチョル」といふ地方では矯正する。

こんな――方言が多いから注意する。

暖い――「ヌクイ」「ヌクトイ」などの方言を矯正する。

追ひはらつて――「オッパラッテ」といはないやうに注意する。

かたはし――「カクッパシ」といはないやうに注意する。

文字

新字――暖い　終(オワリ)　眠つて　弱い　芽

語句語法

「あられ」――前課の「あられ」(霰餅)と比較して、混同させぬやうにする。

次の語句は比較して、その意義用法を明らかにする。

雪の山、

氷の池、

追ひはらひます。

追ひたてます。

追ひまくります。

「うとうと」「どしどし」――次の文に即して用法に注意する。

うとうと眠つて、

どしどしと追ひまくります。

備考

連絡

自然の觀察二「冬の天氣」同四「三月の野」と連絡して取扱に考慮する。

二十五　羽衣

教材の趣旨

「うらしま太郎」「早鳥」「かぐやひめ」等とともに、我が國民に廣く愛好される傳說である。丹後風土記の原話は暫くおき、謠曲「羽衣」に於いてこの傳說は淨化され、天下の絕景富士を背景に、三保の松原を舞臺とする詩歌劇として構想されたのである。本教材は、かうした美しい國民文學を兒童の理解に卽して表現し、兒童の歌劇としたものであつて、自ら

傳說の夢幻と、風景の美と、人情の至純と、渾然一體たる趣にひたらせ、國民的情操に培ふべき教材である。

文章

「うらしま太郎」とともに、劇形式の文章であるが、合唱や獨唱が加り、舞踊的要素もはいつて、著しく歌劇的になつてゐる。

「すそ引くはての松原に、太平洋の波が立つ」――その三保の松原が舞臺である。空は晴れて浦波も靜かな春の日である。先づ最初の、

白いはまべの松原に、
波がよつたり、かへつたり。
かもめすいすいとんで行く、
空にかすんだ富士の山。

は合唱で、この美しい風景をあらはした合唱の間に、又はそれが終つてから漁夫が登場する。

漁夫は濱邊の景色にみとれてゐる中に、松の枝にきれいな着物がかつてゐるのを發見し、それを持つて歸らうとすると、そこへ女が現れて漁夫と問答する。さうしてそれは私の着物で天人の羽衣であるから返してくれといふ。このことばで女が天人であることが始めてわかるのであつて、以下女は天人としてあらはしてある。漁夫は天人の羽衣ならば國の寶にするといつていつかな返さうとしない。天人は悲しさうな顏をする。漁夫はさすがに氣の毒に思つて羽衣を返す。天人はそのお禮に天人の舞をまひながら昇天するといふ筋である。

この間注意すべきは、素朴な漁夫が、相手が天人であることを知るに隨つて次第にことばの上に禮儀をあらはして行くことと、天人のことばが、最初から極めてやさしく丁寧な中に威嚴をそなへてゐることである。殊に「天人は、うそといふものを知りません」とやさしくきつぱりいつたのに對し、漁夫は「ああ、これは、はづかしいことを申しました」と素直に恥入つてゐる。

月の都の天人たちは、

みんなそろつてまひ上手。

以下三聯の詩は天人の獨唱であつて、文章の上では、この歌に伴なつて天人が靜かに舞つてゐることをあらはしてゐる。

黑い衣のそろひでまふと、

月はまつ黑やみの夜。

白い衣のそろひでまふと、

月は十五夜まんまるい。

月宮殿では、白衣・黑衣の天人が、數を三五に分つて奉仕をするといふ。白衣・黑衣の組合せによつて、新月から滿月に移り、滿月から新月に移るといふのであつて、新月は黑衣の天人が揃ひ、滿月は白衣の天人が揃つて舞ふといふ傳說を童謠的にあらはしたのである。

右に、左にひらひらと、

ゆれるたもとが美しい。

以下四聯は合唱で、この課の最初の合唱と呼應するばかりでなく、その合唱の風景主題と、天人の舞踊主題とが一聯おきに交錯させてあり、舞ひながら昇天する天人が自然の中に姿を消して行く趣を表現してゐる。

取扱の要點

讀むこと　劇形式の文章であるから、ト書の部分と對話の部分とを區別して讀ませる。對話の部分では漁夫と天人を讀みの上にあらはすやうに指導する。しかし對話はわざとらしい盜詞口調に陷らないでどこまでも兒童の讀みの自然に即することを忘れてはならない。發音を正し、文字語句を指導し讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと　兒童を指名し、劇の仕組にしたがつて役割を定め、挿畫(掛圖)と連繫して劇的に讀ませることを繰返へさせる。

書くこと　**ことばのおけいこ**七十五頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ適宜書取をさせる。

文字の指導　新字を中心として指導する。「衣」「靜」は特に字形筆順に注意を要する。

ことばの仕事　**ことばのおけいこ**七十四頁(一)によつてことばを動作にあらはさせ、ことばの理會に資する。

注意すべきことば・文字・語句・語法等

矯正すべき訛音方言

かもめ――「カゴメ」と訛る地方では矯正する。

天氣だ――「テンキジャ」「テンキヤ」などといふ地方では矯正する。

着物――「キリモン」などといふ地方では矯正する。

しよう――「ショー」といはないやうに注意する。

拾つた――「ヒラッタ」といはないやうに注意する。

できません――「デケマセン」「デケマヘン」などといふ地方では矯正する。

まふ――「モー」といはないやうに注意する。

文字

新字――羽衣（ごろも）　漁夫（ぎょふ）　お返（かえ）し　靜（シズ）かに

語句語法

次の語句は、やや特殊のことばであることに注意し、兒童の理會に卽して適當に說明する。

漁夫　見とれる　羽衣　天人のまひ　月の都　たもと

次の語句は比較して用法に注意する。

（どうぞ、お返しくださいませ。
いや、返されません。）

（いただきませう。
いただきます。
いただきません。）

（まはずに、
まひます。
まひませう。
まふと、）

備考

連絡

よみかた三「うらしま太郎」同四「富士山」「かぐやひめ」等と連絡を考慮して取扱ふ。

てほん下「天人羽衣松原」と連絡して取扱ふ。

注意

話し方の重要性から劇教材が多く採られ、本教材の如きほぼ兒童劇として完全な形式を備へたものが提出されるに至つた。――これらは敢へて扮裝實演せしめることを目的とする

ものでなく、專ら教室に於ける話しことばの練習として劇的に話させることを目標とする。隨つて殊更扮裝せしめるの必要はなく、唯ことばと動作とを結合する意味に於いての演出に重點を置く。もちろん、學藝會などに於いて或程度の扮裝や裝置を施し、實演させることを決して否定するものでないが、その際注意すべきことは、兒童をして學習を綜合的に表出させるべきことであつて、隨つて扮裝の如きは圖畫工作等と密接に關聯を保つやうにしなければならない。なほかかる演出に際し、兒童教師父兄等の不純な虚榮心は教育的に最も戒むべきものである。

（以上　三月）

新出讀替文字一覽

〔左傍ニ――ヲ附シタモノハ讀替文字〕

課	頁	行	新出讀替文字
一	四	一	富士山（フジサン）
	五	一	太平洋（タイヘイヨウ）
二	六	五	世界（セカイ）
		三	勢（いきほひ）
	七	五	村々
		七	午後（ゴゴ）
			困（こマ）つた

課	頁	行	新出讀替文字
二	七	八	半分（ハンブン）
	八	二	大木（ボク）
	一〇	二	大勢（ゼイ）
			大工（ク）
			集（つノ）めて
	一二	七	名（ナ）
	一三	一	麥（ムギ）

二	一三	一	豆
		二	通ひ
三	一三	六	讀んで
	一四	三	頭
	一四	七	黑く
	一七	一	字
			書いて
	一八	一	加賀
四	一九	一	乘合自動車
			帝國
			席
			腰
			出征
四	一九	三	松並木
		四	稻
		七	生徒
	二一	三	女
		五	友だち
	二二	四	元氣
		九	結びめ
	二三	二	席
	二四	三	腰
			出征

四	二四	三	孫
五	二六	一	菊
		五	明治節
		六	天皇陛下
六	二八	四	線
		六	用意
		七	聲
	二九	二	追ひ
		三	負ける
七	三三	五	育て
			世間
		五	晩
		七	嫁
	三四	七	
		六	眺めて
		九	泣き
	三六	三	悲しさう
		六	迎へ
		七	お別れ
	三七	三	安心
		九	申し

七

三八 二 守らせる

六 弓矢

八 一間

三九 一 番

四一 二 ご恩

四二 一 腹つづみ

八

二 夜中

四 親だぬき

三 打ちくら

六 木かげ

九

四四 二 滿洲

三 島

四 一匹

八 岩

四八 二 寒さ

四九 三 指

五 畫

五〇 一 包まれて

八 じゆ氷

一〇

一〇 五一 一 住んで

五二 六 スケート場

九 細い棒

一一 五三 五 鏡

五四 一 受ける

二 窓

五五 九 毛

五七 四 羽ばたき

九 孝行

一二 五八 五 物

六一 七 鏡餅

六二 二 床の間

六三 六 新年

六五 一 昭和

七 門松

七〇 三 四錢

一三

一四 二 上手

七 夕方

一五六

一五七

良不き開

一四	七一	三	始り	一七	八〇 五 白兒
一五	七二	二	入營		六 陸
		三	青年學校		三 仲間
			服を着て		多い
	七三	二	怠い兵所		四 渡つて
		四	立札	八四	六 神樣、
	七四	二	山田武	八五	七 大國主のみこと
		八	兵舍		九 兄樣がた
一六	七五	一	休む	一八 八八	五 降つたり
	七八	六	烏	八九	六 骨

一八	九〇	三	系	二一	一〇〇 三 戰爭
		九	教へて		一〇二 六 枕
	九一	一	今度		一〇三 三 代り
一九	九六	二	福は內		七 支那
			鬼	二二	一〇四 四 卵
	九八	四	數		一〇五 二 荷物
		八	拾ひ		七 肉
二〇	九八	六	胸		一〇六 四 銃
	九九	三	神武天皇		一〇七 二 過ぎる
二一	一〇〇	一	病院		廣場

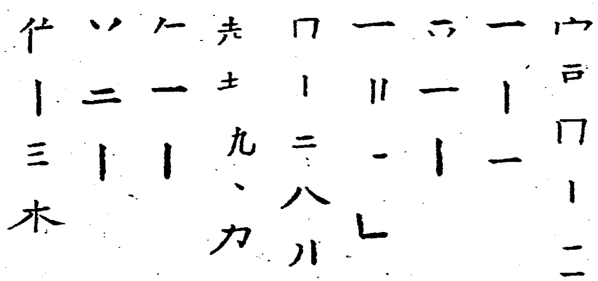
二三	一〇七	七	日本語(ゴ)
	一〇八	二	後押(オ)し
二三	一一二	一	お久(ヒサ)しい
		二	段(ダン)
		三	官(クワン)女
		五	笛(フエ)
	一一二	三	桃(モモ)
二四	一一三	五	暖(アタタカ)い
	一一四	一	終(ヲハリ)
		二	眠(ネム)つて

二四	一一四	二	弱(ヨワ)い
	一一六	二	芽(メ)
二五	一一六	八	羽衣(ゴロモ)
	一一八	一	漁夫(ギョフ)
	一一九	九	お返(カヘ)し
	一二二	二	静(シヅ)かに

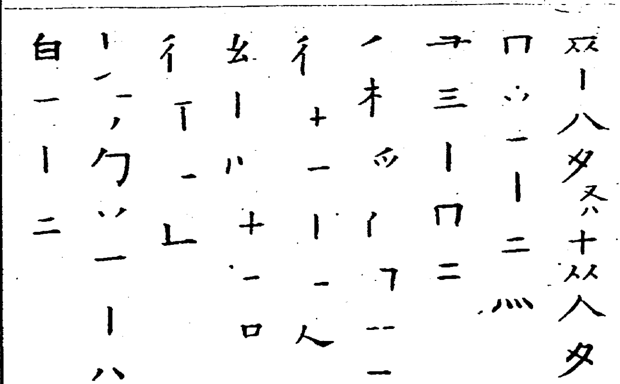
運筆順序

（特に筆順の誤り易いもの又は二様以上あるものに就いて、藝能科習字と連絡しできるだけ統一して掲げた。）

富　士　平　世　界　勢　午　半　集



麥　黒　書　稲　徒　結　征　菊　皇



開き不良

聲 キョウノ又一ーニー
嫁 くノ一ウテノクく
眺 目ノンビ又目ルンく
悲 ーニーニ心又ニニ心
迎 ーレフー之
別 ロノリ又ロノクリ
安 ウくノ一
弓 コク
番 ウ十八ローニ
滿 シサニロー以

洲 シリリ
島 イヨーフ、ー山
匹 一ルレ
寒 ウニニ八ニ又ウニニ八ニ
晝 ニーロニ一
住 イニーニ
細 ムーハローニ
棒 木ニ人ニー
毛 ニレ
娘 くノ一、ヨレく

餅 ハヨムリニル
供 イ一ニ一ハ
錢 金ヤノ、ヤノ、
始 くノンムロ
服 月フー又
着 ソニーニノロニ
所 ムコイ一
武 ニ一ニ一し、
舍 ハニ一ロ
樣 木ソニニフく

主 ニ一ニ
降 ヨークへ一レー
骨 ロ一ウ月ニ
福 ニ一川ロロ一ニ
鬼 ウ一ニノしム
數 ロニロくノンム又
胸 月ニクメ山
那 フノニヨ一又フニノヨ一
卵 イレ、ノフー、
荷 ハニ一ノイ一ロノ

銃　金　ム　ル

過　ロ　ー　ロ　ロ　辶

段　イ　ニ　ノ　ル　又

官　宀　ー　コ　コ

笛　ケ　ケ　冂　ー　ニ

桃　木　ノ　ン　し　く　ス　木　ル　ン　く

眠　目　コ　レ　ー　し

弱　コ　ク　ン　コ　ク　ニ

芽　丶　ー　ー　ノ　ー　ー　ー　ノ

衣　亠　ノ　レ　人

静　ー　ー　ニ　日　亠　ツ　コ　ー　ニ　丿

鉛筆による書き方指導上の注意

姿勢

一、椅子にやや淺く腰をかけ、兩脚は少し開く。

一、下腹を前に出し、尻を引いて脊柱を正しくする。

一、胸を机におしつけぬやうにする。

一、左手を紙上にのせ、左肱を前に張らぬやうにする。

執筆並びに運筆

一、右腕は輕く机上にのせ、脇の下を開いて腕を伸す。

一、低學年では掌の右側を紙につけて書くが、高學年に及んで次第に輕くつけ、遂には手首のみをつけて運筆するやうに指導する。

一、四本の指は離れぬやうに密着させる。

一、鉛筆と紙面との角度は、右後へ六十度乃至七十度とする。

一、鉛筆は中指の爪のつけ根のあたりから、食指の根本にかける。

一、鉛筆は輕く持つて、あまり下を持たぬやうにする。
一、運筆は毛筆の如く強弱緩急をつけず、低學年に於いては字形を主とし、上達するに隨つて速度を加へ緩急をつける。

その他

一、鉛筆は直徑の二倍乃至三倍の斜面に削り、芯はなるべく尖らせないで使ふやうに躾ける。
一、鉛筆の芯をなめるくせをつけないやうにする。

よみかた四の發音（ガギグゲゴは鼻濁音を示す。）

一　フジサン

ドコカラ　ミテモ、イツ　ミテモ、
フジノ　オヤマワ　ウツクシー。

シロイ　オーギオ　サカサマニ、
カケタ　シタカラ　クモガ　ワキ、

スソ　ヒク　ハテノ　マツバラニ、
タイヘーヨーノ　ナミガ　ダツ。

ヤサシーヨーデ　オーシクテ、

トートイ　オヤマ、カミノ　ヤマ。

ニッポンイチノ　コノ　ヤマオ、
セカイノ　ヒトガ　アオギミル。

二　ハヤトリ

ムカシ、アルトコロニ、イッポンノ　クスノキガ　ハエマシタ。タ
イヘンナ　イキオイデ、ヒルモ　ヨルモ、グングント　ノビテ　イキ
マシタ。

ナンネンカ　タツ　ウチニ、コノ　クスノキワ、イママデ　ミタ
コトモ　キータ　コトモ　ナイホド、オーキナ　キニ　ナリマシタ。
トートー　ソノ　テッペンワ、ソラノ　クモニ　トドクヨーニ　ナ
リマシタ。オーキナ　エダワ　シホーニ　ヒロガッテ、ドコカラ　ド
コマデ　ツズイテ　イルノカ、ワカラナイホドニ　ナリマシタ。

マイアサ　ヒガ　デルト、コノ　キノ　ニシガワ　ワ、ナンジュー
ト　ユー、ムラムラガ、ヒカゲニ　ナリマス。ゴゴニ　ナルト、ヒガ
シガワノ　ナンジュート　ユー　ムラムラガ、ヒカゲニ　ナリマス。
「ドーモ　コマッタ　モノ　ダ。」
「オコメガ　ハンブンモ　デキナイ。」
「ナントカ　ナラナイ　モノカナー。」
アチラノ　ムラデモ　コチラノ　ムラデモ、コー　イッテ、コノ　タ
イボクオ　ミアゲマシタ。
アル　チエノ　アル　オジーサンガ　イーマシタ。
「シカタガ　ナイ。コノ　キオ　キル　コトニ　ショー。」
ミンナワ　ビックリシテ、
「コンナ　オーキナ　キオ、キッテ　イー　モノ　デショーカ。」
ト　イーマスト、オジーサンワ、
「デモ、コノ　キワ、キルヨリ　ホカニ　ミチガ　アルマイ。」

ト　イーマシタ。

ソコデ、キル　コトニ　ナリマシタ。

コンナ　オーキナ　キノ　コト　デスカラ、ソレワ　ソレワ、オー！サワギ　デシタ。ナンジューニン、ナンビャクニント　ユー　キコリ！ガ、ナガイ　アイダ　カカッテ、ヤット　キリタオス　コトガ　デキ！マシタ。

コンドワ、キリタオシタ　キオ、ドースルカト　ユーコトニ　ナリ！マシタ。スルト、アノ　チエノ　アル　オジーサンガ、

「グリヌイテ、フネオ　ツクルガ　ヨイ。」

ト　イーマシタ。

ソコデ、オーゼーノ　ダイグオ　アツメテ、フネオ　ツクル　コト！ニ　ナリマシタ。ナンネンカ　タッテ、トートー　イッソーノ　フネ！ガ　デキアガリマシタ。ウミニ　ウカベテ　ミルト、イママデ　ミタ！コトモ　キータ　コトモ　ナイ、オーキナ　フネ　デシタ。

オーゼーノ　センドーガ　ノリコンデ、「エイヤ、エイヤ。」ト　コギ！マシタ。オドロイタノワ、ソノ　フネノ　ハヤイ　コト　デス。カイ！オ　ソロエテ　ヒトカキ　ミズオ　カクト、フネワ　ナナツノ　オー！ナミオ　ノリキッテ、トリノ　トブヨーニ　ハシリマス。

「ナント　ユー　ハヤイ　フネ　ダロー。」

「フシギ　ダ、フシギ　ダ。」

ト、センドータチモ、ミテ　イル　ヒトビトモ　イーマシタ。スルト、アノ　チエノ　アル　オジーサンガ、

「イヤ、フシギデモ　ナンデモ　ナイ。アノ　イキオイノ　ヨイ　ク！スノキデ、ツクッタ　フネ　ダ、イキオイノ　ヨイノガ　アタリマ！エサ。カンガエテ　ミレバ、コノ　スバラシー　フネニ　ナル　タ！メニ、アノ　キワ、グングン　ノビタノカモ　シレナイ。トリノヨ！ーニ　ハヤイ　フネ　ダカラ、ハヤトリト　ユー　ナオ　ツケヨー。」

ト　イーマシタ。

ソノノチ、ハヤトリワ、タクサンノ コメヤ、ムギヤ、マメオ ツ゛ンデ、ミヤコノ ホーエ゛タビタビ カヨイマシタ。ソノ オカゲデ、ヒカゲニ ナッテ コマッテ イタ ムラムラワ、ダンダン ユタカ゛ニ ナッテ イッタト ユーコト デス。

三 カイグンノ ニーサン

ボクガ ホンオ ヨンデ イルト、クツノ オトガ シテ、ダレカウチエ ハイッテ キマシタ。デテ ミルト、カイグンノ ニーサンデシタ。

ニーサンワ、ニコニコシナガラ ザシキエ アガッテ、オトーサン゛ニ ゴアイサツオ シマシタ。ウラノ ハタケニ イタ オカーサン゛モ カケテ キテ、アタマカラ テヌグイオ トリナガラ、

「ヨク カエッテ キマシタネ。」

ト ウレシソーニ オッシャイマシタ。

ニーサンワ、マエヨリモ ズット イロガ クロク ナッテ、ツヨ゛ソーニ ミエマシタ。

オカーサンワ オチャオ イレテ、

「ホントーニ シバラク デシタネ。マー、ヒトツ オアガリ。」

ト オッシャイマシタ。

ボクワ ウレシクテ、ニーサンノ マワリオ トビアルキマシタ。

ニーサンワ、

「イサム、オーキク ナッタネ。イー コニ ナッタ。」

ト イーマシタ。

「ボクモ オーキク ナッタラ、カイグン ダヨ、ニーサン。」

ト ユート、

「ソレワ イー。ダイジョーブ ナレルヨ。」

ト、ニーサンワ ボクノ アタマオ ナデテ クレマシタ。

ボクワ　ウレシクテ　タマリマセン。ニーサンノ　ボーシオ　カブ
ルト、オトーサンガ、
「カワイラシー　スイヘーサン　ダゾ。」
ト　イッテ、オワライニ　ナリマシタ。ボーシニワ、キンデ　ジガ
カイテ　アリマシタ。
「ダイニッポン、ソノ　ツギワ　ナント　ヨムノ、ニーサン。」
「ダイニッポンテーコク。」
「ア、ワカッタ、ダイニッポンテーコクカイグン。」
「ソー　ダ、ヨク　ヨメタネ。」
ニーサント　イッショニ、オフロニ　ハイリマシタ。ソレカラ、ミ
ンナデ　ゴハンオ　イタダキマシタ。
ニーサンワ、シジュー　ニコニコシナガラ、グンカンヤ　ヒコーキ
ノ　オモシロイ　ハナシオ、イロイロト　シテ　クレマシタ。ニーサ
ンノ　ノッテ　イル　カガワ、コークーボカンデ、タクサンノ　ヒコ

ーキガ、ヒロイ　カンパンカラ　イサマシク　トンデ　イクソー　デ
ス。
「グンカント　イッテモ、カガナドワ、ウゴク　ヒコージョーノヨー
ナ　モノ　デスヨ。」
ト、ニーサンワ　イーマシタ。
オトーサンワ、「ホー、ホー。」ト　イーナガラ、カンシンシテ　キー
テ　イラッシャイマシタ。
ネル　トキニワ、ボクワ　ニーサント　ナランデ　ネマシタ。

四　ノリアイジドーシャ

キノー　ノリアイジドーシャニ　ノッテ、ホマチノ　オバサンノ
トコロエ　イキマシタ。マツナミキオ　トーリヌケルト、タンボデワ、
イネオ　サカンニ　カリトッテ　イマシタ。
シバラク　イクト、ウシノ　ヒーテ　イル　クルマオ　オイコシマ

シタ。サムラノ　イリゲチデ、ルックサックオ　セオッタ　チューガ
ッコーノ　セートサンガ、フタリ　ノリコミマシタ。
ミチガ　ダンダン　ノボリニ　ナッテ、ジドーシャワ　オーキナ
オトオ　タテテ、グングン　ノボリマシタ。リョーガワカラ　サシデ
タ　キノ　エダガ、マドニ　トドキソー　デシタ。キーロヤ、アカイ
キノ　ハデ、クルマノ　ナカガ　アカルイホド　デシタ。
トーゲニ　キタ　トキ、セートサンガ、
「ウミガ　ミエル。」
ト　オーキナ　コエデ　イーマシタ。ヤマト　ヤマトノ　アイダニ、
ウミガ　ヒカッテ　イマシタ。
トーゲオ　オリタ　トコロデ、マタ　トマリマシタ。ソコデ　オン
ナノ　コガ　ヒトリ　ノリマシタ。ソトデワ、ソノ　トモダチガ　ヨ
ニン　ナランデ、「サヨーナラ、サヨーナラ。」ト　イッテ、テオ　フリ
マシタ。

カワエ、キマシタ。ハシオ　ワタロート　スルト、ムコーカラモ
ノリアイジドーシャガ　キマシタ。メーメー　ヒダリエ　ヨッテ、ス
レスレニ　トーリマシタ。ウンテンシュサンガ　オダガイニ、テオ
アゲテ、ゲンキヨク　アイサツオ　シマシタ。
ホマチニ　チカイ　トコロデ、ドコカノ　オバーサンガ　ノリマシ
タ。フロシキズツミオ　サゲテ　イマシタガ、ムスビメカラ、チーサ
ナ　ヒノマルノ　ハタガ　ノゾイテ　イマシタ。ワタクシガ　ワキエ
ヨッテ　セキオ　アケルト、オバーサンワ　コシオ　カケナガラ、
「アリガトー、ボッチャンワ　ドコマデ。」
ト　タズネマシタ。
「ホマチノ　オバサンノ　トコロエ　イクノ　デス。」
ト　コタエマスト、
「ソー　デスカ、ワタシモ　ホマチマデ　イキマスヨ。シュッセース
ル　マゴガ、キョー　キシャデ　トーリマスノデネ、ミオクリニ

イク　トコロナン　デスヨ。」
ト　イーマシタ。
ミチノ　マンナカデ、ニワトリガ　タクサン　エサオ　ヒロッテ
イマシタノデ、ウンテンシュサンガ、「ブーブー。」ト、ラッパオ　ナラ
シマシタ。ニワトリワ、オドロイテ　ミギト　ヒダリエ　ニゲマシタ。
マモナク　ホマチニ　ハイッテ、ユービンキョクノ　マエデ　トマ
リマシタ。オバサンノ　ウチノ　サブローサンガ、ワタクシノ　オリ
ルノオ　ミツケテ、ワライナガラ　ハシッテ　キマシタ。

五　キクノ　ハナ

アキゾラ　タカク
ハレワタリ、
キクノ　ハナ　サク、
メージセツ。

テンノーヘーカノ
オジーサマ、
メージノ　ミカドオ
アガメマショー。

キクワ　トートイ
ゴモンショー、
ワタクシタチノ
スキナ　ハナ。

テンノーヘーカノ
オジーサマ、
メージノ　ミカドニ

ササゲマショー。

六　カケッコ

イチネンセーノ　ハタトリガ　スンデ、イヨイヨ　ボクタチノ　カケッコニ　ナリマシタ。

ボクタチ　シチニンワ、シロイ　センニ　ソッテ　ナラビマシタ。

「ヨーイ。」

ト　センセーノ　コエ。

「ドン。」

キクガ　ハヤイカ、カケダシマシタ。

ソノウチニ、フタリガ　ボクオ　オイコシマシタ。

「マケル　モノカ。」

ボクワ　イッショーケンメーニ　ハシリマシタ。

「ハヤク、ハヤク。」

「シッカリ。」

オーエンノ　コエモ、ゴチャゴチャニ　ナッテ　キコエマス。

モー　ナニモ　ミエマセン。ボクワ　ムチューデ　ハシリマシタ。

スルト、ナニカニ　ツマズイテ　コロビマシタ。

「シマッタ。」

ト　オモイナガラ、スグ　ハネオキマシタ。ガ、モー　ミンナカラ、スッカリ　オクレテ　イマシタ。

「ヨソーカ。」

ト　オモイマシタ。シカシ、オトーサンガ、「マケテモ　ヨイカラ、シマイマデ　ハシレ。」ト、オッシャッタノオ　オモイダシテ、マタ　イッショーケンメーニ　ハシリマシタ。

「ワー。」

ト　テオ　タタイテ、ワラッテ　イル　モノモ　アルヨー　デシタ。

キマリガ　ワルイト　オモイナガラ、ボクワ　オシマイマデ　ハシリ

ツズケマシタ。スルト、センセーガ　ニコニコシテ、
「タロークン、エライゾ。コロンデモ、ヨク　シマイマデ　ハシッタ。
カンシン、カンシン。」
ト　イッテ、ホメテ　クダサイマシタ。

七　カグヤヒメ

ムカシ、タケトリノ　オキナト　ユー　オジーサンガ　アリマシタ。
マイニチ　タケオ　キッテ　キテ、ザルヤ　カゴオ　ツクッテ　イマシタ。
アルヒ、ネモトノ　タイソー　ヒカッテ　イル　タケオ、イッポン
ミツケマシタ。ソノ　タケオ　キッテ、ワッテ　ミマスト、ナカニ
チーサナ　オンナノ　コガ　イマシタ。
オジーサンワ　ヨロコンデ、ソノ　コオ　テノヒラニ　ノセテ、ウチエ、カエリマシタ。チーサイノデ、カゴノ　ナカエ　イレテ、オバ

ーサント　フタリデ　ソダテマシタ。
コノ　コオ　ミツケテカラ、オジーサンノ　キル　タケニワ、タビ
タビ　キンガ　ハイッテ　イマシタ。オジーサンワ、ダンダン　オカ
ネモチニ　ナッテ　イキマシタ。
コノ　コワ、ズンズン　オーキク　ナリマシタ。ミツキホド　タツ
ト、モー　ジューシチハチグライノ　ムスメニ　ミエマシタ。ヒカル
ヨーニ　ウツクシーノデ、イエノ　ナカモ　アカルイホド　デシタ。
オジーサンワ、コノ　コニ　カグヤヒメト　ユー　ナオ　ツケマシタ。
セケンデワ、ヒカルヨーニ　ウツクシー　カグヤヒメノ　コトオ
キーテ、
「ムスコノ　ヨメニ　シタイ。」
「イヤ、ウチエ　モライタイ。」
ナドト　ユー　ヒトガ、タクサン　アリマシタ。ナニゴトニモ　スナ
オナ　カグヤヒメ　デシタガ、イツモ　オジーサンニ、

「ワタクシワ、ドコエモ マイリトー ゴザイマセン。」
ト イッテ、コトワッテ モライマシタ。
コーシテ イル アイダニ、ナンネンカ タチマシタ。アルトシノ
ハルノ コロカラ、ツキノ デル バンニ ナルト、カグヤヒメワ
ツキオ ナガメテ、ジット カンガエコムヨーニ ナリマシタ。
アキニ ナッテ、ツキガ ダンダン ウツクシク ナリマシタ。ハ
チガツノ ジューゴヤモ チカク ナッタ アルヨ、カグヤヒメワ
コエオ タテテ ナキマシタ。
オジーサンヤ オバーサンワ、オーサワギ デス。カグヤヒメワ、
「ナゼ ナクノカ。」ト キカレテ、ハジメワ ダマッテ イマシタガ、
シマイニ カナシソーニ コタエマシタ。
「ワタクシワ、モト、ツキノ セカイノ モノデ ゴザイマス。ナガ
イ アイダ オセワニ ナリマシタガ、コノ ジューゴヤニワ、ツ
キノ セカイカラ ムカエニ マイリマスノデ、カエラナケレバ

ナリマセン。ワタクシワ、オフタリニ オワカレスルノガ、ナニヨ
リモ カナシュー ゴザイマス。」
コノ コトバオ キーテ、オジーサンモ オバーサンモ、ビックリシ
マシタ。
「ソレワ タイヘンナ コト ダ。ダガ、ムカエニ キテモ ケッシ
テ ワタサナイカラ、アンシンシテ、ナク コトワ オヤメ。」
ト、オジーサンガ イーマシタ。
オジーサンワ、ナントカシテ カグヤヒメオ ヒキトメタイト オ
モイマシタ。
オジーサンワ カンガエニ カンガエタ スエ、コノ コトオ ト
ノサマニ モーシマシタ。スルト、トノサマワ、
「ソレワ ザンネンデ アロー。ヨシ、ソノ バン ケライタチオ
タクサン ヤッテ、オマエノ ウチオ マモラセル コトニ シヨ
ー。」

ト　オッシャイマシタ。
イヨイヨ　ジューゴヤニ　ナリマシタ。オジーサンノ　イエノ　マワリオ、ユミヤオ　モッタ　トノサマノ　ケライタチガ、イクエニモ　トリカコミマシタ。
オバーサンワ、シメキッタ　ヒトマノ　ナカデ、シッカリト　カグヤヒメオ　ダイテ　オリマス。オジーサンワ、ソノ　イリグチニ　タッテ　バンオ　シテ　オリマス。
ヨナカゴロニ　ナルト、キューニ　オツキサマガ　トーモ　デタカト　オモーホド、アタリガ　アカルク　ナリマシタ。
「サー、キタゾ。」
ト、トノサマノ　ケライタチワ、ユミニ　ヤオ　ツガエマシタガ、フシギニ　テアシノ　チカラガ　ナクナッテ、ドースル　ゴトモ　デキマセン、デシタ。
ソノトキ、オーゼーノ　テンニンガ、クモニ　ノッテ　オリテ　キマシタ。スルト、シメキッタ　ヒトマノ　トガ、ヒトリデニ　アキマシタ。オバーサンノ　テニ、シッカリト　スガリツイテ　イタ　カグヤヒメノ　カラダワ、ヒトリデニ　ソトエ　デテ　イキマシタ。モーダレノ　チカラデモ、ナントモ　スルコトガ　デキマセン　デシタ。
カグヤヒメワ、オジーサントオバーサンニ、
「トートー」　オワカレシナケレバ　ナラナイ　トキガ　マイリマシタ。
オフタリノ　ゴオンワ　ケッシテ　ワスレマセン。ドーゾ、ツキノヨルニワ、ワタクシノ　コトオ　オモイダシテ　クダサイ。ワタクシモ、アノ　ツキノ　セカイカラ、オフタリオ　オガンデ　オリマショー」。
ト　イッテ、テンニンノ　ヨーイシテ　キタ　クルマニ　ノリマシタ。
カグヤヒメオ　ノセタ　クルマワ、オーゼーノ　テンニンニ　カコマレナガラ、シズカニ　テンエ　ノボッテ　イキマシタ。

八　タヌキノ　ハラツヅミ

「サー　サー、アツマレ、ツキガ　デタ。
ミンナデ　ツヅミノ　ウチクラ　ダ。」
オヤマノ　ウエデワ　オヤダヌキ、
ポンポコ　アイズノ　ハラツヅミ。

ヤブノ　カゲカラ　コカゲカラ、
ヌックリ　ヌックリ、コダヌキガ、
デテ　キテ　オヤマエ　アツマッテ、
ズラリト　ナランデ　ワ　ニ　ナッタ。

ソラニワ　マルイ　オツキサマ、
ポッカリ　ウカンダ　シロイ　クモ。

ツキニ　ウカレテ　ハラツヅミ、
ポンポコ　ポンポコ　ウチダシタ。

九　キンノ　ウシ

コレワ　マンシューノ　ハナシ　デス。
ウミノ　ナカニ、チーサナ　シマガ　アリマシタ。ソノ　シマニ、
イッピキノ　キンノ　ウシガ　イマシタ。
オナカガ　スイタノデ、クサオ　タベヨート　オモッテ、アチラ
コチラ　アルキマシタガ、コノ　シマニワ、イッポンノ　クサモ　ハ
エテ　イマセン　デシタ。
キンノ　ウシワ、コダカイ　イワノ　ウエニ　アガッテ、シホーオ
ミワタシマシタ。ウミノ　ムコーニ、モー　ヒトツ　シマガ　ミエマ
シタ。ソノ　シマニワ、ミドリノ　クサガ　イチメンニ　ハエテ　イ
マシタ。

「ナント　オイシソーナ　クサ　ダロー。ヒトクチ　タベタイナー。」
ト、キンノ　ウシワ、ヒトリゴトオ　イーマシタ。スルト、フシギニ
イママデ　スイテ　イタ　オナカガ、キューニ　イッパイニ　ナリマ
シタ。
ツギノ　ヒモ、キンノ　ウシワ、イワノ　ウエニ　アガッテ、ミド
リノ　シマオ　ナガメマシタ。ヤハリ、オナカガ　イッパイニ　ナッ
テ、ヨイ　キモチニ　ナリマシタ。
コーシテ、キンノ　ウシワ、オナカガ　スクト、ミドリノ　シマオ
ナガメテワ、オナカオ　イッパイニ　シマシタ。オカゲデ、キンノ
ウシワ、オナカガ　スイテ　コマルト　ユーコトワ　アリマセン　デ
シタ。
トコロデ、アルヒノ　コト、キンノ　ウシワ、フト　コンナ　コト
オ　カンガエマシタ。
「ココカラ　ミルダケデモ、オナカガ　イッパイニ　ナルノ　ダカラ、

アノ　シマノ　クサオ　ホントーニ　タベタラ、ドンナニ　オイシ
ー　ダロー。」
キンノ　ウシワ、モー、ジットシテ　イラレナク　ナリマシタ。
イキナリ　ウミオ　メガケテ、ドブント　トビコミマシタ。
キンノ　ウシワ、ジブンノ　カラダガ　キンデ　アッタ　コトオ、
スッカリ　ワスレテ　イタノ　デス。ソノママ　ウミニ　シズンデ
シマイマシタ。

十　マンシューノ　フユ

サムサノ　タメニ、マドガラス　イチメン、マッシロニ　コーッタ。
ノワ　キレーナ　モノ　デス。コノ　コーリノ　モヨーワ、ドレ　ヒ
トツトシテ　オナジ　モノガ　アリマセン。ヒトガ　カイテモ、コン
ナニ　キレーニワ　カケナイ　デショー。
シロイ　キクノ　ハナガ、サキソロッタヨーナノモ　アリマス。

シロクジャクガ、ハネオ イッパイニ ヒロゲタヨーナノモ アリマス。

ホシガ ナランデ、ヒカッテ イルヨーナノモ アリマス。

コドモタチワ、コノ コーリノ ウエニ、ユビデ ジオ カイタリ、ヒトノ カオオ カイタリシテ アソビマス。

ヒルニ ナルト、イツノマニカ、ガラスノ コーリモ スッカリキエマスガ、ツギノ アサニワ、マタ アタラシー チガッタ モヨーガ、ウツクシク アラワレマス。

ガラスノ コーリモ キレー デスガ、ジュヒョート ユーノワモット キレー デス。コレワ、キノ エダト ユー エダガ、スッカリ コーリニ ツツマレテ シマウノ デス。チョード スイショーデ ツクッタ キノヨー デス。

コノ ジュヒョーニ アサヒガ サスト、キラキラト ヒカッテ、ミゴトナ モノ デス。カゼガ フイテ クルト、キノ エダガ フ

レアッテ、カラカラト カワイラシー オトオ タテマス。

マンシューニ スンデ イル ニッポンノ コドモタチワ、イクラサムクテモ、ゲンキヨク スケートオ シマス。

サイショワ、スケートオ ツケテ コーリノ ウエニ タツ コト モ、ナカナカ ムズカシーノ デスガ、ソノウチニ イチメートル、ゴメートル、ニジューメートルト、ダンダン ンマク スベレルヨーニ ナルノ デス。ノチニワ、スベリナガラ マガッタリ、ウシロムキニ スベッタリ、トモダチト テオ ツナギアッタリシテ、オモーママニ スベリマス。コー ナルト、オモシロクテ オモシロクテタマリマセン。

サムケレバ サムイホド、コドモタチワ ヨロコビマス。ソレワ、サムイホド、スケートジョーノ コーリガ カチカチニ ナッテ、スベリヨク ナルカラ デス。

マンシュージンノ コドモワ、キデ コシラエタ コマオ、コーリ

ノ　ウエデ　マワシテ　アソビマス。ホソイ　ボーノ　サキニ　ヒモ。
オ　ツケテ、ソノ　ヒモデ　コマノ　ハラオ　タタキマス。スルト、
コマワ　イキオイヨク　グングン　マワリマス。ホッペタオ　ツメタ。
イ　カゼニ　アカクシナガラ、ムチューニ　ナッテ　マワシマス。

十一　カガミ

ネーサン

ハナコサンワ、ヒノ　アタル　トコロエ、チーサナ　カガミオ　モ。
ッテ　デマシタ。

カガミデ　ヒノ　ヒカリオ　ウケルト、キラキラ　ヒカリマス。ハ。
ナコサンワ、ソノ　ヒカリオ、ニカイノ　マドノ　ショージニ　アテ。
テ、ミマシタ。スルト、ソノ　ショージオ　アケテ、ナカカラ　ネー。
サンガ　ノゾキマシタ。ハナコサンワ、ネーサンノ　カオエ　ヒカリ。
オ　アテマシタ。ネーサンワ、

「オー、マブシー。」
ト　イッテ、テデ　カオオ　カクシマシタ。ソーシテ、
「イタズラナ　ハナコサンネ。」
ト　イッテ、ワライマシタ。

オンドリ

イサムサンガ、エンガワデ、カガミオ　モッテ　アソンデ　イマシ。
タ。ソコエ、イサムサンニ　ヨク　ナレタ　オンドリガ、エサデモ
モラエルノカト　オモッテ、ヤッテ　キマシタ。
イサムサンワ、オンドリニ　カガミオ　ミセマシタ。
オンドリワ、チョット　オドロイテ、ニゲダソート　シマシタガ、
キューニ　ヒキカエシテ、カガミノ　ホーエ　ヨッテ　キマシタ。
オンドリワ、クビノ　ケオ　サカダテテ、カガミニ　ウツル　ジブ。
ンノ　カゲオ　メガケテ、トビツイテ　キマス。カガミノ　ナカノ
オンドリモ、クビノ　ケオ　サカダテテ　イマス。

「オヤ、ジブンノ　カゲオ、ホカノ　オンドリト　オモッテ　イルノ
ダナ。」
ト、イサムサンワ　オモイマシタ。
オンドリワ、チカライッパイ　カガミオ　クチバシデ　ツツキマス。
タイヘンナ　ケンカニ　ナリマシタ。
イサムサンワ、カワイソーニ　ナッテ、カガミオ　ヒッコメマシタ。
スルト、オンドリワ、ゲンキヨク　ハバタキオ　シナガラ
「コケコッコー。」
ト　コエタカク　ウタイマシタ。
オカーサン
ムカシ、コーコーナ　ムスメガ　アリマシタ。オカーサンガ、ナガイ　アイダ　ビョーキデ、ネテ　イマシタノデ、ヒルモ　ヨルモ、イッシンニ　カイホーシマシタガ、ビョーキワ　ワルク　ナルバカリデシタ。

アルヒ、オカーサンワ　ムスメオ　ソバエ　ヨンデ、ナニカ　ツツンダ　モノオ　ワタシマシタ。
「コレオ　オマエニ　アゲルカラ、ダイジニ　シマッテ　オーキナサイ。モシ　オカーサンニ　アイタカッタラ、コレオ　アケテ　ゴランナサイ。」
ト　イッテ、オカーサンワ、マモナク　ナクナッテ　シマイマシタ。
ムスメワ　ナイテ　カナシミマシタガ、シカタガ　アリマセン。ソレカラワ、オトーサント　フタリデ、サビシク　クラシテ　イマシタ。
ムスメワ、フト、オカーサンノ　クダサッタ　モノノ　コトオ　オモイダシマシタ。ソット　ヒトマエ　ハイッテ、ツツミオ　アケテミマスト、ナカカラ　デタノワ、イチマイノ　カガミ　デシタ。
マダ、カガミト　ユー　モノガ、メッタニ　ナイ　コロノ　コトデシタカラ、ムスメニワ、ソレガ　ナンデ　アルカ　ワカリマセンデシタ。

ソット　ノゾイテ　ミルト、オンナノ　カオガ　ウツッテ　イマス。コドモノヨー　デスガ、ナクナッタ　オカーサンニ　ソックリ　デシタ。ムスメワ　オモワズ、

「オカーサン。」

ト　イッテ、カガミオ　ダキシメマシタ。

十二　カミダナ

モー　スグ　オショーガツナノデ、オジーサンワ、カミダナオ　オカザリニ　ナリマシタ。

アタラシー　シメナワオ　ハッタリ、サカキオ　アゲタリ　ナサイマシタ。

チーサイ　サンボーニ、シロイ　カミト　ウラジロオ　シーテ、カガミモチオ　ノセテ　オソナエニ　ナリマシタ。オミキモ　オソナエニ　ナリマシタ。

ソレカラ、オザシキノ　トコノマニモ、カガミモチオ　オカザリニ　ナリマシタ。

オジーサンワ、

「サー、コレデ　イツ　オショーガツガ　キテモ　イーゾ。」

ト　オッシャイマシタ。

ユーガタ、カミダナニ　アカリオ　アゲテ、ミンナデ　オガミマシタ。

チーサイ　オトートガ、

「カミサマ、オヨロコビネ。」

ト　イーマシタ。

アタラシー　シメナワ、シロイ　カミ、ウラジロノ　ハ、ナニモカモ　サッパリト　キレーニ　ミエテ、モー　オショーガツニ　ナッタヨーナ　キガ　シマシタ。

十三　シンネン

カドマツ　タテテ、シメカザリシテ、
ウチジュー　ソロッテ、
シンネン　オメデトー　ゴザイマス。

オミヤエ　マイッテ、ガッコーエ　イッテ、
「キミ**ガ**ヨ」ウタッテ、
シンネン　オメデトー　ゴザイマス。

タコア**ゲ**シタリ、ハネツキシタリ、
ミンナ　ニコニコ、
シンネン　オメデトー　ゴザイマス。

カキゾメノ　ジワ「ショーワノ　ヒカリ」、
ジョーズニ　デキテ、
シンネン　オメデトー　ゴザイマス。

十四　ユービン

イママデ、ハネオ　ツイテ　イタ　ハナコサント　ハルエサンワ、
コンドワ、ユービン**ゴ**ッコオ　スルコトニ　シマシタ。
ハナコサンワ、オトートノ　イチローサンオ　ヨンデ　キマシタ。
イチローサンワ　ヨロコンデ、アオイ　カミオ　チーサク　キッテ、
キッテオ　コシラエマシタ。
ハルエサンワ、ハ**ガ**キト　フートーオ　コシラエマシタ。
ハナコサンワ、オカーサンカラ　オーキナ　カミノ　ハコオ　イタ。
ダイテ　キテ、ポストオ　コシラエマシタ。
ハナコサント　ハルエサンワ、エン**ガ**ワデ、リョーホーニ　ワカレ。

テ　スワリマシタ。イチローサンワ、マンナカニ　ポストオ　オイテ、
ソノ　ソバニ　スワリマシタ。
ハナコサント　ハルエサンワ、ダマッテ　ナニカ　カキハジメマシタ。
ソノ　アイダニ、イチローサンワ、カバンオ　トリニ　イキマシタ。
イチローサン**ガ**、モトノ　トコロエ　カエッテ　キマスト、ポストノ
ナカニワ、モー　ニマイノ　ハ**ガキガ**　ハイッテ　イマシタ。イチロー
サンワ、ソレオ　カバンニ　イレテ、クバリニ　デマシタ。
「スズキサン。」
ト　イッテ、イチマイオ　ハナコサンニ　ワタシマシタ。
「ハヤシサン。」
ト　イッテ、イチマイオ　ハルエサンニ　ワタシマシタ。
ハナコサンワ、ニコニコシテ　ヨミマシタ。
「シンネン　オメデトー　ゴザイマス。」

ハルエサンモ、ウケトッタ　ハ**ガ**キオ　ヨンデ　ミマスト、ヤッパリ、
「シンネン　オメデトー　ゴザイマス。」
ト　カイテ　アリマシタ。
「アラ、オンナジ　デスネ。」
ト　イッテ、フタリトモ　ワライマシタ。
イチローサン**ガ**　オーキナ　コエデ、
「モー　アリマセンカ。アッタラ　ハヤク　ダシテ　クダサイ。」
ト　イーマシタ。
ハナコサンワ、
「コンドワ、ワタクシ**ガ**　サキニ　カキマスカラ、ハルエサン、ゴヘ
ンジオ　クダサイ。」
ト　イッテ、テ**ガ**ミオ　カキマシタ。ソーシテ、イチローサンノ　ト
コロエ　モッテ　イッテ、
「ヨンセンノ　キッテオ　イチマイ　クダサイ。」

ト　イーマシタ。
イチローサンガ　キッテオ　ワタシマスト、ハナコサンワ　ソレオ
ハッテ　ポストエ　イレマシタ。
イチローサンワ、ソノ　テガミオ　ハルエサンノ　トコロエ　モッ
テ　イッテ、
「ハヤシサン。」
ト　イッテ、ワタシマシタ。
ハルエサンガ　アケテ　ミマスト、
「アシタカラ　ガッコーガ　ハジマリマスガ、マタ　イッショニ　イ
キマショー。アサ　サソッテ　クダサイ。」
ト　カイテ　アリマシタ。
ハルエサンワ、
「オテガミオ　クダサッテ、アリガトー　ゴザイマス。アシタノ　ア
サ　キット　オサソイシマスカラ、マッテ　イテ　クダサイ。」

ト　カイテ、キッテオ　ハッテ　ポストエ　イレマシタ。

十五　ニーサンノ　ニューエー

セーネンガッコーノ　フクオ　キテ、アカイ　タスキオ　カケタ
ニーサンワ、シンルイノ　ヒトタチニ　オクラレテ、ヘーエーノ　モ
ンマデ　キマシタ。
ニーサンワ、ココデ　ミンナニ　アイサツオ　シテ、モンノ　ナカ
エ　ハイリマシタ。オトーサント　ワタクシモ　ハイリマシタ。
モンオ　ハイルト、エーヘージョニ、ヘータイサンガ　シチハチニ
ン　コシオ　カケテ　イマシタ。
ヒロイ　ニワノ　ナカホドニワ、ナンボンモ　タテフダガ　タテテ
アリマシタ。
ニーサンワ、ヘータイサンニ　アンナイサレテ、ソチラエ　イキマ
シタ。ニーサント　オナジョーナ　ヒトガ、タクサン　イマシタ。

キンスジノ　エリショーオ　ツケタ　ヘータイサン**ガ**　キテ、ナオヨビハジメマシタ。ダンダン　ヨンデ　イッテ、

「ヤマダ　タケシ。」

ト、ニーサンノ　ナオ　ヨビマシタ。ニーサンワ　オーキナ　コエデ、

「ハイ。」

ト　コタエマシタ。ワタクシワ、ナンダカ、ジブン**ガ**　ヨバレタヨー!

ニ　オモイマシタ。

ヒロイ　ニワノ　ムコーニ　ヘーシャ**ガ**　タッテ　イマス。ソコエニーサンタチワ　イキマシタ。

オトーサント　ワタクシワ、ツキソイノ　ヒトタチノ　ヤスム　トコロデ　マッテ　イマシタ。ソノマニ　ノッタ　グンジンサン**ガ**、モンオ　ハイッテ　クルト、エーヘージョニ　イル　ヘータイサン**ガ**、

「ケーレー。」

ト　ゲンキナ　コエデ　イッテ、タチア**ガ**ッテ　ケーレーオ　シマシ

タ。

マモナク、アタラシー　グンプクオ　キタ　ヒトリノ　ヘータイサンガ、ワタクシタチノ　トコロエ　キマシタ。ミルト、ソレ**ガ**　ニーサン　デシタ。ミチ**ガ**エルホド　リッパナ　ヘータイサンニ　ナッテイタノデ、ワタクシワ　ビックリシマシタ。ニーサンワ、

「オトーサン、オマタセシマシタ。クニオ、コレワ　ニーサン**ガ**　キテ　イタ　フク　ダ。オマエ　モッテ　カエッテ　オクレ。」

ト　イッテ、フロシキズツミオ　ワタシマシタ。

ニーサンノ　アカイ　エリショーニワ、ホシ**ガ**　ヒトツ　ツイテイマシタ。オトーサンワ、ニコニコシテ、

「リッパナ　ヘータイサン　ダナ。コレナラ、ゴホーコーモ　デキヨー。シッカリ　タノムヨ。」

ト　オッシャイマシタ。

十六　ユキノ　ヒ

チラ　チラ　チラト
ユキガ　フル。
スズメ　オヤコノ
モノガタリ。

「ヤマワ　オーユキ、
ヒワ　クレル。
カラスガ　イソイデ
カエッタヨ。

カラスノ　カンタワ
サムカロー。

サ、ヤスモーヨ。」ト
オヤスズメ。

「ヤスミマショー。」ト
コスズメガ、
「コンヤワ　ダイブ
ツモル　デショー。」

スズメ　オヤコノ
ネタ　アトワ、
サラ　サラ　サラト
ユキノ　オト。

十七　シロウサギ

シロウサギガ、シマカラ ムコーノ リクエ イッテ ミタイト
オモイマシタ。
アルヒ、ハマベエ デテ ミルト、ワニザメガ イマシタノデ、コ
レワ ヨイト オモッテ、
「キミノ ナカマト ボクノ ナカマト、ドッチガ オーイカ、クラ
ベテ ミヨーデワ ナイカ。」
ト イーマシタ。ワニザメワ、
「ソレワ オモシロカロー。」
ト イッテ、スグニ ナカマオ オーゼー ツレテ キマシタ。シロ
ウサギワ ソレオ ミテ、
「キミノ ナカマワ ズイブン オーイナ。ボクラノ ホーガ マケ
ルカモ シレナイ。ボクガ、キミラノ セナカノ ウエオ、カゾエ
ナガラ トンデ イクカラ、ムコーノ リクマデ ナランデ ミタ
マエ。」

ト イーマシタ。
ワニザメワ、シロウサギノ ユー トーリニ ナラビマシタ。シロ
ウサギワ、「ヒトツ、フタツ、ミッツ、ヨッツ。」ト カゾエナガラ、ワ
タッテ イキマシタ。モー ヒトアシデ リクエ アガロート ユー
トキ、シロウサギワ、
「キミラワ ンマク ダマサレタナ。ボクワ ココエ ワタッテ キ
タカッタノ ダ。アハハハ」
ト イッテ、ワライマシタ。
ワニザメワ ソレオ キクト、タイソー オコリマシタ。イチバン
シマイニ イタ ワニザメガ、シロウサギオ ツカマエテ、カラダノ
ケオ ミンナ ムシリトッテ シマイマシタ。
シロウサギワ イタクテ タマリマセン、ハマベデ シクシク ナ
イテ イマシタ。ソノトキ、オーゼーノ カミサマガ オトーリニ
ナッテ、

「オマエ、ナゼ　ナイテ　イルノカ。」
ト　オタズネニ　ナリマシタ。シロウサギガ　イママデノ　コトオ
モーシマスト、カミサマワ、
「ソレナラ、ウミノ　ミズオ、アビテ、ネテ　イルガ　ヨイ。」
ト　オッシャイマシタ。
シロウサギワ　スグ　ウミノ　ミズオ　アビマシタ。スルト、イタ
ミガ　イッソー　ヒドク　ナッテ、ドーニモ　タマラナク　ナリマシタ。
ソコエ、オークニヌシノミコト　ト　ユー　カミサマガ　オイデニ
ナリマシタ。コノ　カタワ、サキホド　オトーリニ　ナッタ　カミサ
マガタノ　オトートサン　デス。アニサマガタノ　オモイ　フクロオ
セオッテ　イラッシャッタノデ、オソク　オナリニ　ナッタノ　デス。
コノ　オークニヌシノミコトモ、
「オマエ、ナゼ　ナイテ　イルノカ。」
ト　オタズネニ　ナリマシタ。シロウサギワ　ナキナガラ、マタ　イ

ママデノ　コトオ　モーシマシタ。オークニヌシノミコトワ、
「カワイソーニ。ハヤク　カワノ　ミズデ　カラダオ　アラッテ、ガ
マノ　ホ　オ　シーテ、ソノ　ウエニ　コロガルガ　ヨイ。」
ト　オッシャイマシタ。
シロウサギガ　ソノ　トーリニ　シマスト、カラダワ、スグ　モト
ノヨーニ　ナリマシタ。ヨロコンデ　オークニヌシノミコトニ、
「オカゲデ　スッカリ　ナオリマシタ。アナタワ、オナサケブカイ
オカタ　デスカラ、イマワ　オモイ　フクロオ　セオッテ　イラッ
シャッテモ、ノチニワ　キット　オシアワセニ　オナリ　デショー。」
ト　モーシマシタ。

十八　タコアゲ

オジサン、コノアイダ　ツクッテ　イタダイタ　タコオ、キョー
アゲテ　ミマシタ。ホントーニ　ヨク　アガリマシタ。

アノ　ヒカラ、マイニチ　ユキガ　フッタリ　アメガ　フッタリシテ、アゲラレナカッタノ　デスガ、キョーワ　ヨイ　オテンキ　デシタ。ソレニ、ニチヨーナノデ、アサカラ　アゲテ　アソビマシタ。

アノ　タコオ、ジロート　フタリデ　ソトエ　モッテ　デタ　トキワ、ミンナガ、「ヘンナ　タコ　ダ。」ト　イッテ、ワライマシタ。コンナ　タコワ、イママデ　ダレモ　ミタ　コトガ　ナイノ　デショー。クチワルノ　サンチャンワ、

「ナン、ダ、ホネガ　ニホンシカ　ナイジャ　ナイカ。コンナ　モノガ　アガル　モノカ。」

ト　イーマシタ。ボクワ　ダマッテ　イマシタ。

ミンナ、メーメーノ　タコオ　アゲテ　イマス。

ジローニ　タコオ　モタセ、ボクワ　イトオ　スコシ　ノバシテ、カゼニ　ムカッテ　ハシリマシタ。タコワ　スット　アガリマシタ。ケレドモ、ソラデ　ニサンベン、マワッテ、オチテ　シマイマシタ。

「ヤーイ。」

ト　イッタノワ、ヤハリ　サンチャン　ダッタヨー　デス。

オジサンニ　オシエテ　イタダイタヨーニ、タコノ　イトメオ　ナオシテ、シタイトオ　スコシ　ツメマシタ。コンドワ　アガリマシタ。ジューメートルバカリ　イトオ　ダシテ、カゲンオ　ミテ　イマスト、タコワ　ヒダリノ　ホーエ　カタムキマス。ソレデ　マタ　オロシテ、タコノ　ミギノ　カタエ、カミノ　テープオ　ツケマシタ。

サンドメニ　アゲタ　トキワ、タコワ　マッスグニ　アガリマシタ。チョード　ヨイ　カゼガ　フイテ　キテ、イトオ　ノバスト　グング、ン　アガリマス。シゴジューメートル　ノバシタ　トキワ　ダレノ　タコヨリモ　タカク　アガッテ　イマシタ。ジローワ　ヨロコンデ、

「バンザイ。」

ト　イーマシタ。

ボクワ　イトオ　ドンドン　クリダシマシタ。ミンナガ、

「ワアッ。」
ト イーマシタ。
トートー、ヒャクゴジューメートルノ イトオ ミンナ ダシマシタ。ダレノ タコ ダッテ、ボクノ タコノ アシモトニモ ヨリツケマセン。ホカノ タコワ、シタノ ホーデ アガッタリ オチタリシテ、イマスガ、ボクノ タコワ、タカイ ソラニ チーサク ミエテ、スワッタヨーニ ウゴキマセン。
ミンナガ ボクラノ ソバエ キテ、
「ヨク アガッテ イルナ。」
「チョット イトオ モタセテ クレタマエ。」
「ヨク ヒッパッテ イルナ。」
ナドト イーマス。
ボクモ ジローモ、ウレシクテ ウレシクテ タマリマセン。コノヨク アガッタ トコロオ、オジサンニ ミセテ アゲタイト オモ

イマシタ。

十九 マメマキ

キョーワ セツブンデ、マメマキノ ヒ デス。
「タロー、コトシカラ オマエガ マクノ ダ。」
ト、オトーサンガ オッシャイマシタ。
オカーサンワ、マメオ タクサン イッテ マスニ イレ、カミダナニ オソナエニ ナリマシタ。ボクワ、ハヤク バンニ ナレバヨイト オモイマシタ。
ダンダン ウスグラク ナルト、アチラデモ コチラデモ、マメマキノ コエガ キコエマス。オトーサンガ、
「ウチデモ ソロソロ ハジメルカネ。」
ト オッシャッテ、カミダナカラ、マスオ オロシテ クダサイマシタ。

ボクワ、スコシ　キマリガ　ワルカッタガ、オモイキッテ、
「フクワ　ウチ、オニワ　ソト。」
ト　コエオ　ハリアゲテ、マメオ　マキマシタ。ホーボーノ　ヘヤオ
マイテ　アルクト、イモートヤ　オトートガ　アトカラ　ツイテ　キ
テ、「キャッ、キャッ」ト　オーサワギオ　シテ、マメオ　ヒロイマシ
タ。
ボクモ　オモシロク　ナッテ、ダンダン　オーキナ　コエオ　ダシ
ナガラ、マメオ　マキマシタ。ソノウチニ　ウッカリシテ、「オニワ
ウチ、フクワ　ソト。」ト　イッタノデ、ミンナガ　ワライマシタ。
シマイニ　エンガワエ　デテ、「オニワ　ソト、オニワ　ソト。」ト
イーナガラ、マメオ　ニワエ　ムカッテ　ゲンキヨク　マキマスト、
オカーサンガ　アマドオ　ピシャリト　オシメニ　ナリマシタ。
ソレカラ、ミンナデ　マメオ　トシノ　カズダケ　タベマシタ。

二十　キンシクンショー

グンジンサンノムネワ、
クンショーデイッパイデス。
ハナノヨーナクンショー、
ヒノマルノヨーナクンショー、
キンノトビノキンシクンショー。

ムカシ、ジンムテンノーノオユミニトマッタ
アノキンノトビガ、
イマ、グンジンサンノムネニカガヤイテ、
リッパナテガラオ
アラワシテイルノデス。

二十一　ビョーインノヘータイサン

コノマエノニチヨービニ、ヘータイサンノビョーインエ、イモンニイキマシタ。センソーデキズオウケタリ、ビョーキニナッタリシタヘータイサンガ、オーゼーイラッシャイマシタ。ソノカタガタエ、ハナオサシアゲマシタ。ソレカラ、ガッコーノコトヤ、ウチノコトナド、イロイロオハナシシマシタ。

ヘータイサンタチワ、タイソーヨロコンデクダサイマシタ。

ワタクシワ、マタ、キットオミマイニマイリマストイッテ、カエリマシタ。

シゴニチタッテ、ヘータイサンカラ、オテガミガマイリマシタ。

コノアイダワ、オミマイクダサッテアリガトー。アナタガタノヨーナコドモサンガ、イモンニキテクダサルト、ワタクシタチワ、ホントーニウレシーノデス。アナタノイラッシャッタトキワ、スコシキズガイタンデイマシタガ、アナタノオハナシガオモシロカッタノデ、イタミモワスレルホドデシタ。

キレーナハナオ、ワザワザモッテキテクダサッテ、アリガトー。アノハナガ、ワタクシノマクラモトデ、イマモマダサイテイマス。カラシテワタイヘンダトオモッテ、マイアサ、ミズオトリカエテイマス。

コノツギニワ、ナニカ、イモンヒンオモッテキテクダサルトノコトデシタガ、ソンナシンパイオシナイデクダサイ。アナタガタガキテ、オハナシオシテクダサルノガ、ナニヨリモウレシーノデス。ソノカワリ、コンドワ、コノマエノヨーニ、ハズカシガラナイデ、ゼヒ、ユーギオシテミセテクダサイ。

アレカラ、キズモダンダンイタマナクナリマシタ。コノツギニオアイスルトキニワ、センソーノコトヤ、シナノコドモノオハナシオシテアゲマショー。

二十二　シナノコドモ

ココワ、シナノアルマチデス。

セマイトーリニワ、アカイローソクヤ、ニワトリノタマゴヤ、アヒルノタマゴヤ、ニンニクヤ、ハスノミナドオ、トグチニナラベテイルミセガアリマス。ノキサキニ、オーキナブタノニクオブラサゲ、オーキナホーチョーデ、ヒトキレヒトキレキリトッテ、ウッテイルミセモアリマス。

イマ、ニッポンノヘータイサンガ、クルマニイッパイニモツオツンデ、コノトーリニサシカカリマシタ。マチノオトコヤオンナタチガ、コノヘータイサンニ、テーネーニアイサツシマス。ナニカワカラヌコトオ、ガヤガヤハナシタリ、ニコニコワラッタリシナガラ、タチドマッテ、ヘータイサンオミテイルモノモアリマス。

コノセマイトーリニワ、カイモノオスルヒトタチガタクサンイルノ

デ、ヘータイサンワ、クルマオヒキナガラ、トキドキ、

「チョットゴメンヨ。」

トイイマス。スルト、ミンナワ、スグヨケテヘータイサンオトーラセマス。

トーリオヌケテ、マチノイリグチノモンノトコロマデキマスト、ソコニワ、ニッポンノヘータイサンガ、ジューオモッテバンオシテイマス。クルマオヒーテイルヘータイサンガ、ケーレーオシマス。バンオシテイルヘータイサンモ、ケーレーオシマス。クチニワイーマセンガ、オタガイニ、

「ゴクローサマ。」

「ゴクローサマ。」

ト、ココロノナカデイッテイルニチガイアリマセン。

モンオスギルト、ヒロバガアリマス。ソコデアソンデイルシナノコドモタチガ、クルマオヒーテイルヘータイサンオミルト、

「ヘータイサン。」
「ヘータイサン。」
トイッテ、ヤッテキマシタ。
コドモタチワ、チャント、「ヘータイサン」トユーニッポンゴオ、オボエテイルノデス。デモ、ソノアトワ、ガヤガヤナニカワカラヌコトオイーナガラ、サンヨニンワ、クルマノカジボーニトリツキマス。オクレテキタニサンニンワ、クルマノアトオシオシマス。ミンナイッショーケンメーデス。
コーシテ、タクサンノシナノコドモタチニテツダワレナガラ、ニッポンノヘータイサンワ、ニコニコシテクルマオヒーテイキマス。
スルト、トツゼンヒトリノコドモガ、オーキナコエデ、
アオゾラタカク
ヒノマルアゲテ、
トウタイダシマシタ。ソレニツイテ、コドモタチワコエオソロエテウ

タイマシタ。
アオゾラタカク
ヒノマルアゲテ、
アー、ウツクシー、
ニホンノハタワ。

二十三　オヒナサマ

ハルガキマシタ、オヒナサマ。
サーサ、カザッテアゲマショー。
マー、オヒサシー、ダイリサマ。
アナタワイチバンウエノダン。
アカイハカマノカンジョサン、

サンニンナランデツギノダン。

フエヤタイコデニギヤカナ
ゴニンバヤシワサンノダン。

カザレバミンナニコニコト、
オウレシソーナオヒナサマ。

アラレ、ヒシモチ、モモノハナ、
ナタネノハナモソナエマショー。

二十四　キタカゼトミナミカゼ

キタカゼトミナミカゼワ、タイソーナカガワルイヨーデス。
フユノアイダワ、サムイキタカゼガ、ビュービュートフキマワッテ、

ユキヤアラレオフラセタリ、ミズオコーラセタリシマス。
シカシ、キタカゼガスコシユダンオシテイルト、アタタカイミナミカゼガ、ソットヤッテキマス。ソーシテ、キタカゼノツクッタユキノヤママヤ、コーリノイケオ、スコシデモトカソートシマス。スルト、キタカゼワ、スグ、ミナミカゼオオイハライマス。
コンナコトオ、ナンベンモクリカエシテイルウチニ、フユガオワリニチカズキマス。イママデワ、ウトウトネムッテ、ヨワイヒカリオダシテイタオヒサマガ、メオサマシテ、アタタカイヒカリオオクルヨーニナリマス。
コーナッテクルト、ミナミカゼワ、モーマエノヨーニマケテバカリワイマセン。
「キタカゼ、オマエワ、モーキタノクニエカエッテシマエ。」
ト、ミナミカゼガイーマス。スルト、キタカゼワ、
「ナーニ、マダオマエノデテクルトキデワナイ。ワタシワ、モーイチ

ドオマエオオイハラッテ、ノヤヤマオマッシロニシテヤル。」
トコタエマス。ソーシテ、アリッタケノチカラオダシテ、ミナミカゼ
オオイタテマス。ノヤヤマガ、マタ、ユキデマッシロニナリマス。
シカシ、ミナミカゼワ、スグニゲンキオトリカエシマス。ミナミノ
クニカラ、オーゼーノナカマオツレテキテ、キタカゼオドシドシトオ
イマクリマス。ユキデモコーリデモ、カタハシカラトカシテ、ノヤヤ
マオアタタカクシマス。アタタカイアメオ、ナンベンカフラセマス。
スルト、クサヤキガ、ダンダントメオフキ、ハナノツボミガフクラン
デキマス。
ミナミカゼワイーマス。
「キタカゼガ、ユキヤコーリデ、ノヤマオマッシロニシタカワリニ、
ワタシワ、アカイハナヤ、ミドリノワカクサデ、ノヤマオカザッテ
ミセヨー。」

二十五　ハゴロモ

シロイハマベノ
マツバラニ、
ナミガヨッタリ、
カエッタリ。

カモメスイスイ
トンデイク、
ソラニカスンダ
フジノヤマ。

ヒトリノギョフガ、ミホノマツバラエデテキマス。
ギョフ「キョーワ、ヨイオテンキダ。ナントマー、ヨイケシキダロー。」
ケシキニミトレナガラアルイテイマスト、ドコカラカ、ヨイ

ニオイガシテキマス。ミルト、ムコーノマツノエダニ、キレーナモノガカカッテイマス。

ギョフ「アレワナンダロー」。

ギョフワ、ソバエヨッテヨクミマス。

ギョフ「キモノダナ。コンナキレーナキモノワ、ミタコトガナイ。モッテカエッテ、ウチノタカラニシヨー」。

ギョフワ、ソノキモノオトッテ、モッテイコートシマス。

マツノキノウシロカラ、ヒトリノオンナガデテキマス。

オンナ「モシ、ソレワワタクシノキモノデゴザイマスガ、ドーナサルノデゴザイマスカ」。

ギョフ「イヤ、コレワワタクシガヒロッタノデス。モッテカエッテ、ウチノタカラニショートオモイマス」。

オンナ「ソレワ、テンニンノハゴロモトモーシマシテ、アナタガタニワゴヨーノナイモノデゴザイマス。ドーゾ、オカエシクダサイマセ」。

ギョフ「テンニンノハゴロモナラ、ナオサラオカエシワデキマセン。コノクニノタカラニイタシマス」。

テンニン「ソレガナイト、テンエカエルコトガデキマセン。ドーゾ、オカエシクダサイマセ」。

ギョフ「イヤ、カエサレマセン」。

テンニンワ、カナシソーナカオオシテ、ジットソラオミアゲマス。テンニンノシオレタヨースオミテ、

ギョフ「オキノドクデスカラ、ハゴロモオオカエシイタシマショー」。

テンニン「ソレワ、アリガトーゴザイマス。デワ、コチラエイタダキマショー」。

ギョフ「オマチクダサイ。テンニンノマイオ、マッテミセテイタダケマセンカ」。

テンニン「ソレデワ、オレーニマイマショー。デモ、ソノハゴロモガナイト、マウコトガデキマセン」。

ギョフ「トイッテ、ハ**ゴ**ロモオオカエシシタラ、アナタワ、マワズニカエッテオシマイニナルデショー。」
テンニン「テンニンワ、ウソトユーモノオシリマセン。」
ギョフ「アー、コレワ、ハズカシーコトオモーシマシタ。」
ギョフワハ**ゴ**ロモオカエシマス。テンニンワ、ソレオキテ、シズカニマイマス。
テンニン「ツキノミヤコノテンニンタチワ、ミンナソロッテマイジョーズ。
クロイコロモノソロイデマウト、ツキワマックロヤミノヨル。
シロイコロモノソロイデマウト、ツキワジュー**ゴ**ヤマンマルイ。」

テンニンワ、マイナ**ガ**ラ、ダンダンテンエノボッテイキマス。
ミ**ギ**ニ、ヒダリニ
ヒラヒラト、
ユレルタモト**ガ**
ウツクシー。
シロイハマベノ
マツバラニ、
ナミ**ガ**ヨッタリ、
カエッタリ。
イツノマニヤラ
テンニンワ、

ハルノカスミニ
ツツマレテ、

カモメスイスイ
トンデイク、
ソラニホンノリ
フジノヤマ。

綴り方指導要項

指導の發展段階

第一期　兒童の生活を言語によつて發表することになれさせ、次第に素朴簡易な文章表現に進め、綴り方の基礎的態度を養ふ。

第二期　兒童の見聞する事象、日常の行動などに就き、見方、考へ方を指導して生活を豐富にし、表現の意欲を旺盛ならしめる。

第三期　文の目的と用途とを明らかにして表現を的確多樣ならしめ、次第に國民生活の實際に應ずる表現の力を養ふ。

第四期　第三期に準じてそれを發展せしめ、國民的自覺を喚起して國語の豐かな表現になれしめる。なほ實務的文章にも習熟せしめる。

初等科第二學年

一　指導要項

○見たり聞いたり、讀んだり、行つたり、考へたりしたことを、そのままくはしく話すやうに書く態度を養ふ。

(イ)題材を兒童の身近な具體的な事象から取り、各自が書くやうに導く。

(ロ)題材の選擇がまだ十分に行へないから、思ひつくままを身についたことばで長く、くはしく書かせる。

(ハ)一面には斷片的、羅列的でもよいから、いつでも、どこからでも書き出させ、自發的に書く興味を引きだすことが大切である。

(ニ)行事その他、兒童にとつて大きなでき事を書く時には、めいめいが經驗したことから書かせるやうにし、概念的になることを避けさせる。時には綴り方のために環境をととのへてやるのもよい。

○生活を書きあらはすことの必要と價値を兒童にわからせ、書いたものが役に立つ喜びを感じさせる。

(イ)兒童の綴り方を相互に讀みあひ、適當に文例を與へ、話合などして、自分にも書ける、自分も書いてみようといふやうな氣持を起させる。

(ロ)教師・兩親・友だちなどを相手として、呼びかけの形で書くことになれさせる。

(ハ)繪日記・學級日記・動植物の觀察日記、栽培日記その外目的のきまつた日記を書かせるのもよい。

(ニ)感覺を自然にあらはし、自分の考へを率直に書くこと、對話を書き入れて、實況をはつきりさせることなどにつとめ、文を綴るおもしろさをわからせる。

(ホ)他教科・他科目と關聯して、取材の範圍を廣くさせる。

○まとめ方は兒童各自の經驗の順序、想ひ起す自然の順序に從ふといふ程度でよいが、次第に筋を立てるやうに導く。

(イ)生活經驗を想ひ起す機會を與へ、それを語らせ、その順序を整へ、自然の間にまとめ方をさとらせる。

(ロ)この學年の後半期頃から、讀書欲の高まるのが普通であるから、讀んだことを思ひ出させたり、話させたりする間に、おのづからまとめ方をさとらせ、又ことばに親しませるやうに導く。

(ハ)日記・手紙・詩などそれぞれ目的によつて書く心持に、おのづから違ひのあることをさとらせる。

○用語の醇化をはかり、正しい國語に對する語感を養ひ、漢字交りのひらがなによつて、正確に書かせる。

(イ)話し方と關聯して、いつも相手にはつきりとわかるやうなことばづかひやいひまはしで書くやうに工夫させる。

(ロ)濁音・促音・拗音等は正しく書かせ、カナヅカヒは習慣的に正しく書くやうに氣長に導く。

(ハ)句點・讀點・鈎・改行などは、行ひやすいものから順次に指導して使用させる。

(ニ)機會あるごとに、短文・詩などの聽寫・視寫を行ふ。

(ホ)訂正の方法を教へて、讀みかへしたり書きなほしたりする習慣をつけ、時々書き方と關聯して本文を清書させる。

二　指導要項例

第一學期

○心持の表現

よみかた・ヨイコドモなどと關聯して、二年生になつた喜び、春になつた嬉しさ、遠足や運動會やお節供などを待つ喜びなど、心持を書きあらはすやうにする。

ただ嬉しいとか、樂しいとかいふだけではなく、その嬉しいわけ、樂しいわけを書かせる。

○順序だつた敍述

(イ)ふだんの遊び、お手つだひ、いろいろな行事などで自分のしたこと、見たこと、聞いたことを順序だててくはしく書かせる。たとへ文章が長くなつても差支ない。

(ロ)事柄や、したことを書きながら、その間に、なるべく思つたこと、感じたことを書き入れるやうにする。

○觀察の記錄

(イ)うちの人、友だち、近所の人などを題材として、それらに就いて書かせる。

(ロ)理數科・藝能科と關聯して、自然に親しませ、變化の著しいものや、興味のあるものに就いては、觀察を續けさせて、文を書かせる。

(ハ)必要なときには、繪を書き入れさせる。

○繪日記・紙芝居の製作

(イ)樂しかつた行事や、おもしろかつた遊びなどを、繪日記として書かせる。

(ロ)讀み方教材や讀物を紙芝居風に作つて、演じさせ、話し方の修練に資する。

○手紙の文

手紙の形式にとらはれず、相手の前で話をしてゐるやうな心持で書くやうに導く。

○用語・用字・符號

(イ)「よみかた」と關聯して、漢字まじりのひらがなで書かせる。

(ロ)次第にことばづかひを正しく書かせる。

(ハ)句讀點・鈎をつけさせる。

○自分でなほすことの練習

(イ)自分の書いた文は、かならず讀みかへさせる。

(ロ)書き足りないところを補ふ仕方を教へる。

○他の人の文をよく聞くこと

(イ)他の人の文を讀むときは、それをよく聞いて、何が書いてあるか答へられるやうに導く。
(ロ)それに就いて、自分の思つたことをいはせ、話し方の練習に資する。

第二學期

○夏休の日記
(イ)日記を朗讀させ、またそれを陳列して、讀みあつたり、話しあつたりさせる。
(ロ)その日その日の題材のとらへ方、書きあらはし方のよいものをほめる。

○夏休中の生活記述
(イ)思ひ出したことを、みんなによくわかるやうに書かせる。
(ロ)一つのことに就いて、できるだけ順序だてて、くはしく書かせる。

○行動の敍述
(イ)遊んだこと、運動をしたこと、お手傳をしたことなどを題材として、文を書かせる。
(ロ)そのときの周圍の樣子や、背景などに就いて書きあらはさせる。
(ハ)誰が何をしたか、誰がなんといつたかなど、人物の動きも書きあらはさせる。

○觀察の記錄
(イ)秋から冬へかけての自然を、いろいろな角度から拾つて題材とする。
(ロ)お祭やそのほかの行事などで、見たこと、聞いたことをなるべくくはしく書かせる。

○手紙の文
(イ)相手にはつきりわかるやうに書かせる。
(ロ)相手によつてことばづかひに注意して書かせる。

○用語・用字・符號
(イ)「よみかた」と關聯して、漢字まじりのひらがなで書かせる。

(ロ)次第にことばづかひを正しく書かせる。
(ハ)句讀點鈎をつけさせる。

○自分でなほすことの練習

(イ)自分で書いた文は、かならず讀みかへさせる。
(ロ)書き足りないところを補ふ仕方を教へる。

○他の人の文をよく聞くこと

(イ)他の人の文を讀むときは、それをよく聞いて、何が書いてあるか答へられるやうに導く。
(ロ)それに就いて、自分の思つたことをいはせ、話し方の練習に資する。

第三學期

○お正月の綴り方

(イ)お正月の行事や遊びの中から、興味をひいたことを書かせる。
(ロ)お正月の繪日記を書かせる。

(ハ)樂しい心持があらはれるやうに工夫して書かせる。

○冬の遊び

(イ)戸外での活動的な場面を書かせる。
(ロ)いつしよに遊んだ人や、そのときの周圍の樣子も書かせる。

○讀み方教材を對話にする

(イ)「よみかた」の文章を對話に書きかへさせる。
(ロ)場面とか、トがきなどはむづかしいから、まだ書かせないでよい。
(ハ)書きあげられた對話を演じさせて、話し方の練習に資する。

○手紙の文

(イ)相手にはつきりわかるやうに書かせる。
(ロ)相手によつてことばづかひに注意して書かせる。

○用語用字符號

(イ)「よみかた」と關聯して、漢字まじりのひらがなで書かせる。
(ロ)次第にことばづかひを正しく書かせる。

(ハ)句讀點鈎をつけさせる。

○自分でなほすことの練習

(イ)自分で書いた文は、かならず讀みかへさせる。

(ロ)書き足りないところを補ふ仕方を敎へる。

○他の人の文をよく聞くこと

(イ)他の人の文を讀むときは、それをよく聞いて、何が書いてあるか答へられるやうに導く。

(ロ)それに就いて、自分の思つたことをいはせ、話し方の練習に資する。

○一年間の綴り方

一年間の綴り方をまとめさせ、よく讀みかへして生活を反省させる。

三、參考文題

（次に掲げた文題は指導上の參考に供するものである。これを手がかりとして題材を適當に選ぶべきである。）

第一學期

四月

二年生になつて

「今日から二年生など、二年生になつたうれしさ、樂しさに就いて自分の思つたこと、友だちやうちの人と話したことなどを書かせる。

しんたいけんさ

「その時の樣子、自分のこと、友だちのこと、身長や體重などをくらべることなどをくはしく。

天長せつの日

「式のこと、天長節の日にしたこと、感じたことなど。

花

「好きな花、庭の花、このごろのいろいろな花などできるだけ觀察を加へて。

うちの小鳥

「犬、猫、鷄その他の小動物でもよい。樣子をよく見て書かせる。

五月

うんどうくわい。
ゑんそく
（順序よく、自分のしたことを中心に書かせる。）

鯉のぼり
（鯉のぼりを中心にして節供の日のことを書かせる。鯉のぼりを作つたこと、揚げたことなどはできるだけくはしく。）

朝がほのたねまき
（種子をまいた日のこと、芽が出た日のことなど、觀察を續けさせて文を書かせる。）

このごろのうちのしごと
（たんぼのこと、濱邊のこと、蠶のことなど、自然の觀察と合はせて家の生活を書かせる。）

ささ舟・むぎぶえ
（ささ舟や麥笛を作つた經驗、工夫などをくはしく書かせる。）

六月

私のは
（むし歯豫防日に連絡して、歯をみがくこと、むし歯の痛んだ經驗、治療した時のことなどに就いてくはしく書かせる。）

雨の日
（雨の日に何をしたか、雨の日の遊び、雨の日の自分のうちや庭の樣子などを書かせる。）

むぎかり・田うゑ
（その時の樣子と、兄弟姉妹と手傳つたことなどをくはしく。）

金魚めだか
（その他、でんでんむし・魚とり・蛙など。遊びと觀察を織りまぜて。）

うちのとけい
（時の記念日に關聯してうちの時計のこと、時計に關する思ひ出、その他時計に就いての話を書かせる。）

七月

たなばた
（たなばたまつりの用意、誰と作つたか、その日のことなどをくはしく書かせる。）

おはかまゐり
（お墓まゐりのこと、お墓の掃除のこと、途中のことなど。）

朝がほの日き
（花の數、色などを、觀察を續けさせて繪日記風に。）

くも・きりぎりす・ばつた・せみ
（遊んでゐるうちに見たこと、おもしろいと思つたこと、不思議に感じたことなどを、その時の樣子とともに。）

花火・水でつ砲
（作つたことや遊んだことをくはしく。）

第二學期

九月

夏やすみ日きをよんで
（友だちの日記や繪日記を見たり讀んだりして、思ひ出したこと、氣づいたことを書かせる。）

こうあほうこう日（「ことばのおけいこ」と聯關して、こうあほうこう日にしたことなどに就いて、子どもらしい觀點から記述させる。）

二百十日（二百十日前後のあらしの様子を書かせる。庭の木や草花、田圃のこと、海邊のことなど。）

おひがん（お彼岸にしたこと、遊んだことなど。）

お月見（お月見の支度、おそなへもの、すすきをとりに行つたこと、その晩のことなどをくはしく。）

十月

うん動くわい（全體の様子、友だちの様子、遠足の途中の自然觀察など寫生風に書かせる。詩に書かせるのもよい。）

ろんそく

このごろのたんぼ（毎日の生活を背景にし、この頃の自然に親しませる目的で書かせる。）

海・山

やくにたつたこと（お手傳ひ、買物その他うちの生活の中で、自分が役に立つたこと。）

柿もぎ・栗ひろひ・きのことり（したこととともに自然を描かせる。）

讀んだ本のこと（雜誌や本で讀んでおもしろかつたお話を思ひ出して書かせる。）

十一月

明治節の日のこと（町の様子や、ラジオで聞いたことなどを書かせるのもよい。）

菊（うちの菊、よその菊、學校の菊、公園の菊など。）

私たちのうん動（どんな運動をしてゐるか。どんな運動が好きか。體育大會を見に行つたことなど。）

家のまはり（家のまはりや、通學途上の自然の様子をくはしく。）

戰地のにいさんへ（兄でなくとも、親戚・知己やその他の兵隊さんなどに宛てて、自分たちの學校のこと、村や町の様子などを書かせる。）

十二月

火の用心（火事を見た時のこと、火の用心の大切なわけなどを書かせる。）

ちよ金したこと（今までの貯金や献金などに就いて書かせる。）

けん金したこと（どうして貯金したか、又献金したか、その時の氣持などくはしく。）

みかん（蜜柑をたべたこと、蜜柑の形、色など。）

かんだんけい（うちの寒暖計、學校の寒暖計など、理數科とも聯關して。）

お正月のしたく　（餅つき、神だなさうち、買ひものなど、たのしいお正月を待つ氣持で。冬休の作業に備へて繪日記風に書かせるもよい。）

第三學期

一月

今年のお正月　（去年のお正月とちがつたことがあればそれを書かせる。ひきしまつた氣持で書かせる。）

ゑ日き　（正月四五日間の繪日記、適當に文章を挿入させる。）

すまふ　（大相撲のこと、自分たちの相撲のことなど。）

入營　（兄の入營、知人の入營などに就いて、うちを出る時、兄さんの樣子、見送りのことなど。）

見たえいぐわ　（お正月に見た映畫のこと、これまでに見た映畫のことなどを書かせる。）

二月

豆まき　（自分のうち丈での豆まきの樣子、家内中の年齡などに關聯して書かせる。）

雪の日　（雪の降つた日の樣子、自分のしたこと、遊んだことなど。）

病院の兵たいさんへ　（お話するやうに慰問の手紙を書かせる。）

病氣の友だちへ　（風邪をひいて休んでゐる友だちへあてて、學校のことなどをお話するやうに書かせる。）

學げいくわい　（學藝會の全體にわたつて書かせる。特におもしろかつたことはくはしく。）

三月

お節く　（去年のお節供と異なつたところがあればそれを書かせる。今年のお節供の樣子を書かせる。）

おかあさんへの手紙　（地久節、母の日に關聯して母親に送る手紙のかたちで、このごろの自分のしたこと、學校のことなどに就いて書かせる。）

春をさがす　（春はどこに來てゐるか、自然への觀察、季節の草花などに就いて書かせる。）

三年生になる　（三年生になるよろこび、うれしさを主として、自分の一、二年生時代の思ひ出、三年生になつてからの覺悟などを書かせる。）

話し方指導要項

指導の發展段階

第一期

兒童と話をするあらゆる機會に留意して、はつきりとおちついてものをいふやうに導き、「ヨミカタ」で得たことばを手がかりとして發音や語法を訓練し、次第に生活の中に活用するやうにつとめる。又人の話を注意して聽くやうに仕向ける。

第二期

兒童の見たこと、聽いたことなどに就いて、順序だてていへるやうにし、ことばづかひや、いひまはしなどを正しくするやうに導き、人の話をよく聽く態度を養ふ。

第三期

自分のいはうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふ。

第四期

同じ話でも、相手にわかりやすく、しかも興味深く語り、上品なことばづかひをするやうに導き、又男女によつて、ことばづかひに違ふ點もあることをわきまへて話すやうにさせる。

なほ、話をしたり聞いたりするときには、相手の心持をくむことが大切であることを知らせ、その心がまへを養ふ。

初等科第一・二學年

指導要項

(一)話し方は、讀み方指導を中心に、これが基本的指導をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1)讀み方、話し方を一體と考へ、讀み方の教材たる挿畫(掛圖)文章等を中心として、話合をさせる。

(2)話合に於いては、すべての兒童に話す機會を與へることにつとめて、言語發表を盛にし、これを適正に指導する。特に言語發表を嫌つたり、臆したりするものには、適當な方法を講じ先づ氣輕に話すやうに仕向ける。

(3)讀み方教材を通して、正しい發音、ことばづかひになれさせ、教材を朗讀暗誦すること、言語を身振にあらはすこと、對話を實演することなどにより、正しい話し方に導く。

(二)話し方は、綴り方指導に於いても、これが積極的指導を行ひ、特に左の事項に留意する。

(1)綴らうとする主題を中心にして、兒童の見たこと、聽いたこと、考へた

こと等の話合をさせ、言語發表の修練をさせる。

(2)綴り方を單に書かせるだけでなく、それを朗讀し、また聽くことになれさせ、まとまつた話をしたり、聽いたりする修練をさせる。

(3)兒童の綴り方を中心として、いろいろな話合をさせ、これを話し方として適正に指導する。

(三)他教科、他科目の指導と聯關して、常に言語修練をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1)修身・禮法と聯關して、挨拶・返事・姿勢・態度等の躾をなす。

(2)音樂と聯關して、發音・發聲を正すことにつとめる。

(3)理數科に於ける觀察や作業と聯關して、事物事象とことばとの正しい結合を圖り、正確な言語の使用に導く。

(4)兒童の圖畫・工作に就いて、自分の經驗や思つたことを發表させ、話し方の修練をなす。

(5)お話會・學藝會等に於いて、他教科・他科目の學習、諸行事・童話・讀物等を

K131.8-5-42

話題として、大勢の前で話すことの初歩的指導をなす。

(四)話し方の指導は、兒童の生活のあらゆる機會に於いて行ひ、常にその場その場に於ける言語修練に留意する。

(1)特に初期の話し方指導に於いては、教師は兒童の親しい話相手となり、話の誘導者となり、又兒童相互の仲介者となつて、すべての兒童に氣輕に話す機會を與へることにつとめる。

(2)教室に於ける問答、話合はもとより、教室外に於けることばづかひに就いても常に留意して、一般的または個人的に指導する。

(3)教師はつとめて醇正なことばを使用し、特にこの時期では、丁寧なことばづかひをして、兒童をして知らず識らずの中に、それに倣はせるやうにする。

(4)レコード・ラジオ等を選擇利用して、正しいことばになれさせる。

(5)家庭と協力して、挨拶その他日常語を正しく使ふやうに躾ける。

119
416

昭和十六年九月八日印刷
昭和十六年九月十一日發行
昭和十六年九月十一日翻刻印刷
昭和十六年九月三十日翻刻發行

よみかた四 教師用

新 定價金參拾九錢

昭和十六年九月十三日
文部省檢査済

著作權所有

著作兼發行者 文部省

翻刻發行兼印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地31 日本書籍株式會社
代表者 大橋光吉

印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 日本書籍株式會社工場

發行所 日本書籍株式會社